

南陽市遺跡分布調査報告書 (6)

2018年3月

南陽市教育委員会

南陽市遺跡分布調査報告書 (6)

南陽市埋蔵文化財調査報告書第18集

平成30年3月

南陽市教育委員会



沢田遺跡 (2)TT11 竪穴住居跡、水田面足跡、畦畔・溝跡

序

この度、「南陽市遺跡分布調査報告書（6）」を発行する運びとなりました。本書は、南陽市教育委員会が平成 29 年に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として各種の開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために実施した踏査、試掘調査、立会調査等の分布調査の成果をまとめたものです。

近年は、集合住宅建設や住宅地開発等の民間事業に関連した調査が増加し、市街地での建て替え等、市民に身近な地域での再開発も進んできており、埋蔵文化財の保護と調整は日常的な課題となっております。本報告書に記載のような地道な分布調査の積み重ねが地域の新たな歴史を判明することにつながります。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、旧石器時代から中世に至るまで、数多くの遺跡が存在します。人々が生活した住居跡・古墳・役所跡・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は、大地に埋まっている貴重な文化財であるため「埋蔵文化財」と呼ばれ、市内各地には、悠久の歴史を物語る埋蔵文化財が眠っております。土地を離れて人の生活は無く、その土地にはその土地の歴史が息づいております。埋蔵文化財は、その土地や地域の歴史を明らかにし、地域の宝として世代を越えて伝えられ、人々の地域への愛着やそこに生きる人々の誇りと自負を育んでいくものとなります。

現代を生きる私たちは、様々な営みの中で土地を利活用し、開発を行うこととなりますが、埋蔵文化財を大切にし、ふるさとの歴史を守ることを忘れてはなりません。

私たちには、埋蔵文化財を保護し大切に後世へと引き継いでいく責任があります。分布調査は、埋蔵文化財の所在を把握し、埋蔵文化財を保護するための第一歩となるものです。

最後になりましたが、調査にご指導、ご協力をいただいた関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成 30 年 3 月

南陽市教育委員会

教育長 猪 野 忠

凡例

- 1 本報告書は、文化庁の補助を受けて平成 29 年度に南陽市教育委員会が実施した開発事業との調整並びに遺跡台帳（遺跡地図）整備に関する市内遺跡分布調査報告書である。
- 2 調査は南陽市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、平成 29 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日までである。
- 4 調査体制は次のとおりである。
調査主任 角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
主 幹 課 社会教育課
主幹課長 社会教育課長 佐藤賢一
埋蔵文化財係技能士 佐藤祥一
- 5 本報告書の作成、執筆は、角田朋行が担当し、遺物実測は、山田渚が担当した。
- 6 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 7 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 8 挿図における踏査範囲は黒線で示し、これによらない場合は各図に個別に示した。なお、薄い灰色の塗りつぶしは遺跡範囲を示す。
- 9 小字名は、近年における字名の統廃合等に変化している場合、地名記録の観点から明治期の地籍図による小字名を記載し、現小字名を括弧書きで記載した。
- 10 本調査にあたっては、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）
佐藤鎮雄、佐藤庄一、長井謙治

目 次

I	調査の概要	
1	調査の目的と概要	1
2	調査方法	1
3	調査位置図	2
4	調査実施一覧	4
II	遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査（踏査）	
1	西中上遺跡（将監屋敷跡）	5
2	天ヶ澤館跡	6
3	赤湯字秋葉山、字玉坂山	7
4	宮内字鐘小屋、字武道作山	8
5	梨郷字山泉寺	9
6	宮内字内原	10
7	小岩沢（炭焼窯跡）	11
8	日影館跡、岩部山館跡	12
9	寺山遺跡	13
10	上野山館（烏帽子山館）跡（古墳跡、経筒出土地）	14
11	土平地区	17
12	三間通字桑旗前	18
III	試掘調査	
1	太子堂遺跡	19
2	大橋城跡	20
3	東唐越館跡	21
4	大塚遺跡隣地	23
5	高梨字北之前	25
6	観音堂遺跡隣地	26
7	宮内字八幡田二	27
8	宮内字黒木二	28
9	植木場一遺跡	30
10	砂塚字西塩釜	32
11	中落合遺跡（中落合運河跡）	33
12	東畑 A 遺跡 (1)	35
13	東畑 A 遺跡 (2)	37
14	沢田遺跡 (1)	39
15	郡山字間々上一	41
16	法師柳字漆房	42
17	唐越遺跡	43
18	間々上遺跡	45

19	沢田遺跡 (2)	46
20	東六角遺跡	56
21	芹ヶ窪遺跡	57
22	郡山字長巻	58
23	北町遺跡	59
IV 立会調査		
1	川樋字五十匂	62
2	蒲生田山古墳群	63
3	宮内字大壇	64
4	二色根字起田	65
5	岩屋堂 2 遺跡	66
6	長岡字清水尻	68
7	北町遺跡隣地	69
8	内城館跡	70
9	高梨字畑田	71
10	萩生田遺跡	72
11	宮内字大清水	73
V 上野山古墳群測量調査		
1	調査概要と目的	74
2	調査方法	74
3	測量方法と経過	74
4	成果	75
附編		
	沢田遺跡 (TT11) 土壌 自然科学分析調査	77

挿図目次

第 1 図	調査位置図	2	第 47 図	植木場一遺跡開発予定位置図	30
第 2 図	西中上遺跡(将監屋敷跡)踏査範囲図	5	第 48 図	植木場一遺跡トレンチ配置図	30
第 3 図	将監屋敷跡(明治期の字限図より)	5	第 49 図	植木場一遺跡 TT1 平面図・断面図	31
第 4 図	天ヶ澤館跡踏査範囲図	6	第 50 図	植木場一遺跡 TT2 平面図	31
第 5 図	天ヶ澤館跡略図	6	第 51 図	植木場一遺跡遺構図	31
第 6 図	秋葉山・玉坂山踏査範囲図	7	第 52 図	砂塚字西塩釜開発予定位置図	32
第 7 図	宮内字鐘小屋～武道作山踏査範囲図	8	第 53 図	砂塚字西塩釜 トレンチ配置図	32
第 8 図	梨郷字山泉寺踏査範囲	9	第 54 図	砂塚字西塩釜 TT1 平面図・断面図	32
第 9 図	宮内字内原踏査範囲図	10	第 55 図	中落合遺跡開発予定位置図	33
第 10 図	小岩沢踏査範囲図	11	第 56 図	中落合遺跡トレンチ配置図	34
第 11 図	日影館跡、岩部山館跡踏査範囲図	12	第 57 図	中落合運河断面図・TT4 断面図	34
第 12 図	寺山遺跡踏査範囲図	13	第 58 図	中落合遺跡柱状図	34
第 13 図	上野山館跡踏査範囲図	15	第 59 図	明治 8 年字限図(中落合運河跡)	34
第 14 図	上野山館跡略図	16	第 60 図	東畑 A 遺跡(1) 開発予定位置図	35
第 15 図	土平地区踏査範囲図	17	第 61 図	東畑 A 遺跡(1) トレンチ配置図	35
第 16 図	三間通字桑旗前踏査範囲図	18	第 62 図	東畑 A 遺跡(1) TT1 平面図・断面図	36
第 17 図	太子堂遺跡開発予定位置図	19	第 63 図	東畑 A 遺跡(1) TT2 平面図・断面図	36
第 18 図	太子堂遺跡トレンチ配置図	19	第 64 図	東畑 A 遺跡(1) TT3 平面図・断面図	36
第 19 図	太子堂遺跡 TT1 平面図	19	第 65 図	東畑 A 遺跡(2) 開発予定位置図	37
第 20 図	太子堂遺跡 SP 断面図	19	第 66 図	東畑 A 遺跡(2) トレンチ配置図	37
第 21 図	太子堂遺跡柱状図	19	第 67 図	東畑 A 遺跡(2) 柱状図	38
第 22 図	大橋城跡開発予定位置図	20	第 68 図	沢田遺跡(1) 開発予定位置図	39
第 23 図	大橋城跡トレンチ配置図	20	第 69 図	沢田遺跡(1) トレンチ配置図	39
第 24 図	大橋城跡柱状図	20	第 70 図	沢田遺跡(1) 柱状図	40
第 25 図	東唐越館跡開発予定位置図	21	第 71 図	沢田遺跡(1) TT2 平面図	40
第 26 図	東唐越館跡トレンチ配置図	22	第 72 図	沢田遺跡(1) TT3 平面図・断面図	40
第 27 図	東唐越館跡 TT2 平面・断面図	22	第 73 図	郡山字間々上一開発予定位置図	41
第 28 図	東唐越館跡柱状図	22	第 74 図	郡山字間々上一トレンチ配置図	41
第 29 図	大塚遺跡隣地開発予定位置図	23	第 75 図	郡山字間々上一柱状図	41
第 30 図	大塚遺跡隣地 トレンチ配置図	24	第 76 図	法師柳字漆房開発予定位置図	42
第 31 図	大塚遺跡隣地 TT1 平面図	24	第 77 図	法師柳字漆房 トレンチ配置図	42
第 32 図	大塚遺跡柱状図	24	第 78 図	法師柳字漆房柱状図	42
第 33 図	高梨字北之前開発予定位置図	25	第 79 図	唐越遺跡開発予定位置図	43
第 34 図	高梨字北之前トレンチ配置図	25	第 80 図	唐越遺跡 トレンチ配置図	43
第 35 図	高梨字北之前柱状図	25	第 81 図	唐越遺跡 TT2 平面図	44
第 36 図	観音堂遺跡隣地開発予定位置図	26	第 82 図	唐越遺跡 TT3 平面図・断面図	44
第 37 図	観音堂遺跡隣地試掘穴配置図	26	第 83 図	唐越遺跡遺構位置図	44
第 38 図	観音堂遺跡隣地柱状図	26	第 84 図	唐越遺跡柱状図	44
第 39 図	宮内字八幡田二開発予定位置図	27	第 85 図	間々上遺跡開発予定位置図	45
第 40 図	宮内字八幡田二トレンチ配置図	27	第 86 図	間々上遺跡 トレンチ配置図	45
第 41 図	宮内字八幡田二柱状図	27	第 87 図	間々上遺跡柱状図	45
第 42 図	宮内字黒木二開発予定位置図	28	第 88 図	沢田遺跡(2) 開発予定位置図	48
第 43 図	宮内字黒木二トレンチ配置図	28	第 89 図	沢田遺跡(2) トレンチ配置図	48
第 44 図	宮内字黒木二 TT4 平面図	29	第 90 図	沢田遺跡(2) 柱状図	48
第 45 図	宮内字黒木二柱状図	29	第 91 図	沢田遺跡調査位置図	49
第 46 図	馬場遺跡 馬場跡(館跡)略図	29	第 92 図	沢田遺跡(2) TT8 平面図・断面図	50

第 93 図	沢田遺跡 (2)TT10(第 1 文化層) 平面図	50	第 139 図	高梨字畑田開発予定位置図	71
第 94 図	沢田遺跡 (2)TT10(第 2 文化層) 平面図	51	第 140 図	高梨字畑田柱状図	71
第 95 図	沢田遺跡 (2)TT10(第 2 文化層) 遺構断面図	51	第 141 図	萩生田遺跡開発予定位置図	72
第 96 図	沢田遺跡 (2)TT10(第 3 文化層) 平面図	51	第 142 図	萩生田遺跡柱状図	72
第 97 図	沢田遺跡 (2)TT10(第 3 文化層) 遺構断面図	51	第 143 図	大清水遺跡開発予定位置図	73
第 98 図	沢田遺跡 (2)TT10 砂礫範囲平面図	52	第 144 図	調査範囲図	74
第 99 図	沢田遺跡 (2)TT11(第 3 文化層) 平面図	53	第 145 図	古墳群と鉦山掘削跡	75
第 100 図	沢田遺跡 (2)TT11 SP19 断面図	53	第 146 図	古墳分布図	76
第 101 図	沢田遺跡 (2)TT11(第 4 文化層) 平面図	53			
第 102 図	沢田遺跡 (2)TT11 ST1 ベルト断面図	53			
第 103 図	沢田遺跡 (2)TT11(水田跡カ) 平面図	54			
第 104 図	沢田遺跡 (2)TT11 西壁断面図	54			
第 105 図	沢田遺跡 (2)TT11 北壁断面図	54			
第 106 図	沢田遺跡 (2)TT11 東壁断面図	55			
第 107 図	沢田遺跡 (2)TT11 南壁断面図	55			
第 108 図	沢田遺跡 (2) 各トレンチ標高比較図	55			
第 109 図	東六角遺跡開発予定位置図	56			
第 110 図	東六角遺跡トレンチ配置図	56			
第 111 図	東六角遺跡 TT1 柱状図	56			
第 112 図	東六角遺跡 SD1 断面図	56			
第 113 図	芹ヶ窪遺跡開発予定位置図	57			
第 114 図	芹ヶ窪遺跡トレンチ配置図	57			
第 115 図	芹ヶ窪遺跡柱状図	57			
第 116 図	郡山字長巻開発予定位置図	58			
第 117 図	郡山字長巻トレンチ配置図	58			
第 118 図	郡山字長巻柱状図	58			
第 119 図	明治 8 年字限図 (字長巻付近)	58			
第 120 図	北町遺跡開発予定位置図	61			
第 121 図	北町遺跡トレンチ配置図	61			
第 122 図	北町遺跡第 3 層遺構平面図	61			
第 123 図	北町遺跡 TT1 柱状図	61			
第 124 図	川樋字五十勾開発予定位置図	62			
第 125 図	川樋字五十勾柱状図	62			
第 126 図	蒲生田山古墳群開発予定位置図	63			
第 127 図	宮内字大壇開発予定位置図	64			
第 128 図	宮内字大壇柱状図	64			
第 129 図	二色根字起田開発予定位置図	65			
第 130 図	岩屋堂 2 遺跡開発予定位置図	67			
第 131 図	岩屋堂 2 遺跡平面図	67			
第 132 図	岩屋堂 2 遺跡西壁断面図	67			
第 133 図	長岡字清水尻開発予定位置図	68			
第 134 図	長岡字清水尻工事断面模式図	68			
第 135 図	北町遺跡隣地開発予定位置図	69			
第 136 図	北町遺跡隣地柱状図	79			
第 137 図	内城館跡開発予定位置図	70			
第 138 図	内城館跡柱状図	70			

図版目次

図版 1	出土遺物（大塚遺跡、植木場一遺跡）	1
図版 2	出土遺物（塩竈前遺跡、東畑 A 遺跡）	2
図版 3	出土遺物（沢田遺跡）	3
図版 4	出土遺物（沢田遺跡）	4
図版 5	西中上遺跡、天ヶ澤館跡、秋葉山・玉坂山、武道作山、 梨郷字山泉寺	5
図版 6	宮内字内原、小岩沢炭焼窯跡、岩部山館跡、 日影館跡	6
図版 7	上野山館跡、土平地区岩石採取場、三間通字桑畑前	7
図版 8	太子堂遺跡、大橋城跡、東唐越館跡	8
図版 9	東唐越館跡、大塚遺跡隣地	9
図版 10	高梨字北之前、観音堂遺跡隣地	10
図版 11	観音堂遺跡隣地、宮内字八幡田二、宮内字黒木二（馬 場遺跡隣地）	11
図版 12	宮内字黒木二（馬場遺跡隣地）、植木場一遺跡	12
図版 13	植木場一遺跡、中落合遺跡	13
図版 14	中落合遺跡、東畑 A 遺跡 (1)	14
図版 15	東畑 A 遺跡 (2)、沢田遺跡 (1)	15
図版 16	沢田遺跡 (1)、郡山字間々上一、法師柳字漆房	16
図版 17	唐越遺跡、間々上遺跡	17
図版 18	間々上遺跡、沢田遺跡 (2)	18
図版 19	沢田遺跡 (2)	19
図版 20	沢田遺跡 (2)	20
図版 21	東六角遺跡、芹ヶ窪遺跡	21
図版 22	郡山字長巻、北町遺跡	22
図版 23	北町遺跡、川樋字五十匂、蒲生田山古墳群	23
図版 24	蒲生田山古墳群、宮内字大壇、二色根字起田、 岩屋堂 2 遺跡、長岡字清水尻、北町遺跡隣地	24
図版 25	内城館跡、高梨字畑田、萩生田遺跡、大清水遺跡	25

南陽市遺跡分布調查報告書（6）

I 調査の概要

1 調査の目的と概要

近年は、住宅地造成と集合住宅建設が増加傾向にあり、各種開発との調整を図り遺跡の保護を図るための試掘調査及び立会調査を実施した。

本市では平成 29 年度現在で 299 箇所¹の遺跡を把握している（平成 29 年度から近世経塚を市遺跡台帳に含めた）が、未調査地域も多く残されている。また、発見が古く、容易に立ち入ることのできない山間部の古墳群等、情報が少ない遺跡も多く存在するため、引き続き遺跡台帳整備のための調査を継続して実施している。

平成 29 年 4 月から 12 月までの開発行為に伴う遺跡所在の有無に関する照会は計 70 件であった。踏査は 19 件、試掘調査は 20 件、工事立会は 14 件である。試掘調査は、埋蔵文化財包蔵地及びその隣接地・分布調査未実施地において実施に努めた。工事立会は、工期に余裕がない場合や工事面積が狭い場合、埋蔵文化財を破壊する恐れが少ないと判断された場合及び分布調査未実施地において実施した。

2 調査方法

(1) 踏査及び分布調査

踏査は、開発事業計画地の範囲内及びその周辺の踏査を行い、遺跡の範囲と開発予定区域の平面的な関係を確認する調査である。分布調査は、主に遺跡台帳整備のための踏査である。いずれも事前・事後に周知の資料により、地形状況や従来の報告等の内容を確認している。GPS 付のカメラやスマートフォンを活用し、簡易な位置情報を記録しながら踏査した。遺跡台帳を整備し開発調整を図るため市街地に隣接する重要遺跡の測量調査を行った。

(2) 試掘調査

試掘調査は、坪掘りやトレンチ調査を行って遺構や遺物の平面的な分布範囲や遺構確認面までの深さ等を把握し、遺跡内容の把握を行う調査である。開発予定地内にグリットを設定し、試掘溝又は試掘穴を配して人力で表土及び堆積土を除去し、遺構の有無を確認した。

(3) 立会調査

立会調査は、基本的に開発事業による遺跡への影響が軽微な場合に、工事施工に立ち会って実施し、遺構や遺物が発見された場合には記録保存を行う調査である。工事の進捗にあわせ、土工事を行う際に立ち会いを行い、遺構・遺物の確認及び土層の確認を行った。掘削深度は工事の掘底面である。遺跡未確認地の場合もできるだけ工事立ち合いを行い遺跡の把握に努めた。

3 調査位置図



<踏査>

- 1 西中上遺跡
- 2 天ヶ澤館跡
- 3 秋葉山・玉坂山
- 4 宮内字鐘小屋・武道作山
- 5 梨郷字山泉寺
- 6 宮内字内原
- 7 小岩沢炭焼窯跡
- 8 日影館跡・岩部山館跡

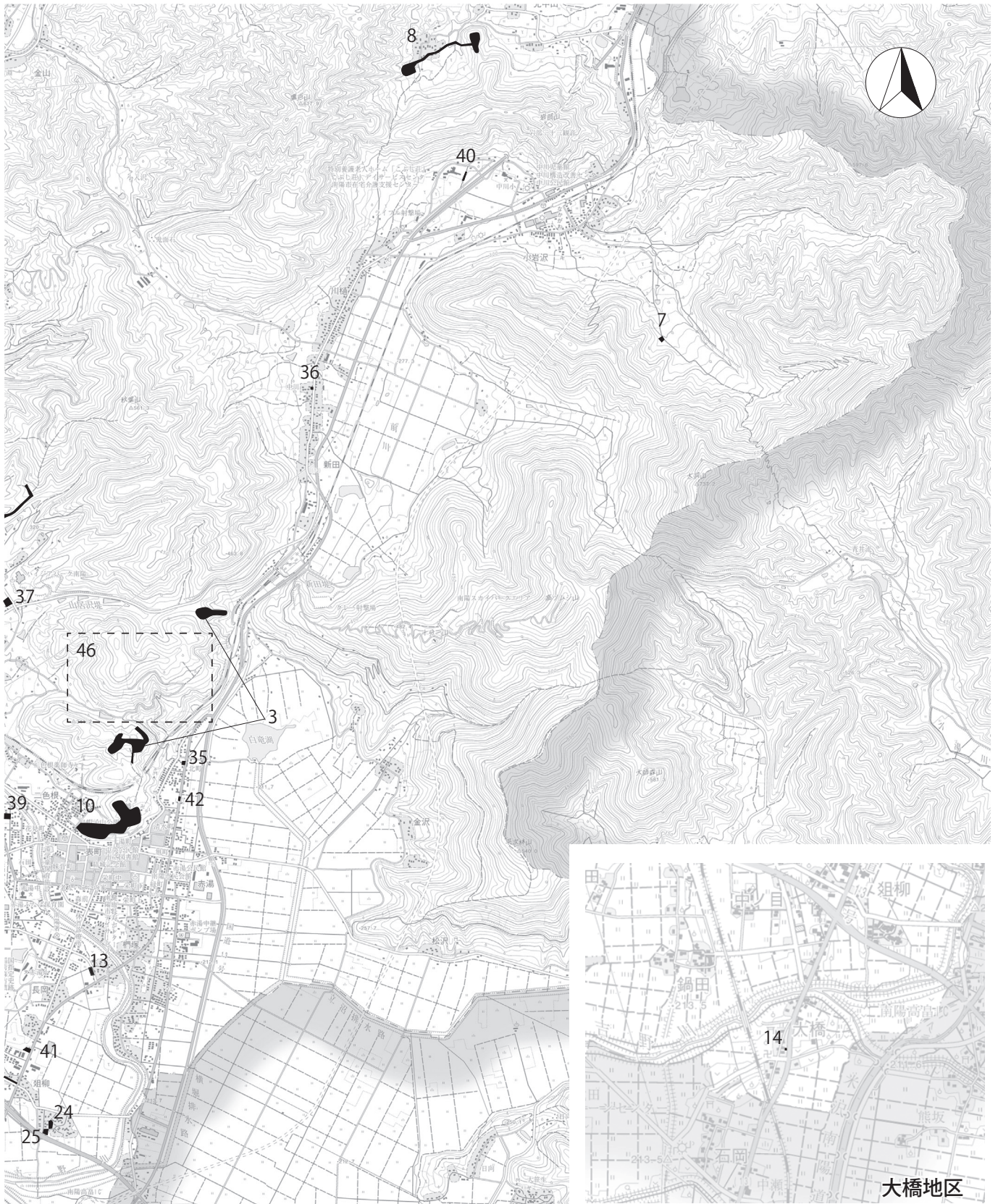
- 9 寺山遺跡
- 10 上野山館跡
- 11 土平地区 (岩石採取地)
- 12 三間通字桑旗前 (塚)

<試掘調査>

- 13 太子堂遺跡
- 14 大橋字館之内
- 15 東唐越館跡
- 16 大塚遺跡

- 17 高梨字北之前
- 18 蒲生田字高畑
- 19 宮内字八幡田二
- 20 宮内字黒木二
- 21 植木場一遺跡
- 22 砂塚字西塩竈
- 23 中落合遺跡
- 24 東畑 A 遺跡 (1)
- 25 東畑 A 遺跡 (2)

- 26 沢田遺跡 (1)
- 27 郡山字間々上一
- 28 法師柳字漆房
- 29 唐越遺跡
- 30 間々上遺跡
- 31 沢田遺跡 (2)
- 32 東六角遺跡
- 33 芹ヶ窪遺跡
- 34 郡山字長巻



- 35 北町遺跡
＜立会調査＞
- 36 川樋字五十杓
- 37 蒲生田山古墳群
- 38 宮内字大壇
- 39 二色根字起田
- 40 岩屋堂遺跡
- 41 長岡字清水尻
- 42 赤湯字新田前一

- 43 鍋田字内城～組柳字中丸
- 44 高梨字畑田
- 45 萩生田遺跡
＜測量調査＞
- 46 上野山古墳群

: 調査範囲
 0 1 km

第1図 調査位置図 S=1/40000
 国土地理院発行 2万5千分の1地形図使用

4 平成 29 年度埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧（地区別）

地区	事業名	現場調査期間	遺跡名等	場所	区分	試掘結果等
赤湯	民間開発	平成 29 年 2 月 28 日	太子堂遺跡	柵塚字太子堂	試掘	柱穴 2 個、土師器、須恵器
	民間開発	平成 29 年 3 月 25 日	大橋城跡	大橋字館之内	試掘	寛永通宝 1 枚
	民間開発	平成 29 年 3 月 30 日	東唐越館跡	三間通字門蔵西	試掘	堀跡か
	分布調査	平成 29 年 4 月 5 日	松沢横穴	松沢字松沢山	踏査	形状確認
	民間開発	平成 29 年 4 月 6 日	未確認	三間通字門蔵西	立会	なし
	分布調査	平成 29 年 4 月 10 日	秋葉山東古墳群等	赤湯（上野山、秋葉山、玉坂）	踏査	なし
	分布調査	平成 29 年 4 月 14 日	松沢横穴	松沢字松沢山	踏査	形状確認
	民間開発	平成 29 年 4 月 20 日	蒲生田山古墳群	上野山字居沢山	立会	須恵器、鉄器の散布集中地点あり
	民間開発	平成 29 年 5 月 18 日～19 日、24 日	東畑 A 遺跡（地点 1）	組柳字東畑	試掘	竪穴住居跡等、土師器、須恵器、近世陶器
	民間開発	平成 29 年 5 月 24 日	東畑 A 遺跡（地点 2）	組柳字水下	試掘	なし
	民間開発	平成 29 年 6 月 13 日	沢田遺跡	鳥貫字六角	立会	なし
	分布調査	平成 29 年 6 月 14～16 日	上野山館跡	赤湯（烏帽子山公園）	踏査	曲輪等の確認、略図作成
	民間開発	平成 29 年 6 月 15 日	未確認	二色根字起田	立会	なし
	民間開発	平成 29 年 6 月 27 日	長岡南森遺跡	長岡字清水尻	立会	なし
	公共施設整備	平成 29 年 7 月 27 日	唐越遺跡	三間通字西唐越	試掘	竪穴住居跡
	民間開発	平成 29 年 8 月 18 日、29 日	東畑 A 遺跡	組柳字東畑	立会	なし
	下水道整備	平成 29 年 8 月 22 日～10 月末日	未確認 （北町遺跡隣地）	赤湯字新田前一	立会	なし
	下水道整備	平成 29 年 9 月 6 日～10 月末日	内城館跡	鍋田字内城、組柳字中丸	立会	なし
	公共事業	平成 29 年 10 月 2 日	未確認	三間通字桑旗前	踏査	方形塚、周知の板碑有
	分布調査	平成 29 年 10 月 25 日	赤石山横穴	松沢字赤石山	踏査	大まかな位置の確認
公共施設整備	平成 29 年 11 月 8 日～10 日	北町遺跡	赤湯字新田前二	試掘	集石遺構、縄文土器、石器	
中川	民間開発	平成 29 年 4 月 10 日	未確認	川樋字五十刃	立会	なし
	分布調査	平成 29 年 5 月 1 日	未確認	小岩沢地区	踏査	炭焼窯跡
	分布調査	平成 29 年 5 月 1 日	元中山日影遺跡、日影館跡、岩部山館	日影地区	踏査	曲輪等
	市道整備	平成 29 年 6 月 15 日	未確認	川樋字岩屋堂	立会	溝跡、縄文土器片
沖郷	民間開発	平成 29 年 4 月 4 日	大塚遺跡隣地	秋生田字高野	試掘	ビット数箇所、土師器・須恵器
	分布調査	平成 29 年 4 月 4 日	西中上遺跡 （将監屋敷跡）	高梨字西屋敷～将監屋敷	踏査	須恵器
	公共施設整備	平成 29 年 4 月 14 日	未確認	高梨字北之前	試掘	なし
	市道整備	平成 29 年 4 月 17 日	観音堂遺跡	蒲生田字高畑	試掘	なし
	民間開発	平成 29 年 5 月 10 日～11 日	植木場一遺跡	露橋字地藏堂	試掘	竪穴住居、ビット
	民間開発	平成 29 年 5 月 16 日～17 日	中落合遺跡	中落合字五百刈	試掘	中落合運河跡の南辺を検出
	民間開発	平成 29 年 5 月 26 日	沢田遺跡	鳥貫字六角	試掘	溝跡、道路跡、近世建物跡
	民間開発	平成 29 年 6 月 29 日	未確認	郡山字間々上一	試掘	なし
	民間開発	平成 29 年 7 月 20 日	未確認	法師柳字漆房	試掘	土師器・須恵器
	民間開発	平成 29 年 8 月 30 日	間々上遺跡	郡山字間々上	試掘	表土層から土師器片
	公共施設整備	平成 29 年 9 月 4 日～29 日	沢田遺跡	若狹郷屋	試掘	平安時代の遺構、遺物
	民間開発	平成 29 年 9 月 7 日	東六角遺跡	郡山字一早	試掘	時代不明の溝跡、遺物なし
	民間開発	平成 29 年 9 月 20 日	未確認	高梨字畑田	立会	なし
	民間開発	平成 29 年 10 月 24 日	未確認	郡山字長巻	試掘	なし
梨郷	分布調査	平成 29 年 4 月 20 日	平野窯跡、梨郷古墳群	梨郷（平野地区）	踏査	なし
	分布調査	平成 29 年 4 月 27 日	未確認	梨郷字山泉寺周辺	踏査	なし
	分布調査	平成 29 年 5 月 11 日、23 日	寺山遺跡	梨郷 平野地区	踏査	石器片、通称地名「翁の台」
	民間開発	平成 29 年 5 月 12 日	塩竈前遺跡隣地	砂塚字西塩竈	試掘	近世遺構
	分布調査	平成 29 年 6 月 9 日	ヌゲッポ遺跡	梨郷地内	踏査	縄文土器、石器
	民間開発	平成 29 年 7 月 25 日	未確認	土平地区	踏査	なし
	民間開発	平成 29 年 10 月 20 日	芹ヶ窪遺跡	梨郷字芹ヶ窪	試掘	なし
	宮内	民間開発	平成 29 年 4 月 17 日	未確認	宮内字八幡田二	試掘
分布調査		平成 29 年 4 月 20 日	未確認	宮内字鐘小屋～字武道作山	踏査	通称「仏の山」、板碑あり
民間開発		平成 29 年 4 月 24 日～25 日	馬場遺跡隣地	宮内字黒木二	試掘	なし
民間開発		平成 29 年 4 月 28 日	未確認	宮内字大壇	立会	なし
分布調査		平成 29 年 5 月 1 日	未確認	宮内字内原	踏査	なし
民間開発		平成 29 年 8 月 25 日	未確認	宮内字大壇	立会	なし
金山	分布調査	平成 29 年 4 月 6 日	天ヶ沢館跡	金山字天ヶ澤	踏査	主郭北側斜面に帯曲輪・横堀を確認
	分布調査	平成 29 年 5 月 6 日	未確認（金山の風穴）	金山地区	踏査	風穴（近代製糸業関連遺構）の位置確認、周辺の踏査
漆山	分布調査	平成 29 年 10 月 25 日	西稗田横穴	漆山字ノ沢	踏査	道路不通により近づけず

調査者 角田朋行 佐藤祥一

II 遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査（踏査）

1 西中上遺跡（^{しょうげんやしき}将監屋敷跡）

(1) 調査日 平成 29 年 4 月 4 日

(2) 調査場所 南陽市高梨字西屋敷～字将監屋敷

(3) 調査目的

東北電力鉄塔工事に伴う調査にあわせ、遺跡台帳整備のため周辺を踏査する。対象地には、西中上遺跡及び将監屋敷遺跡が所在し、両遺跡の範囲は重複している。西中上遺跡は奈良・平安時代の遺跡で平成 16 年に県埋文センターが発掘調査を実施している。将監屋敷遺跡の性格を把握し、西中上遺跡との重複登録について再検討する。

(4) 調査方法及び内容

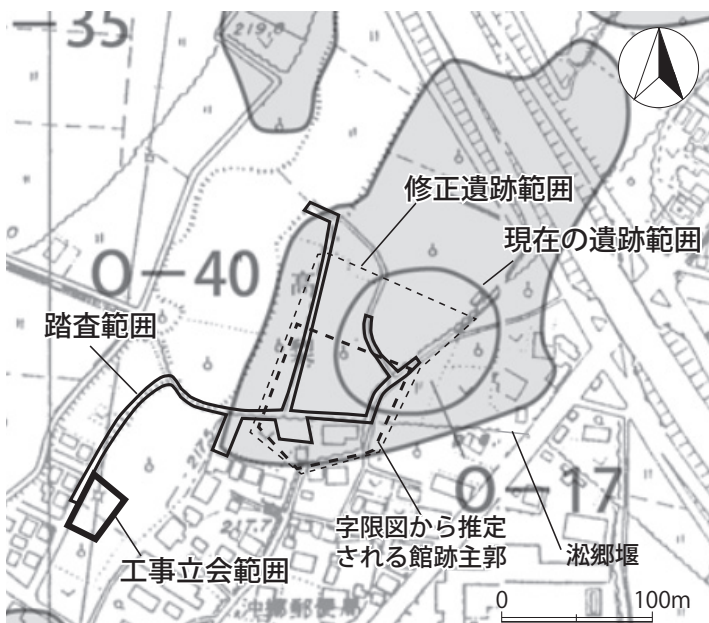
写真撮影を行いながら踏査した。鉄塔工事範囲は立会いを実施した。

(5) 調査結果

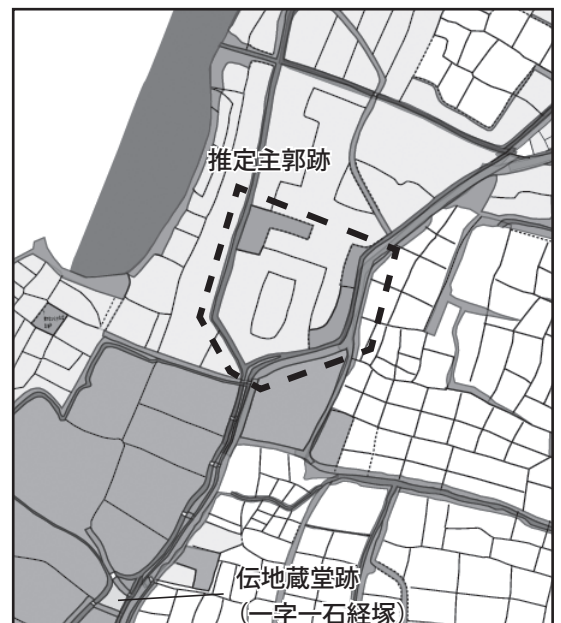
従前の将監屋敷遺跡範囲外である西側畑地で土師器片、須恵器片、中世陶器片等の散布を確認した。特に中世陶器は従前の将監屋敷遺跡範囲の西～南西にも広がる状況が確認された。中世以前の遺物は西中上遺跡の従前の調査内容と一致し、中世陶器片以外は将監屋敷遺跡と西中上遺跡が異なる状況はない。このことから、混乱をさけるため奈良・平安時代の遺跡としては西中上遺跡に統一し、遺物散布状況や字限図等から中世又は近世の屋敷跡と推測される遺跡範囲を中世城館址の「将監屋敷跡」とし、登録内容を修正（名称変更及び範囲修正）すべきと考えられる。

工事立会地点では鉄塔周辺を 50～60cm の深さまで面的に掘削したが、遺構・遺物は確認されなかった。

将監屋敷跡は^{しょうごう}淞郷堰によって南北に分断されているが、淞郷堰南側の地点で、昭和 50 年代に幅 30cm×長 8m の溝を掘った際に立合いしたところ、約 2m 間隔で礎石跡に伴うと思われる集石（栗石）が確認されたことが旧遺跡台帳に記録されている。また、将監屋敷跡の南には、かつて地藏堂と一字一石経塚があり、地藏堂は高福寺境内に移築され、一字一石経は高福寺若しくは市早神社の敷地内に移されたと伝わる。



第 2 図 西中上遺跡（将監屋敷跡）踏査範囲図 S=1/5000



第 3 図 将監屋敷跡（明治期の字限図より） 5

2 天ヶ澤館跡

(1) 調査日 平成29年4月6日

(2) 調査場所 南陽市金山字天ヶ澤

(3) 調査目的

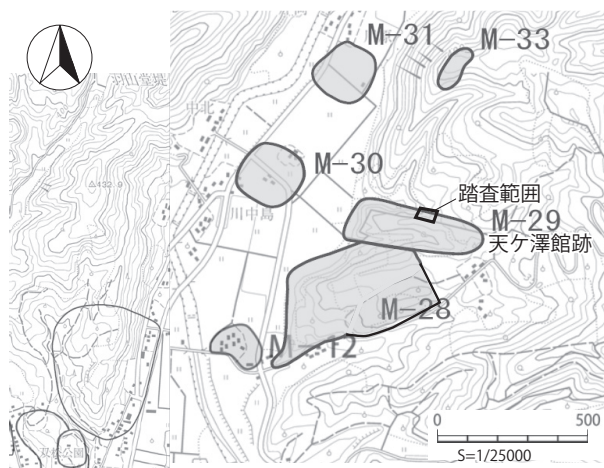
対象地は、金山地区城郭群の中央に位置する館跡である。金山城の実態を把握するうえで重要な館跡の一つであり、未踏査となっている範囲を中心に踏査を行い、館跡の範囲や城郭遺構の有無を確認する。

(4) 調査方法及び内容

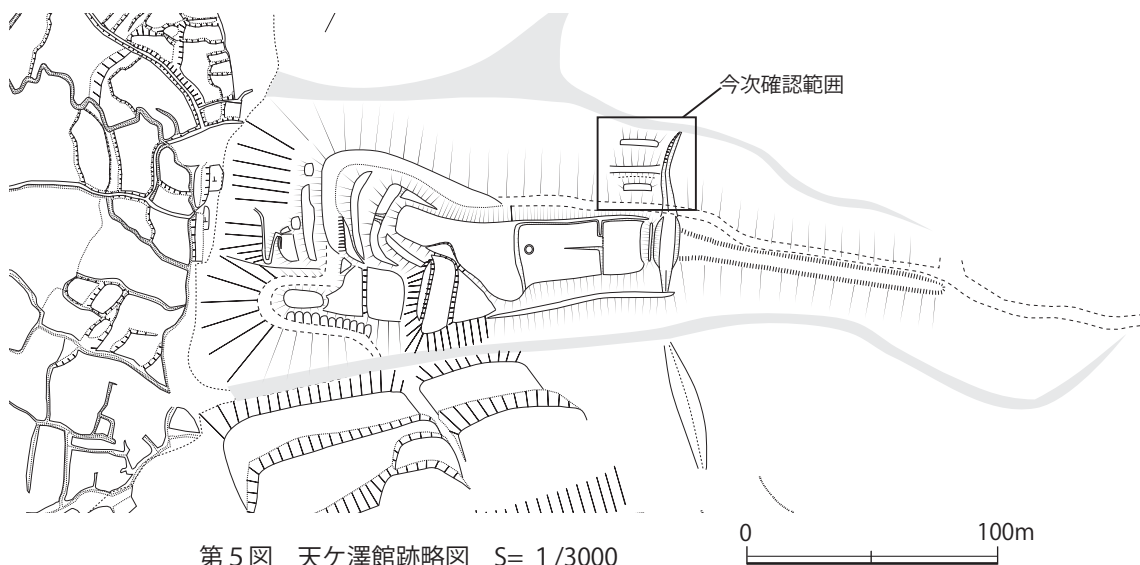
写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

館跡北側の谷に面した斜面を農道沿いに上から目視確認しながら踏査し、主郭北側の斜面に腰曲輪と横堀があることを新たに確認した。主郭背後の堀切が谷の斜面下方にまで掘り込まれ、その西側に数箇所の腰曲輪と横堀が見られる。これらの施設は主郭北側の範囲のみで見られる。北斜面でもさらに西側の斜面では傾斜がきつく、現状で曲輪等の遺構は確認できない。



第4図 天ヶ澤館跡踏査範囲図 S=1/25000



第5図 天ヶ澤館跡略図 S= 1/3000

3 赤湯字秋葉山・字玉坂山

(1) 調査日 平成 29 年 4 月 10 日

(2) 調査場所 南陽市赤湯字秋葉山、字玉坂山

(3) 調査目的

対象地は、赤湯地区の北に位置する山々で、上野山古墳群の所在する狸沢山の南方に位置する。周辺の山々では通称「赤湯古墳群」と呼ばれる終末期古墳群が昭和初期に発見されているが、葡萄園の開墾等により大半が破壊され、古墳数や所在位置の記録が曖昧であることから、古墳があったと伝わる地域や未踏査地域を中心に踏査し、古墳の有無を確認する。

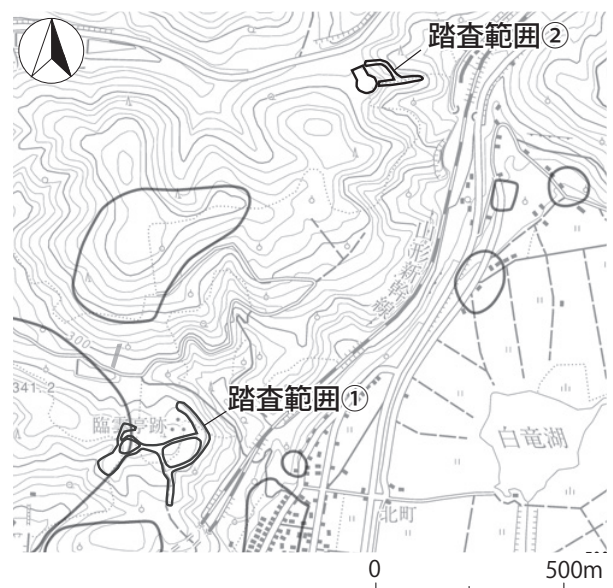
(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

①秋葉山：山頂付近から東側に古墳があり、秋葉山東古墳（群）とされるが、十数年前まで唯一残存していたという石室跡（市文化財保護審議会委員佐藤鎮雄氏が当時確認）は、現在はその場所すら確認できない。秋葉山東古墳は、位置や遺跡範囲が不明確であることから埋蔵文化財包蔵地の登録もなされていない。実態把握のため平成 26 年に一部踏査し、山頂南西側の二色根館跡の範囲内で奈良時代の遺物の散布を確認している。今回は、前回未踏査の東～東北斜面を踏査した。一帯は農地として利用されていたと見られ、現在は個人の庭園となっており、古墳や遺物は確認できなかった。次に秋葉山神社のある山頂の一体を踏査した。秋葉山神社のある山頂は丸山となっており南側には平坦な地形が接続している。山頂付近に古墳が存在したかどうかは不明である。

②玉坂山：水道施設のある峠から東の沢へ斜面を下る。地域住民の情報ではこの斜面に古墳があると言う。斜面にはいくつかの縦溝や一部横溝、瘤状の地形があるが自然地形と思われる。踏査範囲及び視認できる範囲の沢内には古墳等の遺構は確認されない。沢を標高 320 m 付近まで下った後、沢の南側の尾根に上り尾根頂を東端まで踏査した。尾根頂にも遺構はみられない。尾根東斜面は葡萄園及びその荒廃地である。対岸の斜面まで見通して確認したが、目視では古墳や城郭関連遺構等は無いと思われる。水道施設の南側に位置する尾根頂は、北ノ沢山の山体から切り離された独立した尾根頂となっており、南側の平面形態は丸く、北側は方形の地形に見える。立地的に前方後円墳の可能性は少ないと思われる。



第 6 図 秋葉山・玉坂踏査範囲図 S= 1/20000

4 宮内字鐘小屋、字武道作山

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字鐘小屋、字武道作山（仏の山）
- (3) 調査目的

対象地は宮内地区の西部に位置し、漆山地区との境に近い山地である。遺跡分布調査未実施地であることから遺跡の有無を確認するため踏査する。

(4) 調査方法及び内容

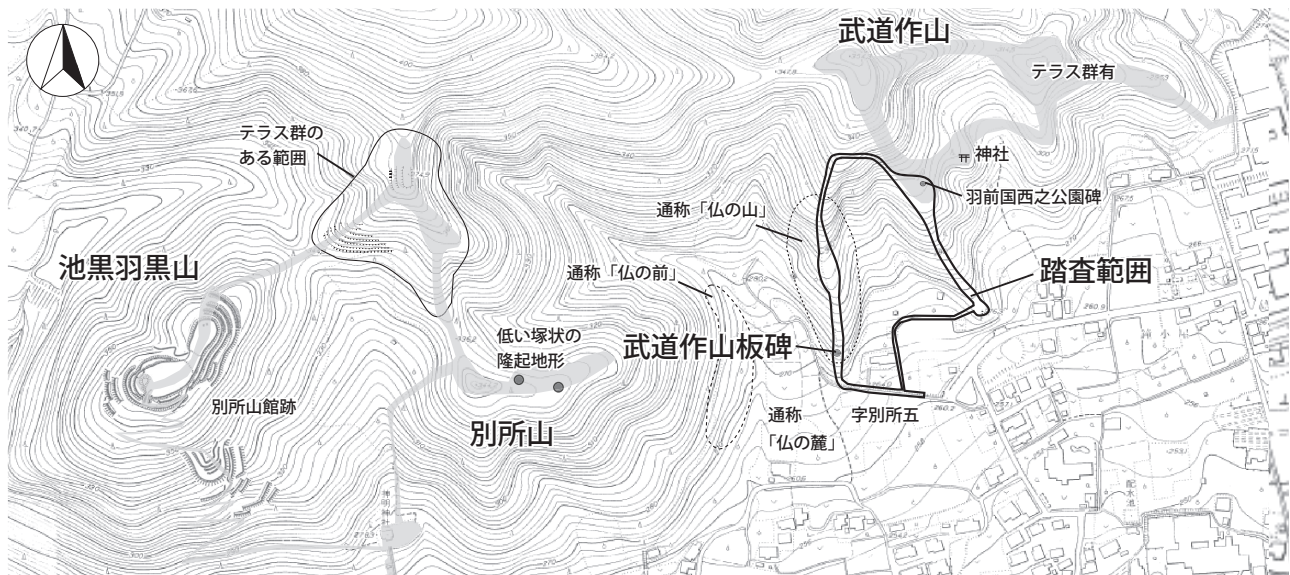
写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

対象となる枝尾根は、通称「仏の山」と呼ばれる。山の西には別所山があり、別所山経筒が出土している。その別所山の東の山麓は通称「仏の前」と呼ばれ、山麓に広がる扇状地形は「仏の麓」と言われる。字鐘小屋から「仏の山」の尾根伝いに踏査した。字別所五の農道脇で中世～近世陶器片を表採した。周知の別所 A 遺跡の北端に位置するが、別所 A 遺跡は縄文・平安時代の遺跡となっており、時代区分に中世を追加する必要がある。

「仏の山」は字名「武道作山」にあたり、武道作山の南に伸びる枝尾根の一つである。尾根の南端近くに板碑が 1 基存在し、武道作山板碑（鎌倉時代後期頃）として報告されている（「南陽市の板碑」2006 加藤和徳）。当地方では、板碑自体を「仏」と呼ぶ例があることから、「仏の山」の由来はこの板碑である可能性がある。

「仏の山」の尾根は带状に段々畑が作られている。尾根を一番上のテラスからさらに上まで登り、東方向へ移動、「仏の山」の東にある枝尾根を降りる形で踏査した。尾根の途中には、平成 28 年度に確認した「羽前国西之公園」碑のあるテラスがある。分布調査報告書 (5) で報告済みであるが、その位置について誤りがあったので位置情報を訂正する。今回は、当該テラスから尾根筋を南へ下る。尾根には带状のテラスが何段も見られるが、その性格は不明である。尾根南端は隆起して平坦になっており、尾根筋の窪んだ箇所を渡るように小土橋状の箇所も見られ、古墳や経塚、城郭遺構の可能性も検討したが、現況ではいずれにも該当するとは言いがたい。「仏の山」の尾根と西之公園碑のある尾根の間の谷はやや広く、段々のテラスが存在し、近年まで民家があったという。この付近については、遺物等から、中世から利用されていた可能性もあろう。



5 梨郷字山泉寺

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 27 日
- (2) 調査場所 南陽市梨郷字山泉寺周辺
- (3) 調査目的

梨郷地区山間部における遺跡、特に古墳、館跡等の有無を確認する。未踏査地域である字寺山と字経塚山の間位置する字山泉寺周辺の枝尾根を踏査する。

(4) 調査方法及び内容

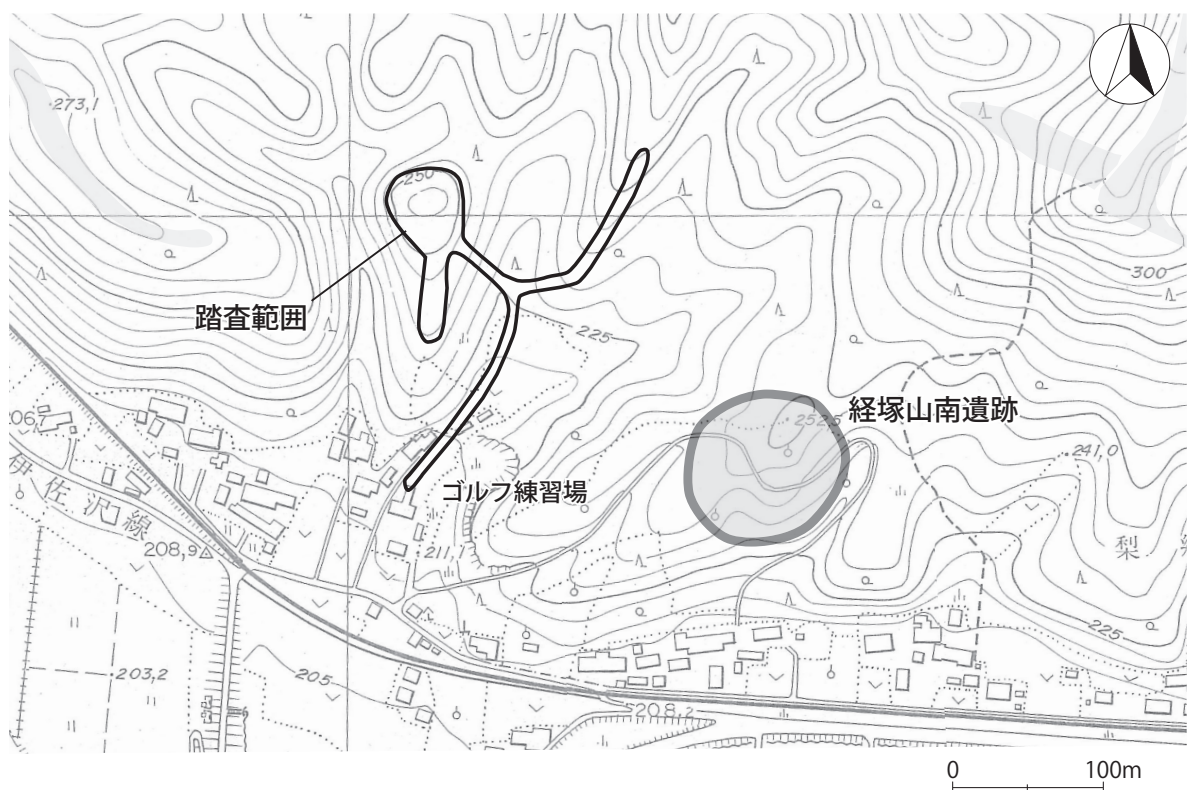
写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

調査地は、経塚山南西部に延びる枝尾根一帯である。特に地形図で尾根頂に平坦面が認められ、主尾根から切り離されている尾根を中心に調査した。

山麓のゴルフ練習場から踏査を開始、谷あいへ北へ進む。谷奥にやや低い枝尾根があり、その西側に小高い枝尾根がある。初めに西側の枝尾根頂へ登る。尾根は、楕円形に近く山頂が平坦な北尾根と、やや下って長形状で尾根頂もやや平坦な南尾根から成る。笹藪で見通しが悪い。周囲の斜面にテラス帯や傾斜変換線が確認できないことから自然地形と思われる。尾根頂の平坦面は、地名等からすれば寺社等があった可能性はあろう。

次に谷の中央に位置するやや低い枝尾根を踏査する。この尾根頂は緩やかな傾斜で北へ続き、自然地形と思われる。以上から、今次踏査範囲では明確に遺跡と判断されるものは確認できなかった。谷自体はやや広く、近隣には縄文時代の遺跡があることから、環境を考えると類似の遺跡がある可能性はある。



第 8 図 梨郷字山泉寺踏査範囲図 S=1/5000

6 宮内字内原

(1) 調査日 平成 29 年 5 月 1 日

(2) 調査場所 南陽市宮内字内原

(3) 調査目的

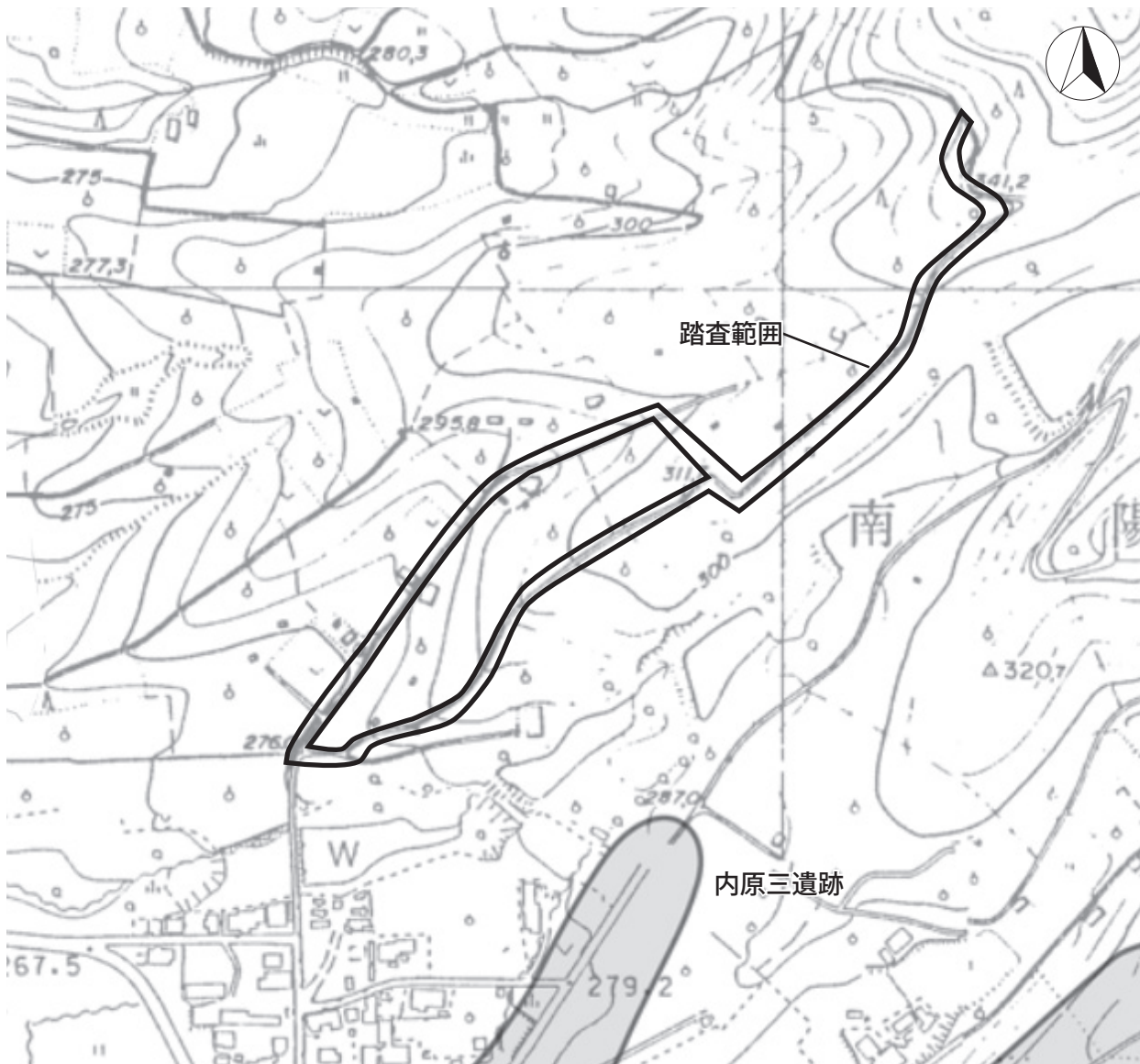
対象地は、遺跡分布調査未実施地である。昨年度まで周辺踏査を進め、今次調査地の東と西に位置する尾根まで踏査済みであることから調査の空白地を埋める。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

調査地は、秋葉山南側の枝尾根の一つである。地形を確認しながら踏査した。荒廃園地が多く、遺物は確認できなかった。尾根は緩やかで傾斜変換地点やマウンド等は確認されないことや石材も無いことから、蒲生田山古墳群のような終末期古墳や前期古墳は無いものと思われる。



第 9 図 宮内字内原踏査範囲図 S=1/5000

0 100m

7 小岩沢（炭焼窯跡）

(1) 調査日 平成 29 年 5 月 1 日

(2) 調査場所 南陽市小岩沢地内（北緯 38° 5'4" 東経 140° 12'45"）

(3) 調査目的

小岩沢の北川上流の地域は、遺跡分布調査未実施地である。山深い周辺には幾つかの縄文時代の遺跡があることから、小岩沢の子安観音まで道路沿いに地形確認を行う。遺跡台帳整備のため踏査を実施する。

(4) 調査方法及び内容

車中から地形状況を把握、確認を要する地点について写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

北川左岸、前山北側の緩斜面で、道路南側に中央に円形の窪地がある石積みの円形マウンドを確認した。平面の大きさは南北 6.4 m、東西 5.3 m でほぼ円形である。中央の円形窪地は直径 2.2 m、斜面の傾斜度は 36.5 ~ 38.5 度とやや急である。マウンド高さは 1 ~ 1.2 m である。北側に石組みの入口（焚口）と思われる箇所があり、左右からやや崩落している。現状で見える石組みには焼けた痕跡は確認できないが、入口（焚口）があることから、おそらく近代の炭焼窯跡と思われる。市内では、山中の平場にやや窪地に掘り込んだ炭焼跡（鍛冶子焼）や斜面を掘り込んだ炭焼窯跡は知られていたが、石組みで施設を構築する築窯跡の実例はこれまで殆ど報告がなかった。これと同様の円形石組み構造を持つマウンドは、昨年度に漆山地区の南須刈田遺跡内で確認されている。炭焼窯跡とすれば、平面円形の内部構造は一般的に多く見られ、上部から原木を入れ、天井は灰土を被せ固める構造や、窯の上部を土で覆う土ばち式の構造とすれば、見つかるマウンドにいずれも天井が無いことの説明がつく。築窯の普及は大正末期から昭和初期といわれ（1983 年 南陽市史編集資料第 9 号）、山間部における人の営みを物語る産業遺跡として記録しておく。



第 10 図 小岩沢踏査範囲図 S= 1/20000

0 500m

8 日影館跡、岩部山館跡

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 1 日
- (2) 調査場所 南陽市元中山（日影地区）
- (3) 調査目的

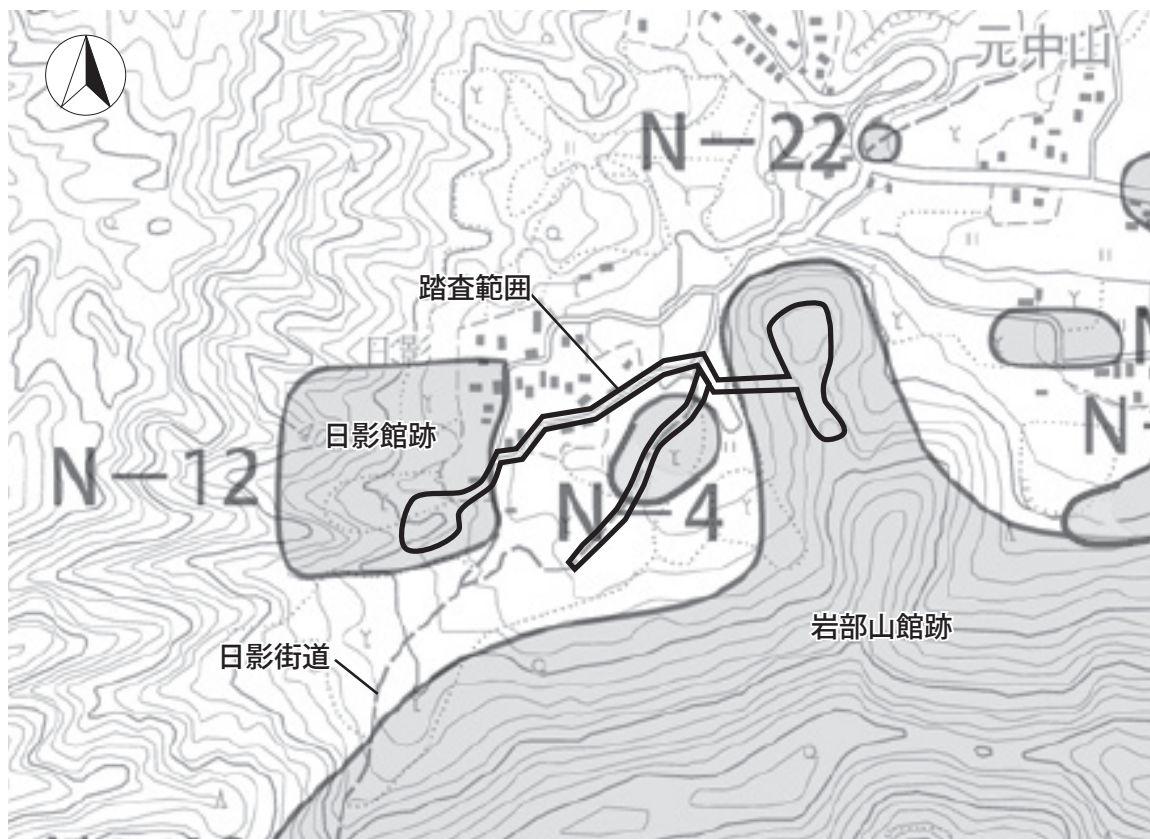
対象地には、岩部山館跡、日影館跡、元中山日影遺跡が所在する。遺跡台帳整備のための写真撮影を行うとともに現況を把握する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

日影地区は、岩部山の北西に位置し、周囲を山に囲まれた土地で、地区内を南西から北東に横切る古道は川樋地区から元中山地区に通ずる日影街道である。岩部山館の北端に位置する枝尾根上の曲輪群の現況を確認した。主郭からは遠い位置にあるが日影街道を意識していると思われる。曲輪南側には石祠が残っている。岩部山館跡から日影館跡にいたる旧街道沿いでは石製の輪廻塔と壊れた小型板碑を確認した。日影館の現況を確認したが、主郭に至る旧神社址へ登る石段は埋没している状況であった。今次踏査した範囲の館跡については、従来報告以降、荒廃が進んでいるものの大きな地形改変はないと言える。



第 11 図 日影館跡、岩部山館跡踏査範囲図

0 200m

S= 1/10000

9 寺山遺跡

(1) 調査日 平成 29 年 5 月 11 日、23 日

(2) 調査場所 南陽市梨郷（平野地区）字寺山、字二本木一、字二本木二

(3) 調査目的

市史編集資料集第 14 号には明治 15 年から昭和 25 年にかけて平野地区で出土した遺物の出土情報が記されているが、現在遺跡として登録されていない通称「翁の台」と呼ばれる地点について、所在地を明らかにするための現地確認を行う。

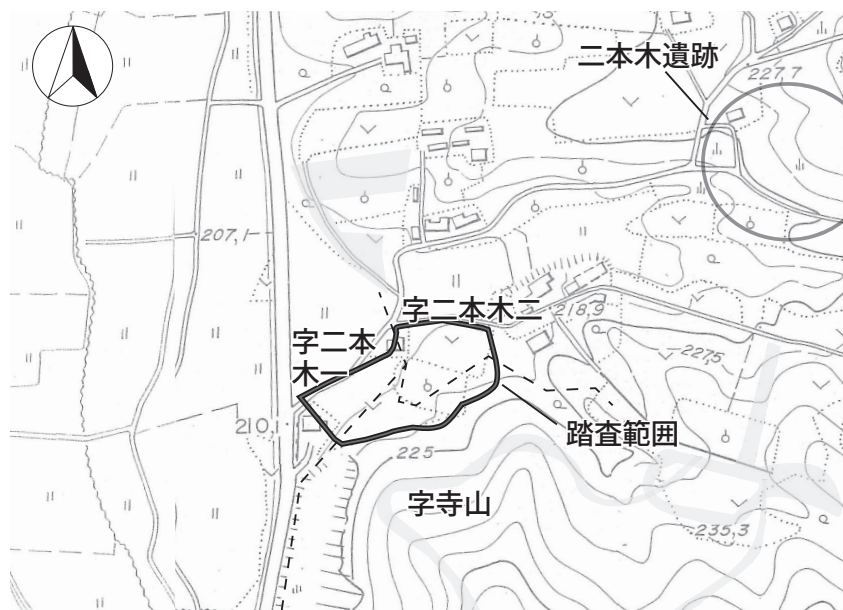
(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

対象地は、周知の梨郷古墳群の南方に位置する。資料集には縄文土器発見の経緯と発見者が記載されていることから、明治期の字限図により平野地区寺山周辺にある発見者の所有地を確認した。その結果、字「寺山」の北端とその地続きの字「二本木一・二」付近が該当することが判明した。字寺山は山の北斜面にあたり、山林から山裾まで広がる土地であるが、林檎畑を作る際に出土という記載内容や「台」という地名から、通称「翁の台」は、山の急斜面ではなく、おそらく山裾の台地状の土地であろうと推定した。この推定を元に現地踏査を実施したところ、当該地点で石器剥片が 1 点表採された。かつて縄文土器や石器が出土したとされる「翁の台」の位置は、この小台地状地形の上部である可能性があるが、確定にはさらに調査が必要である。

また、資料集には「翁の台」の西側に位置する 50 m 四方の場所は寺跡であると記録されているため、当該地点と思われる畑地を踏査した。寺院が建つ程度の広さは有するが、寺院跡に伴うような石造物や遺物等は確認されなかった。今後の調査のため、遺跡名は字名から寺山遺跡としておく。なお、今次調査範囲の北東、谷を挟んだ位置には周知の二本木遺跡が立地している。



第 12 図 寺山遺跡踏査範囲図 S=1/5000 0 100m

10 ^{うえのやま}上野山館（烏帽子山館）跡（古墳跡、経筒出土地）

(1) 調査日 平成29年6月14日～16日

(2) 調査場所 南陽市赤湯字湯沢、字西町、字烏帽子石壺、字烏帽子石式、字上之山

(3) 調査目的

対象地には、周知の上野山館跡、烏帽子山古墳、烏帽子山経塚が所在する。公園整備計画が生じたことから館跡を中心に踏査を行い、館跡及び遺跡の性格を把握する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。館跡は明治時代の公園造成で大きく改変されていることから、明治8年字限図を元に略図の原図を作成のうえ、現地踏査及び現地測量を行い略図を作成する。烏帽子山古墳、烏帽子山経筒の出土地点についても検討する。

(5) 調査結果

①上野山館跡について

上野山館跡は、赤湯地区の北に位置し、現在の烏帽子山公園一帯に位置する。県中世城館遺跡調査によって登録された。遺跡名は字名によるが、本来は字「上之山」である。上之山は物見とされる。館跡としての中心はむしろ字烏帽子石式付近に分布しており、字烏帽子石式～字湯坂・字西町は明治25年赤湯温泉誌で「館山」と紹介されている。

また、「^{わのやま}上野山」という通称地名が近隣にある。^{わのやま}上野山は、字上之山の北に位置する狸沢山・大沢山を言い、そこには昭和初期から知られる^{わのやま}上野山古墳群（市指定文化財）が分布する。これらのことから^{うえのやま}上野山館跡という名称は混乱を生じさせる恐れがあるため、今後、遺跡名を烏帽子山館跡へ修正することを検討しなければならない。

明治8年字限図から作成した略図の原図を元に旧地形と現況を比較しながら踏査し、縄張りを検討した。掘削され旧状を留めない山頂南斜面や改変の大きい烏帽子山神社周辺は、一部を除き字限図から読取れる地形をそのまま略図に表現した。本来の城郭遺構と段々畑等の区別が不十分であるが、今後の研究のためあえて作図しておく。公園西～北斜面の範囲は明治期の字限図が現存せず、現況を歩測により計測し略図を作成した。

烏帽子山公園の山頂は、現在は通称「東山」「中山」「西山」と呼ばれる3つの小山に分断されており、県調査では、主郭はこの「西山」に位置するとされている。明治8年字限図では山頂が3つに分かれている状況は確認できないが、現在の「西山」と「中山」の間に南北方向の道が通っており、この道が尾根を東西に分けていた可能性があり、この旧道の西を西曲輪（主郭）、東を東曲輪と仮称して調査を進めた。

明治8年字限図では、現在招魂碑の建つ「中山」山頂に方形に一段高まる所があったとみられ、何らかの遺構があった可能性も考えられる。現在の御神坂付近は山の鞍部にあっており、現階段の位置には堀切があったとみられる。ただし現在の石段がそのまま堀切跡というわけではない。ここから東北方向へ幾段かのテラス（現稲荷神社境内）を形成し、通称「石切山」や「見晴らし台」と呼ばれる字上之山へと至る。その東側斜面は現在も字限図から大きな変化はなく腰曲輪も現存している。南斜面は赤湯町時代に観光バラ園として整備されたためか、曲輪の形状は不明瞭となっている。山の北側は石切場によって大きく改変を受けて切り崩されている。

②烏帽子山古墳について

烏帽子山古墳は、公園造成の際に勾玉が出土し、古墳があったものとして登録されているが、その出土地点には2つの説がある。一つは市史考古資料編で、「西公園（※御

神坂を境として西側の範囲を言う。)の石岡昌翁碑の建っているところ」(現「東山」の上)を出土地としている。もう一つは赤湯町時代の旧赤湯公民館で勾玉を所蔵・展示していた当時の説明パネルで、そこには「西公園の東屋付近の土を崩した際に出土」と解説されている。明治8年字限図で「東山」の石岡昌翁碑の地点を見ると山頂は畑地で私有地である。石碑が建つ前に公共の東屋があった可能性は低いと思われる。次に東屋の位置から検討する。当時と東屋の位置が変わっていないとすれば、現東屋は「西山」の東南角に建っている。明治8年字限図を見ると「西山」にある現東屋の地点は東正寺所有で、南斜面に向いた正形状の地割りになっている。山寄式円墳があった場合、このような地割りになることは不自然ではなく、所有者が東正寺であることも墓地的な色彩があったと考えることも可能である。しかしながら、調査を進めると市史編さん室所蔵の明治～大正頃とされる絵葉書に東屋が写っていることが判明した。この写真では、東屋は山裾、おそらく南斜面に位置し、周りには岩が散在している。岩は古墳の石材であった可能性もある。正確な撮影地点は不明確であるが、尾根の印象や斜面の向きから、石岡昌翁碑のある「東山」の南側、現休憩所付近の可能性はある。石岡昌翁碑に近いことや絵葉書から、現時点では古墳は「東山」南斜面にあった可能性が高いと推定しておく。

③烏帽子山経筒出土地について

烏帽子山経筒は、昭和37年県台帳に「升形神社敷地」より出土したと記録されている。升形神社は烏帽子山神社参集殿の北側にあり、赤湯の町中から移設されたものである。対象地点は、明治8年字限図では緩斜面の畑地であることから、塚があったとすれば江戸時代には既に削平されており、神社建設によって埋納経筒が出土したと考えられる。

④石造大鳥居(市指定文化財)の石切場について

大鳥居の石材は、神社から150m離れた裏山から切り出されたと記録されている。字上之山の石材は明治25年赤湯温泉誌において明治16年に発見された建築石として紹介され、昭和39年11月の町報あかゆでも上之山を「石切山」と記載している。上之山の石切場は神社からちょうど130～150m離れていることからすれば、石造大鳥居の石材は上之山北側に位置する当該石切場跡から産出したと考えられる。



第13図 上野山館跡踏査範囲図 S=1/5000

0 100m



第14図 上野山館跡 略図 S= 1/3000

11 土平地区

- (1) 調査日 平成 29 年 7 月 25 日
- (2) 調査場所 南陽市竹原字鈴之切 (土平地区)
- (3) 調査目的

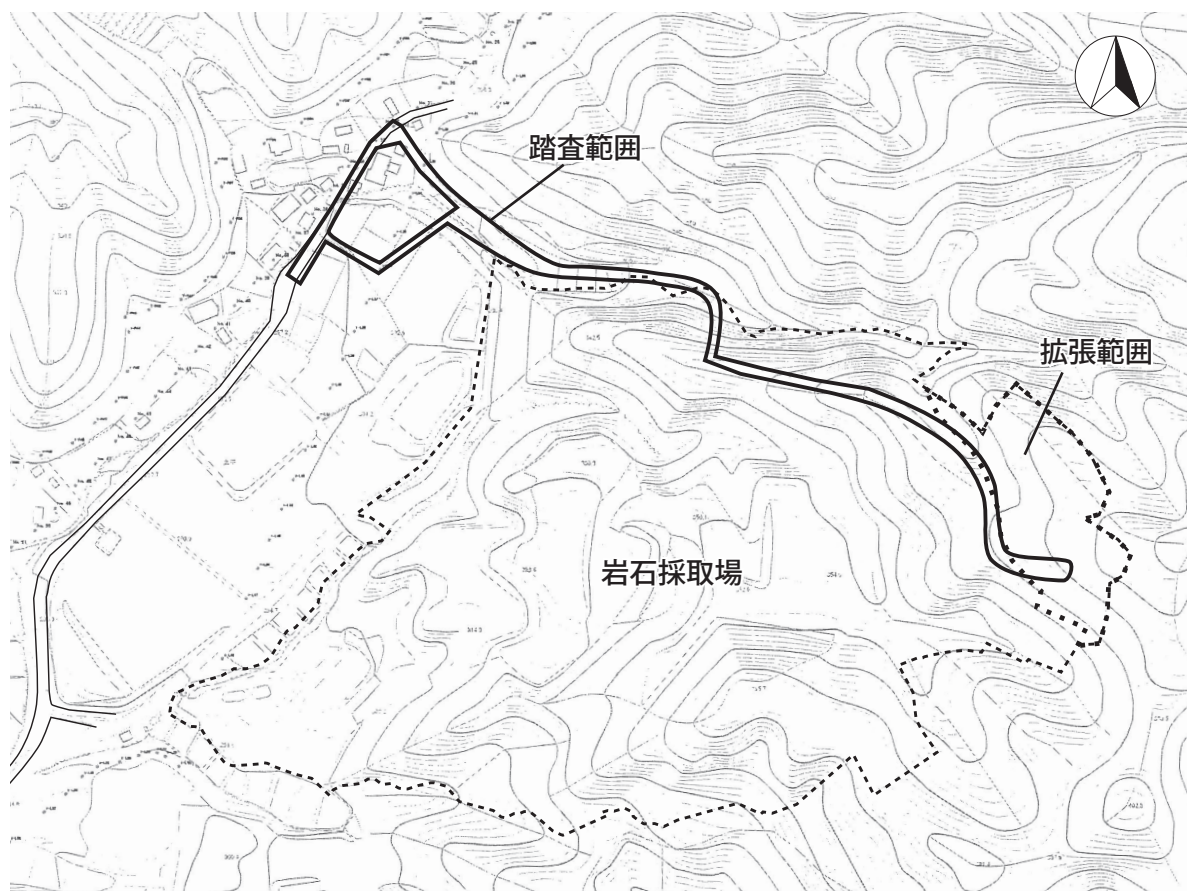
対象地は、既存の岩石採集場で、採集範囲を拡大する計画が生じたものである。拡張予定地は遺跡分布調査未実施地であることから、事前に踏査を行い、地形の把握と遺跡の有無を確認する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

調査地は、土平地区の南側を占める山地北側にあたる。山の南側には、赤松山館跡、^{かまどやま}竈山館跡等の中世城館址が存在することから、城郭遺構の有無について確認しながら採集場の縁に沿って踏査した。予定地については、側面から尾根の形状を観察しつつ移動したが、特に人工的な地形改変は確認されなかった。踏査範囲内において遺物も確認されなかった。踏査の最奥地点から先には山頂方向へ向かう山道が存在しており、山の南側に館跡が多いことからすれば山頂付近には何らかの遺構がある可能性はあるが、今次計画はそこまで到らないことから、今回拡張する範囲には遺跡が存在する可能性は低いと思われる。



第 15 図 土平地区踏査範囲図 S=1/5000

0 100m

12 三間通字桑旗前

- (1) 調査日 平成 29 年 10 月 2 日
- (2) 調査場所 南陽市三間通字^{かぼた}桑旗前（水神社）
- (3) 調査目的

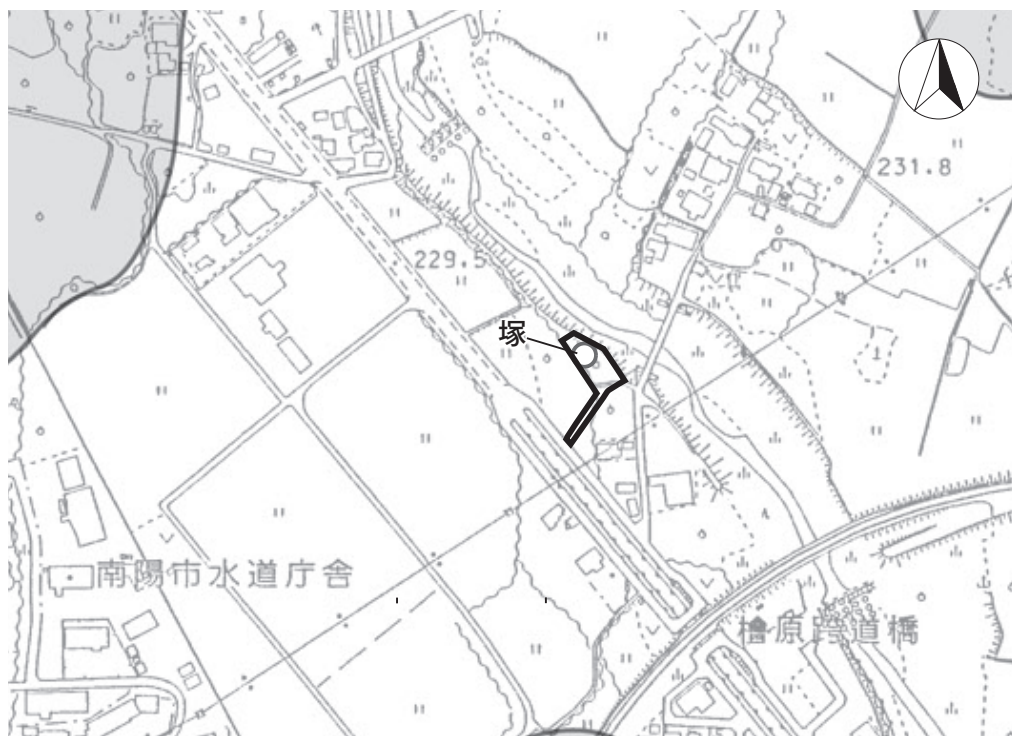
対象地は、遺跡分布調査未実施地である。塚上に板碑等の石造物、石祠が存在する。吉野川河川改修工事により塚が破壊される予定であることから事前に踏査を行い、塚の性格の把握及び遺跡の有無を確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

調査地は、吉野川右岸の川岸にあたり、1辺数メートルの方形～楕円形状の塚地形の上に板碑等が存在している。大型板碑は、「三間通字桑旗橋大日板碑」として市史編集資料第 25 号で報告されており、板碑は移転されたものではなく建設当時の状態であるという報告がなされている。また、「南陽市の板碑」（加藤和徳 平成 18 年村山民俗学会発行）によれば、鎌倉時代中期頃の造立とされている。草が繁茂し踏査では遺物は確認されなかった。塚の性格については今後試掘調査が必要と思われる。



第 16 図 三間通字桑旗前踏査範囲図 S=1/5000

0 100m

Ⅲ 試掘調査

1 太子堂遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 2 月 28 日
- (2) 調査場所 南陽市柵塚字太子堂 406-4
調査対象地（工事）面積 1,251.89㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

当該地は周知の太子堂遺跡の範囲内である。民間開発の予定が生じたことから試掘調査を実施し、遺跡包含層の深度及び残存状況を確認する。20m メッシュで幅 2 m×長 10m の試掘溝 3 箇所（TT1～TT3）を設定し、試掘を行った。

(5) 結果

土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺構は TT1 で柱穴等が確認された。遺物は TT1、3 の第 3 層、TT2 の第 2 層から出土した。土師器と若干の須恵器坏片が認められる。南側ほど遺物の出土量が少なく、遺構面も深くなる傾向がみられた。

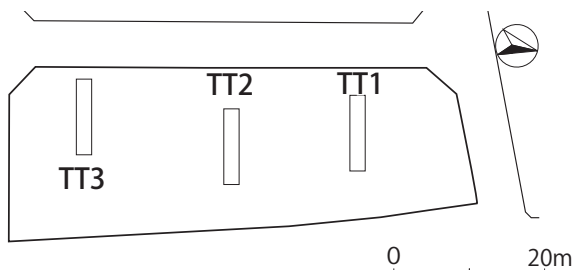
(6) 考察

対象地は吉野川右岸にあたる。遺跡は自然堤防上に立地するとみられるが、自然堤防はあまり発達しておらず、今次調査地は後背湿地に近い位置と考えられる。

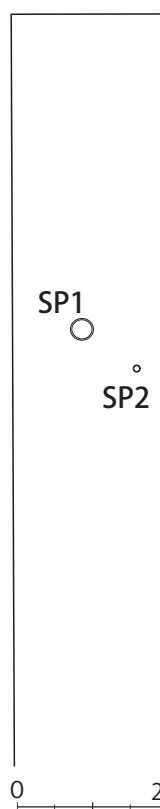
試掘により TT1～TT3 から土師器片及び須恵器坏片が少量出土した。遺構は TT1 第 4 層で柱穴とピットが各 1 個検出された。出土遺物から時期は平安時代と考えられる。



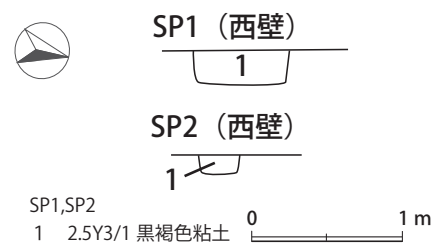
第 17 図 太子堂遺跡開発予定位置図 S=1/5000



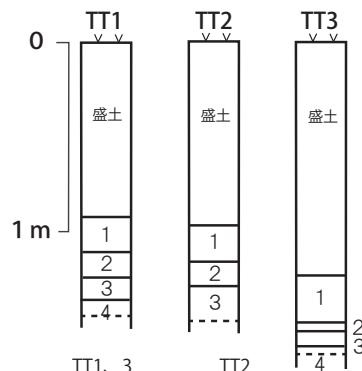
第 18 図 太子堂遺跡トレンチ配置図 S= 1/1000



第 19 図 太子堂遺跡 TT1 平面図 S= 1/100



第 20 図 太子堂遺跡 SP 断面図 S= 1/50



- | | |
|-------------|-------------|
| TT1、3 | TT2 |
| 1 暗灰色粘土 | 1 灰色粘土 |
| 2 暗褐色粘土 | 2 黒褐色粘土 |
| 3 黒色粘土 | 3 暗オリーブ褐色粘土 |
| 4 暗オリーブ褐色粘土 | |

第 21 図 太子堂遺跡柱状図 S= 1/40

2 大橋城跡

- (1) 調査日 平成 29 年 3 月 25 日
- (2) 調査場所 南陽市大橋字館ノ内 595-4
調査対象地（工事）面積 185.32㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は大橋城跡の西端に位置する。対象地に住宅新築工事の計画が生じたことから、遺跡内容確認のため試掘調査を行った。調査対象地 185.32㎡について、10 mメッシュを基本に幅 2 m×長 2 mの試掘溝 1 箇所を設定のうえ調査し、試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

遺構は確認されなかった。遺物は寛永通宝 1 枚が検出された。

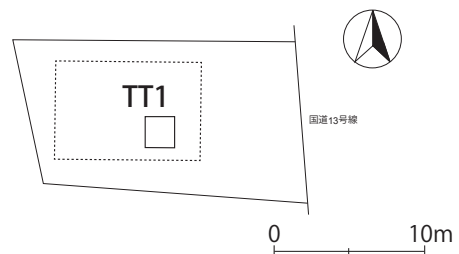
(6) 考察

対象地は、大橋城本丸西堀跡の外（西側）に位置し、大橋城本丸の南堀にあたる屋代川旧河道の北側に発達した自然堤防上にあたる。字町浦とともに大橋城の二の丸に相当する範囲内とみられる。調査地点は東・南・北側を堀で囲まれた狭い平坦地であったと思われるが、南北の堀は畑地として埋められ、東側の本丸西堀は国道 13 号線で埋められている。

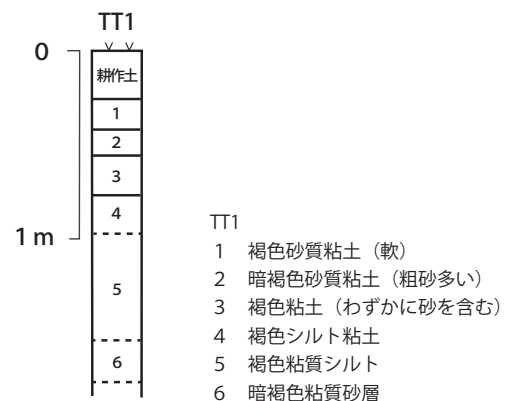
対象地の土層は、近世以降に堆積した層が厚いとみられ、全般に粘性が強く、柔らかい粘土層である。現表土から約 70cm 下（第 3 層）で寛永通宝 1 枚が出土した。その他に遺物や遺構は確認されなかった。



第 22 図 大橋城跡開発予定位置図 S=1/5000



第 23 図 大橋城跡トレンチ配置図 S= 1/500



第 24 図 大橋城跡柱状図 S= 1/40

3 東唐越館跡

- (1) 調査日 平成 29 年 3 月 30 日 (TT1)、7 月 27 日 (TT2)
- (2) 調査場所 南陽市三間通字円蔵西 1316-1、1316-4、1316-5、1315
調査対象地 (工事) 面積 973.19m²
- (3) 調査原因 民間開発 (93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の東唐越館跡の範囲内である。調査対象範囲 973.19m²について、幅 1 m×長 3 m の試掘溝 (TT1) 1 箇所、幅 2 m×長 10 m の試掘溝 (TT2) 1 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。TT1 は、調査地点が盛土されているため盛土が少ない地点 A でボーリングステッキによる土層調査を試掘に先行して行い、試掘箇所の土層と比較した。TT1 は安全上、深堀を行わなかったが、堀底から 1 m 下までボーリングステッキによる土層調査を行った。

(5) 結果

TT2 で館跡に伴う可能性のある大溝跡 1 条を検出した。

(6) 考察

対象地は吉野川右岸にあたり、遺跡は微高地上に立地する。東唐越館跡は字限図調査で確認された城館址で、小規模な方形館である。従前の調査成果から、対象地は東唐越館の主郭及び北堀跡に位置すると考えられる。

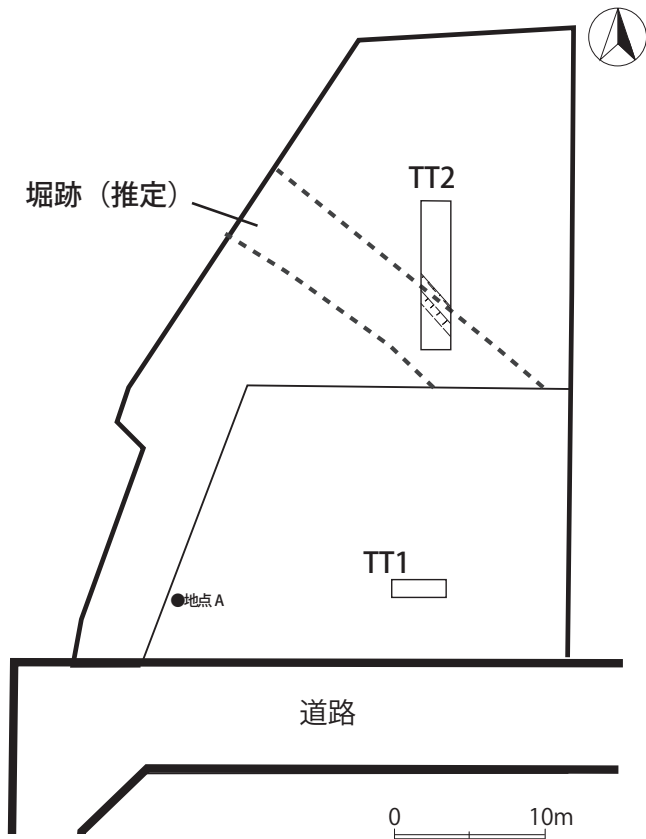
ボーリングステッキによる調査では、主郭内と考えられる地点 A で、水田面から 28cm 下の比較的浅い深さで締りの良い硬い粘土層が確認された。主郭遺構面と考えられるが圃場整備の履歴や周囲の微地形から、館跡は既に削平を受けている可能性が高い。

TT1 では、第 3 層から土師器と思われる小さな土器片が 1 点確認された。同層には炭粒が散見される。遺構は確認されなかったが土層から主郭東側の堀の上の可能性はある。

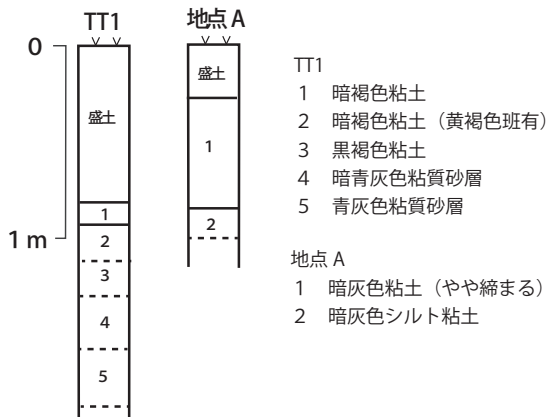
TT2 は、主郭北辺の堀跡が存在すると考えられている地点に設定した。遺物は、水田盤土層 (第 1 層) から土器片が 1 点出土した。土器片は摩滅が著しく、胎土に粗砂を含む。縄文土器と思われ、流れ込みと思われる。遺構は大溝跡を確認した。大溝跡は館に伴う堀跡とみられ、字限図調査で推定される主郭北堀跡の位置と概ね一致している。トレンチは堀跡を斜めに切っている。堀底は礫層で止まっており、現況最大深は 1.1m 程度である。堀の幅は、南の立ち上りが確認されないため不明である。



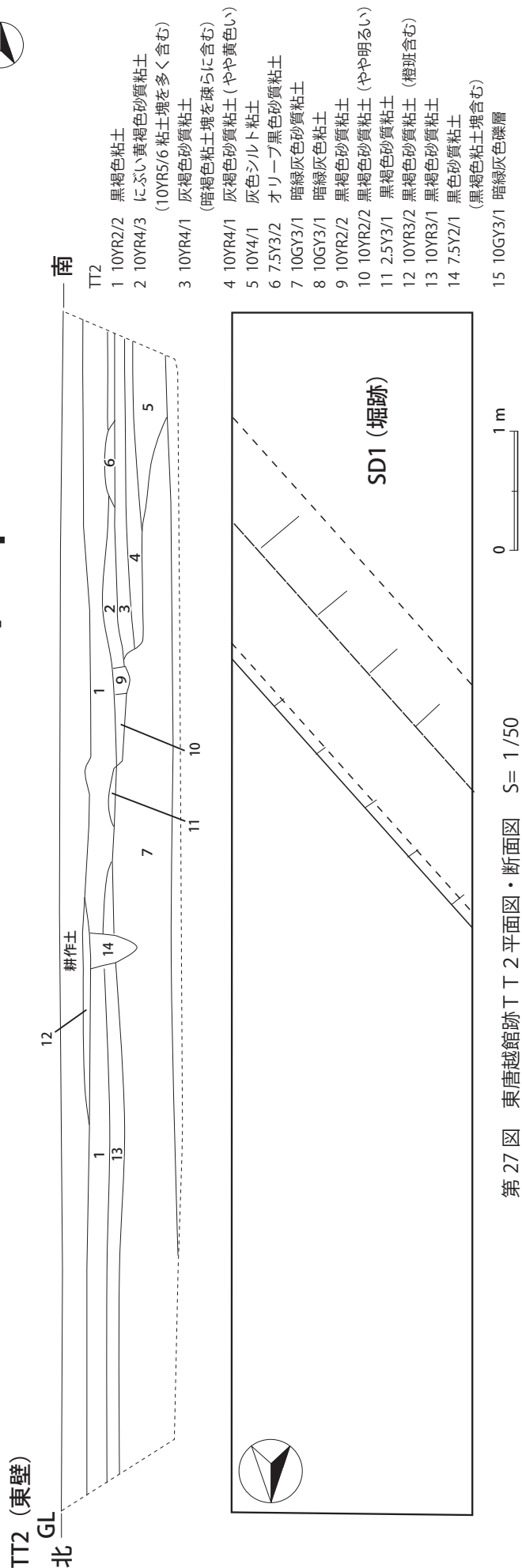
第 25 図 東唐越館跡開発予定位置図 S=1/5000 0 100m



第 26 図 東唐越館跡トレンチ配置図 S= 1/500



第 28 図 東唐越館跡柱状図
S= 1/40



第 27 図 東唐越館跡 T 2 平面図・断面図 S= 1/50

4 大塚遺跡隣地

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 4 日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字高野（地点 1）、高梨字西屋敷（地点 2）
調査対象地（工事）面積 64㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

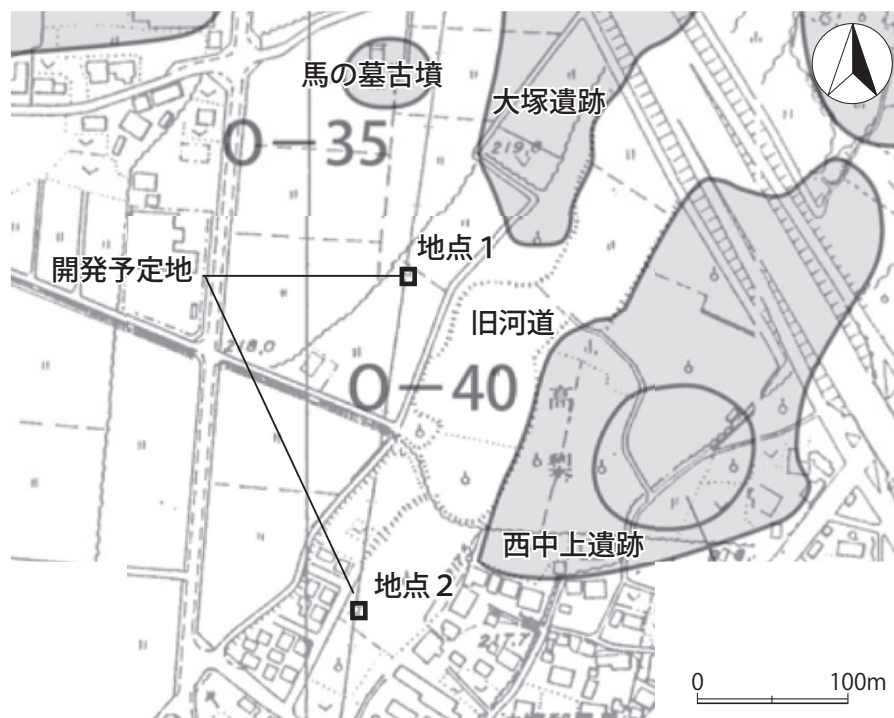
対象地は、周知の大塚遺跡及び馬の墓古墳の南方にあたり、遺跡分布調査未実施地である。既存電力鉄塔の改修工事の計画が生じたことから、遺跡の有無を確認するため試掘調査（地点 1）及び立会調査（地点 2）を行うものとした。試掘調査対象範囲 64㎡について、既存鉄塔の基礎を避け、幅 1 m×長 1 m の試掘穴（T P 1）1 箇所と幅 2 m×長 5 m の試掘溝（T T 2）1 箇所を設定し、試掘を行った。

(5) 結果

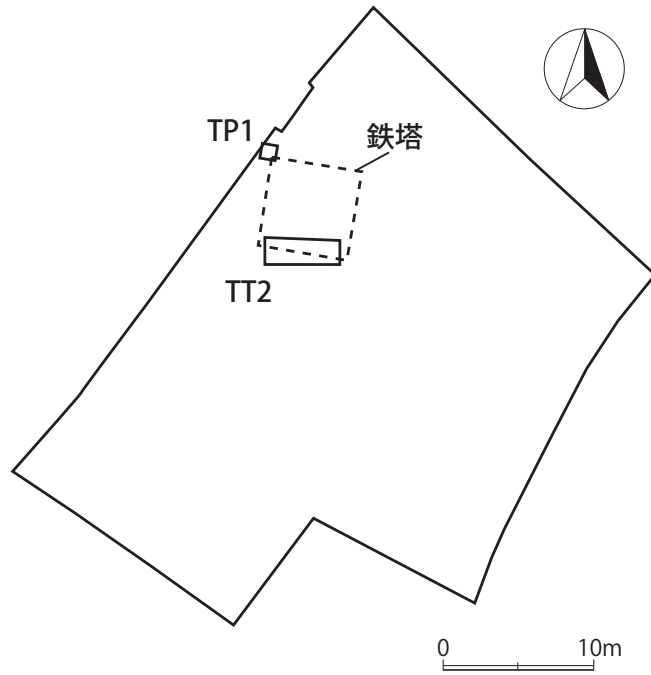
地点 1 では、遺物は、縄文時代の磨製石斧、古墳～平安時代の土師器片、平安時代の須恵器片が検出された。遺構は柱穴等が検出された。大塚遺跡の範囲拡張が必要である。地点 2 では、遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考察

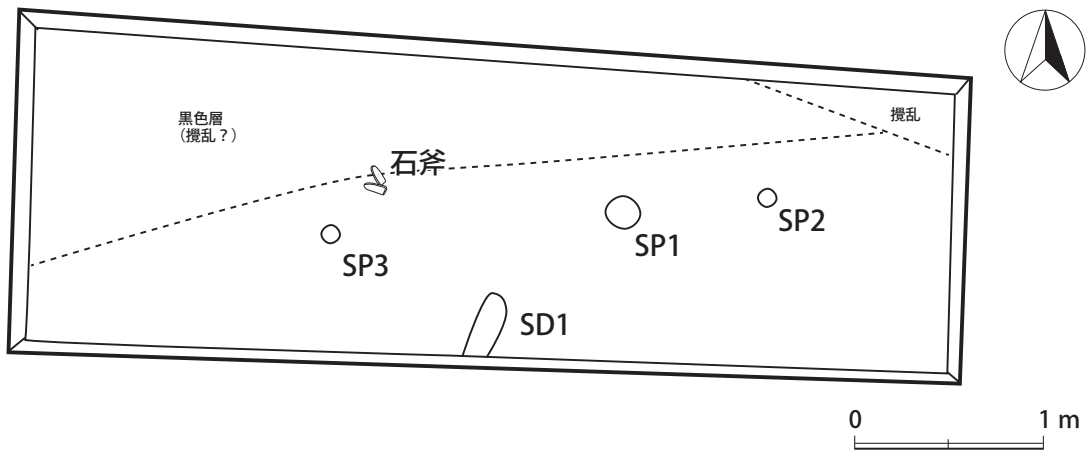
地点 1 は吉野川旧河道右岸の自然堤防上にあたる。対象地の北東約 70m には大塚遺跡が広がり、同じ自然堤防上に立地している。地点 1（試掘地）では、T P 1 の第 3 層から須恵器片（図版第 1 図）及び土師器片が出土、遺構は地表下約 60cm でピット 1 個を確認した。T T 2 では、第 2 層から土師器片及び磨製石斧（図版第 2 図）が 2 点まとまって出土した。遺構は、地表下約 50cm でピット等を数箇所確認した。遺構の時代は不明である。工事範囲内は既設基礎工事で既に攪乱を受けており、攪乱のない箇所について今次試掘で確認したことから、遺跡について工事による新たな影響はないと思われる。地点 2（立会調査）は、旧河道内又は旧河道左岸に位置し、西中上遺跡の隣地である。遺構・遺物は確認されなかった。



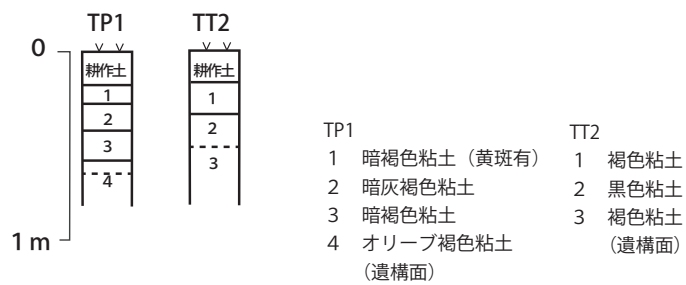
第 29 図 大塚遺跡隣地開発予定位置図 S=1/5000



第 30 図 大塚遺跡隣地トレンチ配置図 S= 1/500



第 31 図 大塚遺跡隣地T T 1 平面図 S= 1/40



第 32 図 大塚遺跡隣地柱状図 S= 1/40

5 高梨字北之前

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 14 日
 (2) 調査場所 南陽市高梨字北之前 5 2 6 - 2
 調査対象地 (工事) 面積 488.91㎡

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の西中上遺跡の東に位置し分布調査未実施地である。公共施設整備の予定が生じたことから、周知の遺跡の広がりや遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うこととした。調査対象範囲 488.91㎡について 10m メッシュを基本に幅 1 m×長 2 m の試掘溝 3 箇所を設定し、試掘を行った。

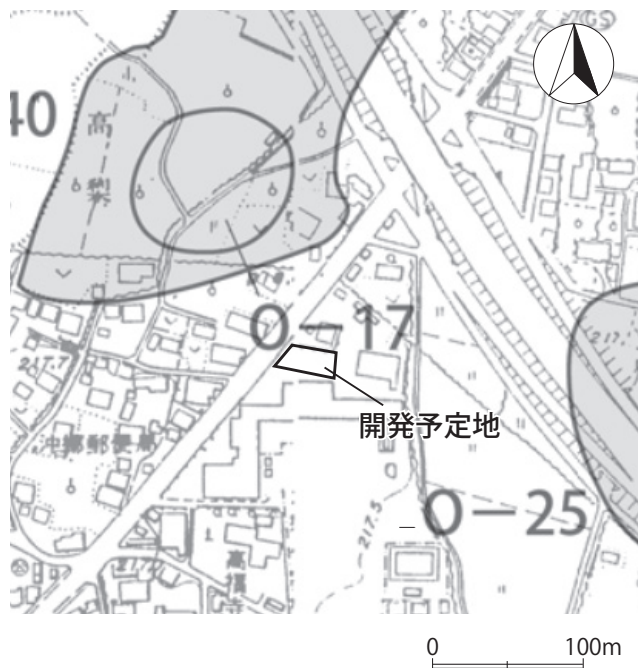
(5) 結果

遺構・遺物は確認されなかったことから西中上遺跡の範囲は今次調査地までは広がらないと考えられる。

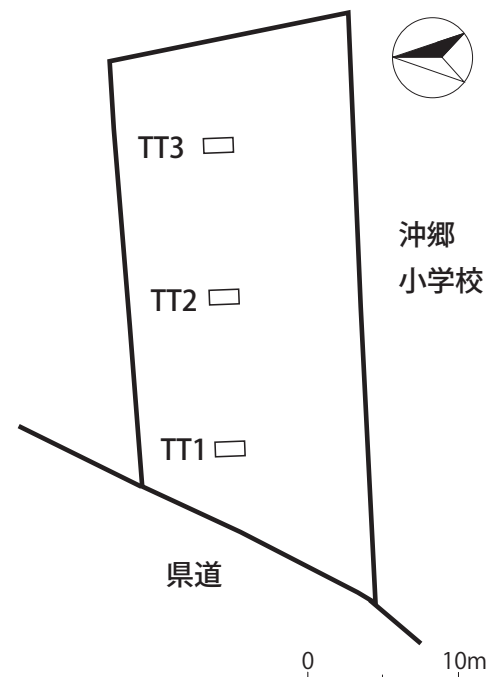
(6) 考察

対象地は、吉野川旧河道左岸の自然堤防上に広がる西中上遺跡の東に位置し、後背湿地に相当すると思われる。遺構・遺物は検出されなかった。

試掘は湧水により困難な作業となった。水田盤土層下に粘性の強い灰色粘土層が堆積し、地表下約 157cm まで灰色粘土層と灰色粘質砂層の堆積がみられた。



第 33 図 高梨字北之前開発予定位置図 S=1/5000



第 34 図 高梨字北之前トレンチ配置図 S= 1/500



第 35 図 高梨字北之前柱状図 S= 1/40

6 観音堂遺跡隣地

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 17 日
- (2) 調査場所 南陽市蒲生田字高畑 6 6 6 - 3
調査対象地（工事）面積 525.88㎡
- (3) 調査原因 道路整備
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、観音堂遺跡の隣地である。市道整備の計画が生じたことから周知の遺跡の広がりや遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うこととした。調査対象範囲 525.88㎡について、10m グリットを配し、幅 1 m×長 1 m の試掘穴 4 箇所を設定し、手掘りで試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構は検出されなかった。遺物は土師器片 1 点であるが、流れ込みと思われる。

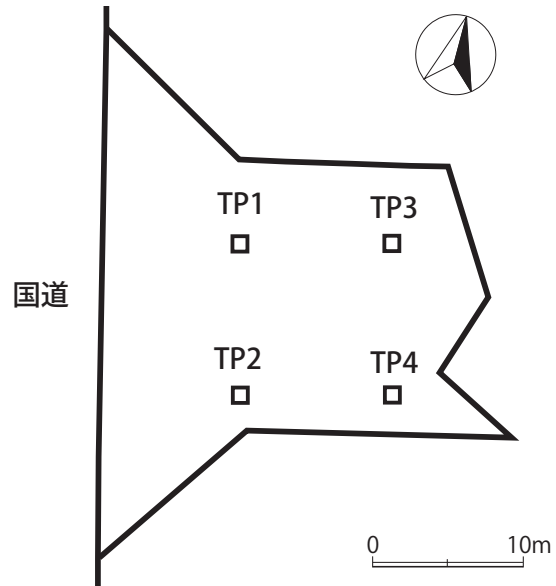
(6) 考察

対象地は、吉野川旧河道の左岸の後背湿地或は旧河道内に位置する。一帯は蛇行する小河川が鳥足状に走り、幾つもの小自然堤防を形成する地域で遺跡はその微高地上に立地する。今次調査地点は低地部にあたり、河川の流路跡に位置すると思われる。

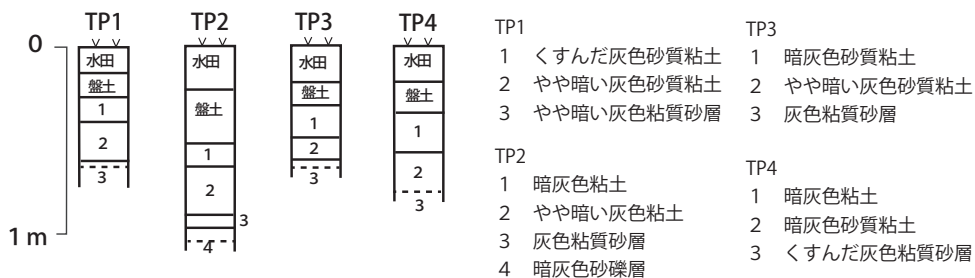
遺構は検出されなかった。遺物は TP 2, TP 4 の水田盤土下の旧耕作土層と思われる層（第 1 層）から土師器片各 1 点が出土した。遺物数が少なく小片であり、流れ込みと思われる。旧耕作土層の下層にくすんだ灰色粘砂層や砂礫層等の河川堆積による層が見られる。今次対象地には観音堂遺跡の範囲は広がらないと思われる。



第 36 図 観音堂遺跡隣地開発予定位置図 S=1/5000



第 37 図 観音堂遺跡隣地試掘穴配置図 S= 1/500



第 38 図 観音堂遺跡隣地柱状図 S= 1/40

7 宮内字八幡田二

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 17 日
 (2) 調査場所 南陽市宮内字八幡田二 594-1
 調査対象地（工事）面積 637.71㎡
 (3) 調査原因 民間開発
 (4) 調査方法及び内容

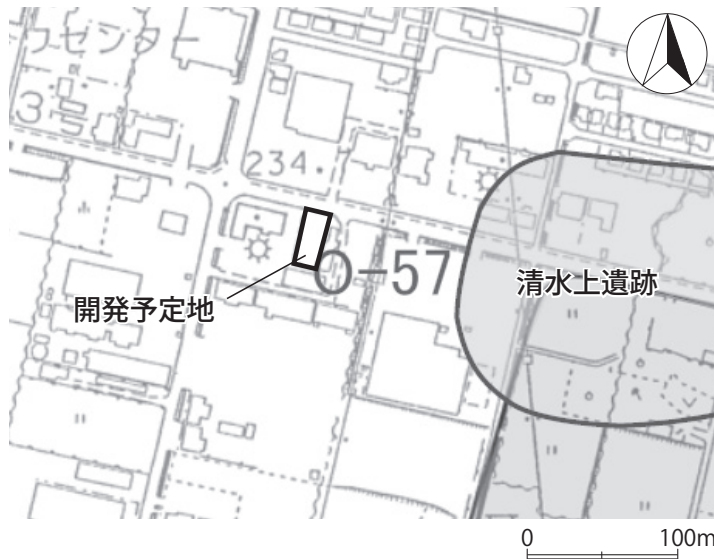
当該地は、周知の清水上遺跡の西方約 130 m に位置し、遺跡分布調査未実施地である。工場拡張の計画が生じたことから、清水上遺跡の範囲把握と土層状況を確認するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 637.71㎡について、幅 2 m × 長 2 m の試掘溝 1 か所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。対象地は全面に 1 m 以上の厚い盛土がなされており、掘削困難のうえ盛土層と自然堆積層の境からの湧水が多く、安全上、部分的に 50cm × 50cm のサブトレンチを設定し 1.3 m まで掘り下げた。その下層はボーリングステッキによる土層調査を実施した。着工後、基礎工事の際に立ち会いを実施した。

(5) 結果

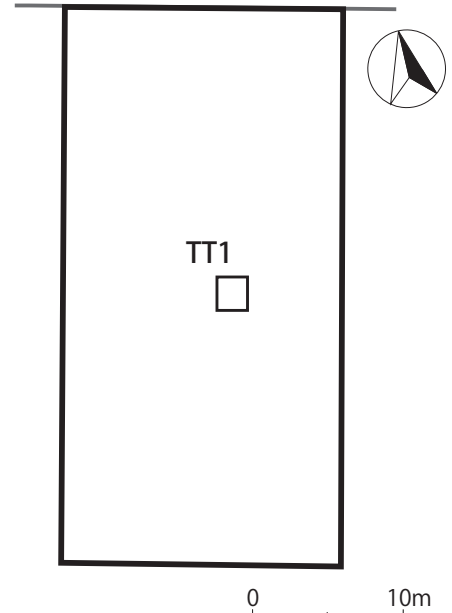
遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考察

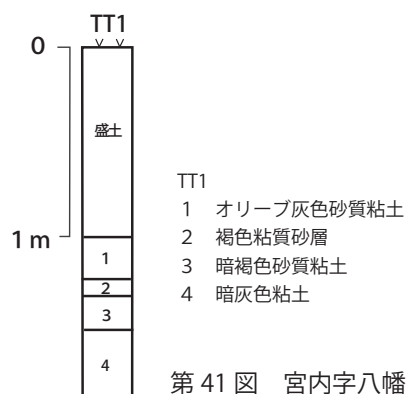
対象地は、宮内扇状地の扇央付近にあたり、沖郷条里制が施行された地域に推定されている。遺構・遺物は検出されず、工事立会でも遺物は確認されないため、今次対象地には清水上遺跡の範囲は広がらない可能性が高い。



第 39 図 宮内字八幡田二開発予定位置図 S=1/5000



第 40 図 宮内字八幡田二トレンチ配置図 S= 1/500



第 41 図 宮内字八幡田二柱状図 S= 1/40

8 宮内字黒木二（馬場遺跡隣地）

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 24 日～ 25 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字黒木二 1095-2 他
調査対象地（工事）面積 6,059㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の馬場遺跡の隣地で、遺跡分布調査未実施地である。民間開発の計画が生じたことから、遺跡範囲を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 6,059㎡について、幅 2 m × 長 10m の試掘溝 6 箇所と幅 1 m × 長 3 m の試掘溝 2 箇所の計 8 か所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構は T T 4 でピットを検出した。遺物は T T 7 の新しい水路跡から検出されたが、流れ込みと思われる。T T 4 付近以外の範囲は河川跡と考えられ、遺跡はないと思われる。

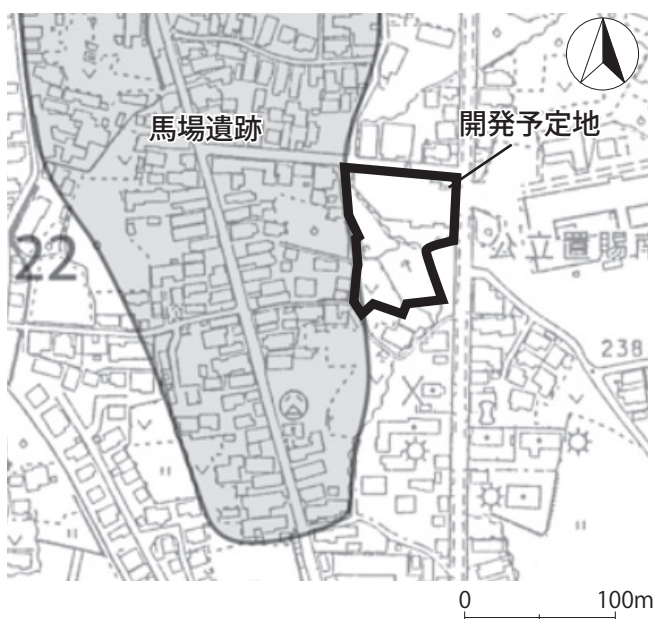
(6) 考察

馬場遺跡は中世の馬場跡又は館跡を含む遺跡で、馬場跡の平面形態は、東西約 130m、南北約 150m の南東角が変形した方形で、周囲を幅約 8～10m の堀が廻る。調査地は堀跡北東角の外側にあたり、吉野川右岸の川岸に位置する。南東角の変形は洪水による抉れ（川欠け）の結果とも考えられる。

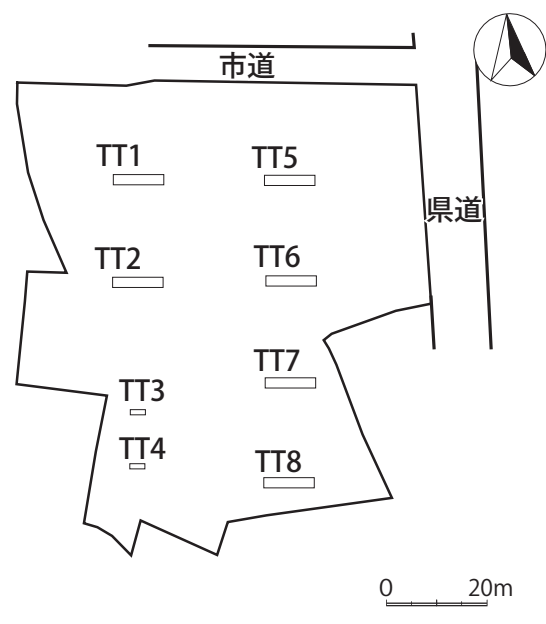
遺物は、T T 7 の旧水田面～盤土層に掘り込まれた新しい水路跡から、土師器又は土師質土器と思われる破片 2 点が確認されたが、出土状況から流れ込みと思われる。

遺構は、T T 4 でピット 3 箇所を確認した。遺物がないことから時代は不明であるが、当該地点は周知の馬場遺跡に含まれると思われる。

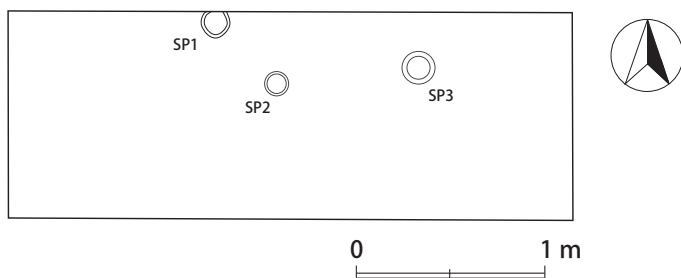
T T 3, 4 以外の地点では、旧盤土層下には砂礫層が厚く堆積しており、河川跡であったと思われ、吉野川の氾濫域西端にあたると推測される。



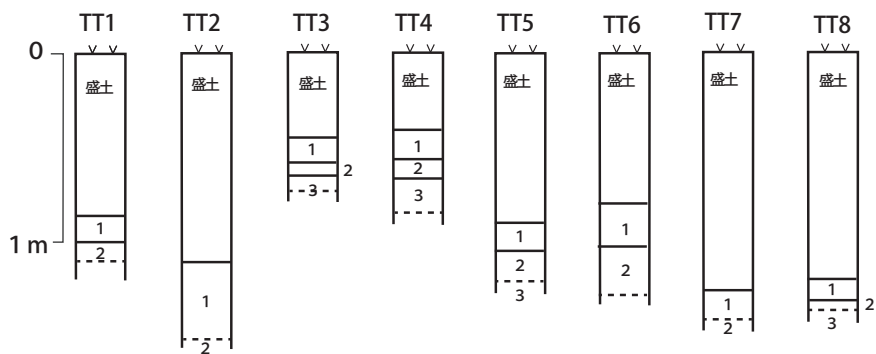
第 42 図 宮内字黒木二開発予定位置図 S=1/5000



第 43 図 宮内字黒木二トレンチ配置図 S= 1/1500

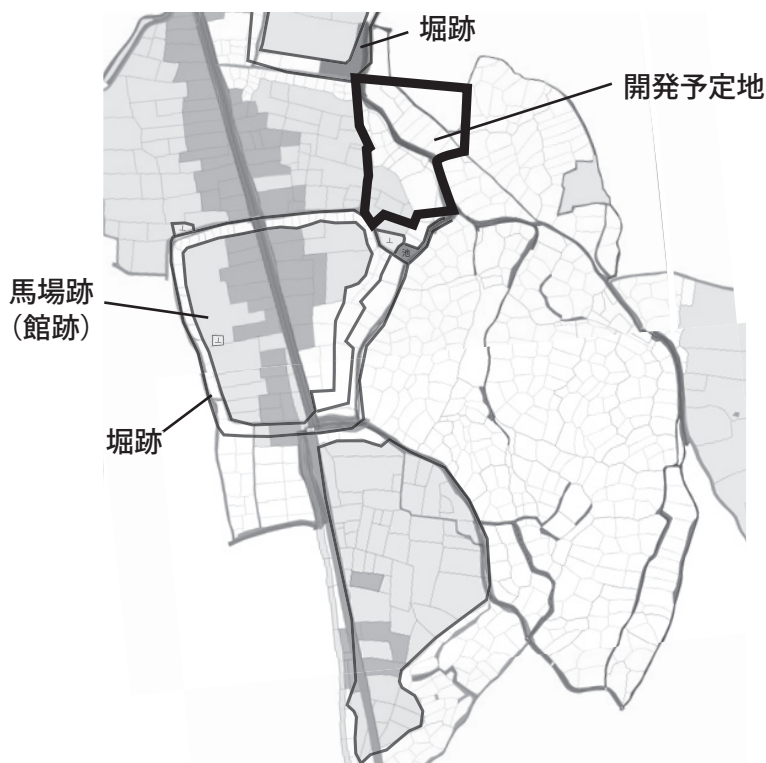


第 44 図 宮内字黒木二 TT4 平面図 S= 1/40



- | | | | |
|-------------|--------------|----------------|------------|
| TT1 | TT3 | TT5 | TT7 |
| 1 暗褐色粘土 | 1 暗褐色砂質粘土 | 1 暗褐色粘土 | 1 やや暗い灰色砂層 |
| 2 やや暗い灰色砂礫層 | 2 くすんだ褐色砂質粘土 | 2 暗灰褐色粘土 | 2 暗灰色砂礫層 |
| | 3 黄褐色砂質粘土 | 3 赤褐色粘質砂層(礫含む) | |
| TT2 | TT4 | TT6 | TT8 |
| 1 暗褐色粘質砂層 | 1 暗褐色砂質粘土 | 1 暗灰色砂質粘土 | 1 暗灰色砂質粘土 |
| 2 暗灰色砂質粘土 | 2 くすんだ褐色砂質粘土 | 2 やや明るい暗灰色砂質粘土 | 2 暗褐色砂質粘土 |
| | 3 黄褐色砂質粘土 | | 3 暗褐色砂礫層 |

第 45 図 宮内字黒木二柱状図 S= 1/40



第 46 図 馬場遺跡 馬場跡 (館跡) 略図 0 100m
(明治期字限図より) S=1/5000

9 植木場一遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 10 日、11 日
- (2) 調査場所 南陽市露橋字地藏堂 357
調査対象地（工事）面積 329.46㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

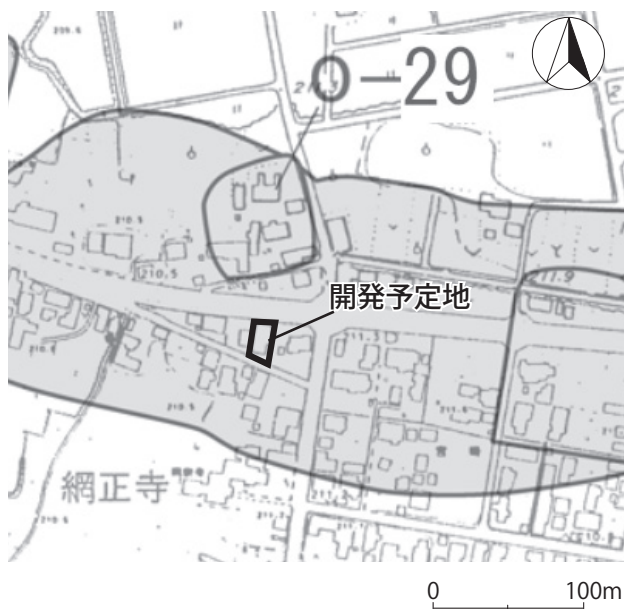
当該地は、周知の植木場一遺跡の範囲内である。住宅建築の計画が生じたことから、試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 329.46㎡について、幅 2 m × 長 5 m の試掘溝 2 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

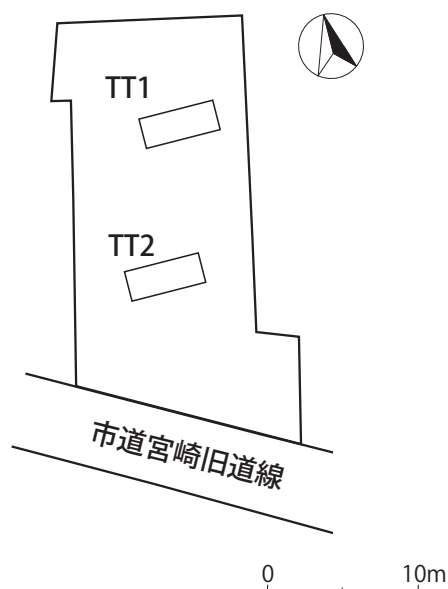
遺構は平安時代の竪穴住居跡（S T 1）1 棟を検出した。遺物は土師器片、須恵器片を検出した。

(6) 考察

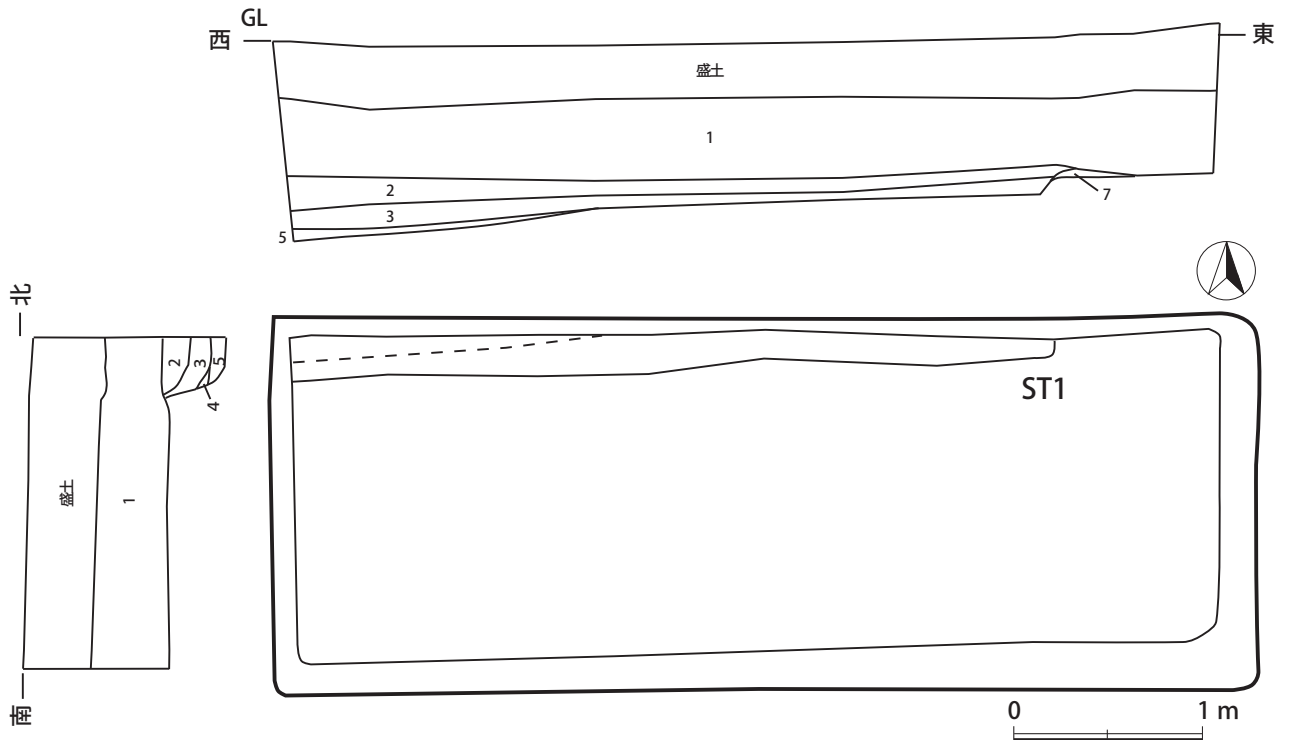
植木場一遺跡は古墳時代～平安時代の遺跡である。調査地の北側県道は平成 8 年に県埋文センターが発掘調査を実施、小河川跡を挟んですぐ西側に削平された円墳が確認されている。遺物は、T T 1、T T 2 とともに地山直上から土師器片、須恵器片を少量検出した。T T 1 の S T 1 覆土からは須恵器坏片 1 点（ヘラ切り）（図版第 3 図）が出土した。遺構は、T T 1 で竪穴住居跡を確認した（S T 1）。平面が隅丸方形を呈する竪穴住居跡の南辺と思われる、その軸は東西方位に沿っている。T T 2 ではピット 4 箇所を確認した。S P 1、S P 2 は角柱と思われる掘り込みは 10cm 程度と浅い。S P 3、S P 2 は丸柱で掘り込みは 20cm 強である。時代は不明だが、少なくとも 2 時期の建物跡と思われる。



第 47 図 植木場一遺跡開発予定位置図 S=1/5000

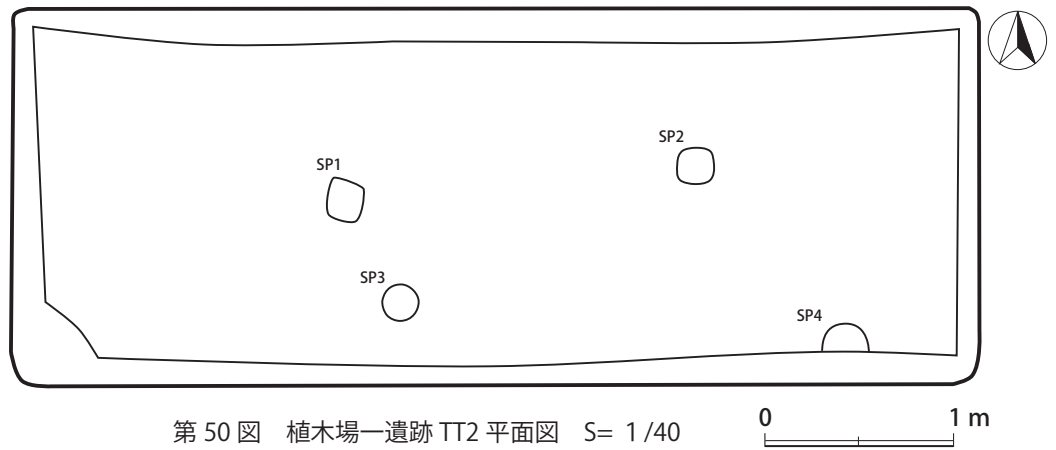


第 48 図 植木場一遺跡トレンチ配置図 S= 1/500

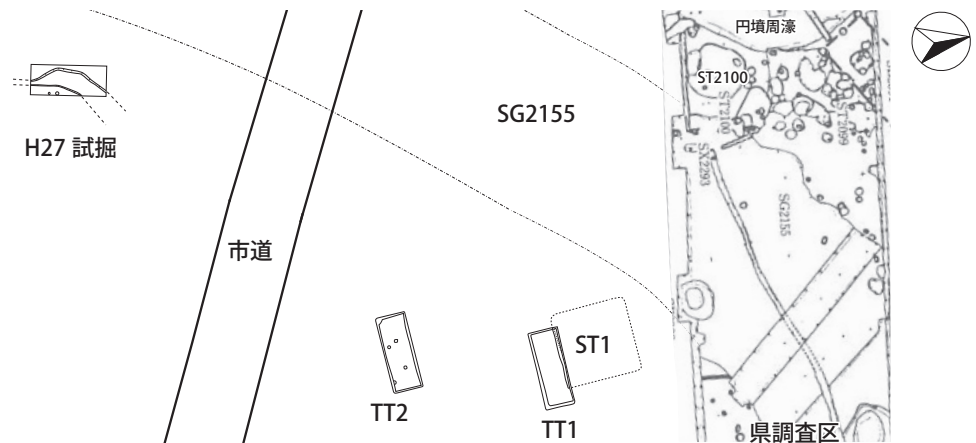


- TT1
- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 | 5 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (6層の土を斑に含む、貼床) |
| 2 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (1.3層より黒い) | 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質粘土 (地山) |
| 3 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (6層の土を含む) | 7 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (1層より明るい) |
| 4 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (6層の土をより多く含む) | |

第49図 植木場一遺跡 TT1 平面図・断面図 S= 1/40



第50図 植木場一遺跡 TT2 平面図 S= 1/40



第51図 植木場一遺跡 遺構図 S=1/500

10 砂塚字西塩竈

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 12 日
- (2) 調査場所 南陽市砂塚字西塩竈 2775
調査対象地（工事）面積 152㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の塩竈前遺跡に隣接する。民間開発の計画が生じたことから遺跡の広がり把握するための試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 152㎡について、幅 1 m × 長 5 m の試掘溝 1 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

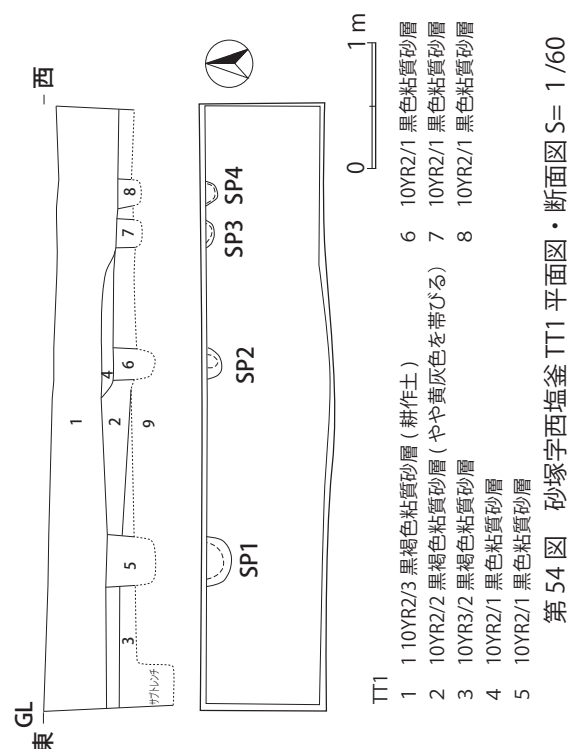
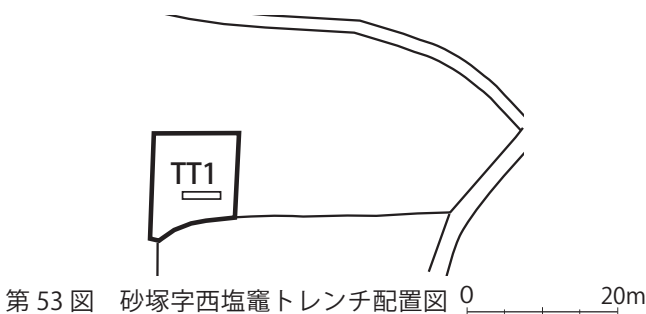
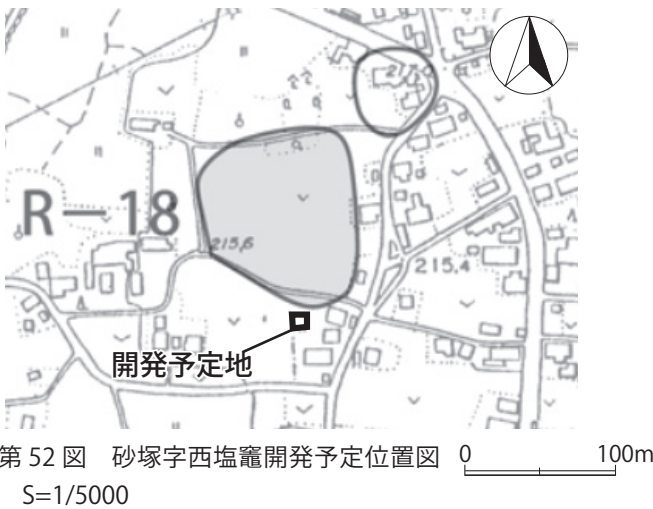
(5) 結果

遺構は、近世と思われるピットを検出した。遺物は、近世～近代の陶器片を確認した。

(6) 考察

調査地は、塩竈前遺跡の南に位置する。塩竈前遺跡は縄文～弥生時代の遺跡で旧織機川の自然堤防上に立地する。

遺物は、表土層から近世～近代の陶器片が出土した。周辺踏査において石錐（図版第 4 図）を 1 点表採したが、周知の遺跡範囲内である。遺構は、ピット 4 箇所を確認した。確認される層位が浅いことから時代的には新しく、近世以降の可能性が高いと思われる。周辺で地元の方から聞き取りを行ったところ、「当該地の西～西北の畑で山芋栽培をしていた際に 1 m くらい下から石器や土器が出てきた」、「当該地付近には江戸時代に建てられた屋敷があった。当該地より西へ 40 m の畑地では硝煙が採取されたと聞いている」とのこと。この遺物出土情報によれば、塩竈前遺跡の範囲は現行範囲よりやや西南に広がる可能性が高い。また、近世の屋敷があったという情報からすれば、今次検出の遺構は江戸時代の建物跡の可能性を考えることができる。



11 中落合遺跡（中落合運河跡）

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 16 日
- (2) 調査場所 南陽市中落合字北原ノ西（字五百刈）793-1
調査対象地（工事）面積 488㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の中落合遺跡の北に位置し、遺跡の広がり把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 488㎡について、幅 1 m × 長 3 m の試掘溝 3 箇所と幅 1 m × 長 1 m の試掘穴 1 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。また、運河跡と見られる大溝跡の北端が検出されたことから、溝跡の断面を把握するため、現況で溝跡の窪地が残る地点として、T T 3 から西へ約 100 m の地点 (A - A') を選び、ボーリングステッキを用いて土層を確認し、溝跡の断面図を作成した。

(5) 結果

遺構は、中落合運河跡の北端を検出した。遺物は検出されなかった。

(6) 考察

中落合遺跡は、平安時代の遺跡で古代置賜郡衙に関連する重要遺跡である。中世の中落合館跡が重複する。遺跡は、宮内扇状地の扇央部にあたり、織機川と旧吉野川に挟まれた自然堤防上に立地する。対象地はその自然堤防より一段低い川間低地で現況は盛土がなされている。対象地は、中落合遺跡の北側、中落合運河跡の北辺に接する。

遺物は出土しなかった。遺構は、中落合運河跡の北辺を検出した。運河跡は平成 5 年の字限図調査で確認された遺構で、幅約 10 m の直線的な大溝である。織機川を西端とし、西から東へ約 420 m の地点で東南に折れた後、約 400 m で吉野川旧河道の蛇行地点（字「八景」）へ接する。文献資料に記録が無く、時代や造られた背景は不明で、今回が初めての調査となる。直線的な道路跡の可能性もあったが、堆積層から運河跡と判断する。

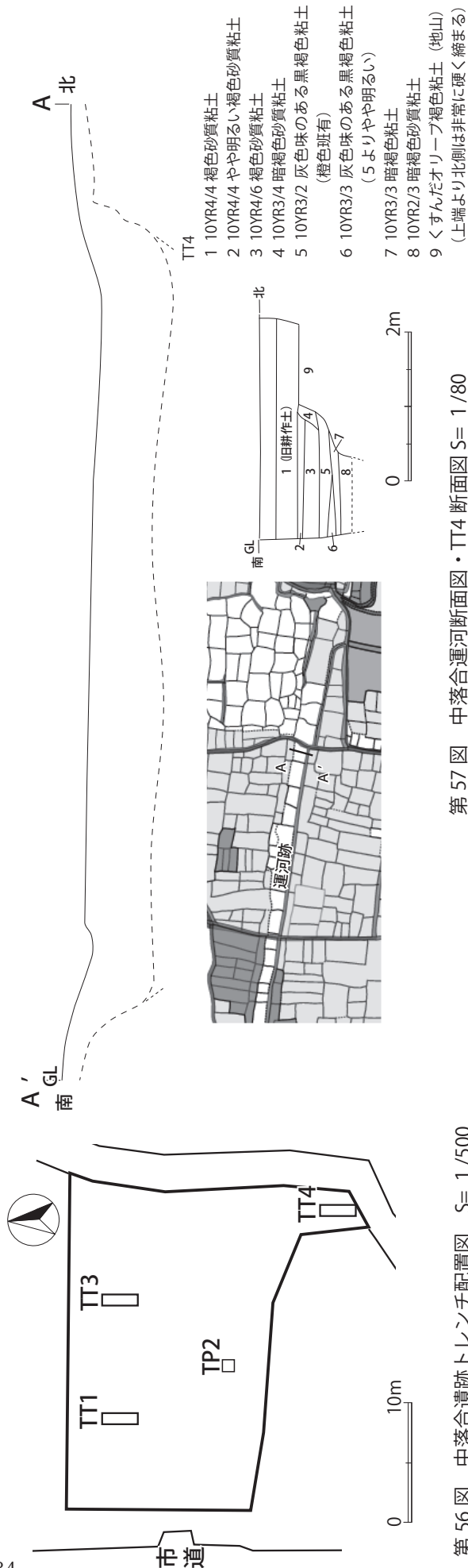
運河北側の上場付近は地山が硬く締まっており、運河に並行した道路跡があることも考えられる。運河北側の法面には、犬走り状の段が見られる。平成 27 年の沢見遺跡で検出された平安時代の大溝にも同様の段が見られ、溝の作り方に類似性が指摘できる。

運河跡は、明治 8 年には既に水田になっており、中世・近世の大規模開発の記録も無いことや、運河が東で接続していた吉野川自体が天正年間に川で無くなった記録からすれば、運河跡は天正年間以前に作られたものと考えられる。中落合遺跡の性格からすれば、郡衙に関連する運河や郡衙域の区画の一部である可能性も検討する必要がある。運河跡は、T T 3 から東へ約 70 m 付近で南東へ折れるが、その先にやや広く西側に楕円状に膨らんで窪地となっている地点があり、船着場跡とも考えられる。運河が折れる付近に位置することや平面形状などは、米沢市の古志田東遺跡の船着場跡とも類似する。



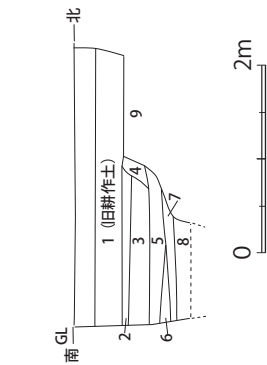
第 55 図 中落合遺跡開発予定位置図 S=1/5000

0 100m

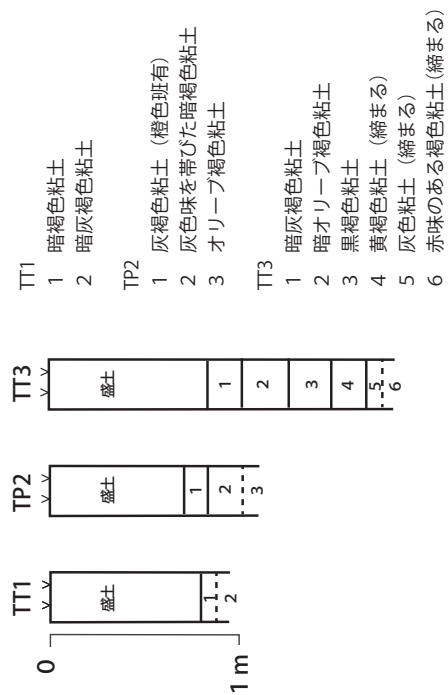


第56図 中落合遺跡トレンチ配置図 S= 1/500

- TT4
- 1 10YR4/4 褐色砂質粘土
 - 2 10YR4/4 やや明るい褐色砂質粘土
 - 3 10YR4/6 褐色砂質粘土
 - 4 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
 - 5 10YR3/2 灰色味のある黒褐色粘土 (橙色班有)
 - 6 10YR3/3 灰色味のある黒褐色粘土 (5よりやや明るい)
 - 7 10YR3/3 暗褐色粘土
 - 8 10YR2/3 暗褐色砂質粘土
 - 9 くすんだオリーブ褐色粘土 (地山)
- (上端より北側は非常に硬く締まる)



第57図 中落合運河断面図・TT4断面図 S= 1/80



第58図 中落合遺跡柱状図 S= 1/40



第59図 明治8年字限図 (中落合運河跡)

12 東畑A遺跡(1)

(1) 調査日 平成29年5月18日、19日、24日

(2) 調査場所 南陽市俎柳字東畑1099-1

調査対象地(工事)面積941.77㎡

(3) 調査原因 民間開発(93条)

(4) 調査方法及び内容

対象地は、東畑A遺跡に一部かかることから、遺跡の範囲と内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲941.77㎡について、幅1m×長10mの試掘溝1箇所、幅1m×長5mの試掘溝2箇所、幅1m×長1.7mの試掘溝1箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

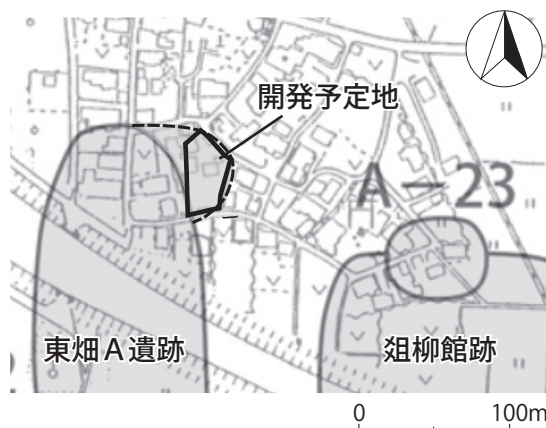
遺構は竪穴住居跡2棟、溝跡、ピット等を検出した。遺物は須恵器片、土師器片、土錘1点、近世陶器等が出土した。東畑A遺跡の範囲を修正する必要がある。

(6) 考察

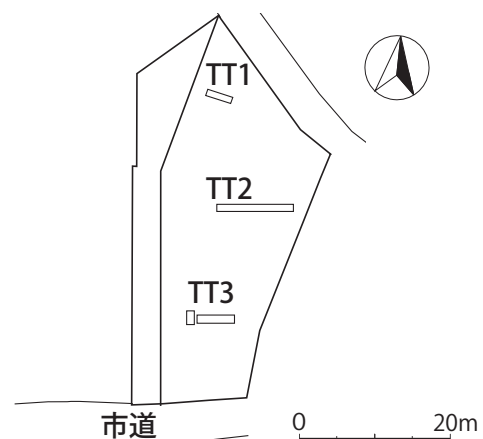
調査地は、吉野川と屋代川の合流地点に近い自然堤防の微高地にあたる。東畑A遺跡は平安時代の遺跡である。俎柳館跡から西へ135mに位置し、館に関連する集落遺跡も存在すると考えられる。

遺物は、各トレンチの表土層、第3層及び遺構覆土から出土し、平安時代の須恵器片、土師器片、土錘1点と近世陶器片等が出土した。

遺構は、TT1では、溝跡3条、柱穴4箇所を確認した。このうちSD3の溝底から平安時代の須恵器坏底が出土した。柱穴やSD1は近世～近代のものと思われる。TT2では、竪穴住居跡1箇所(ST2)、柱穴6箇所を確認した。竪穴住居跡は深さ5cm程度が残存している状況で、覆土から土師器片が出土した。平安時代の竪穴住居跡と考えられる。SP1から近世陶器(播鉢)(図版第5図)が出土した。SP1は第2層から掘り込まれていることから第2層上面が近世の遺構面と思われる。SP4は竪穴住居に伴う柱穴と思われる。TT2では第1層に掘り込まれた3箇所の礎石跡が見られるが、地権者によれば、昭和30年頃まで営業していた菜種油工場跡のものと考えられる。TT3では、竪穴住居跡(ST1)と見られる遺構を南壁断面で確認、TT3の西側に追加トレンチを設定し、竪穴住居跡の西北角を検出した。これらからST1は1辺が約4mの規模と考えられる。ST1の遺構覆土や床面からは、被熱痕のある礫数点、土師器片、土錘(図版第6図)等が出土した。平安時代の竪穴住居跡と考えられる。



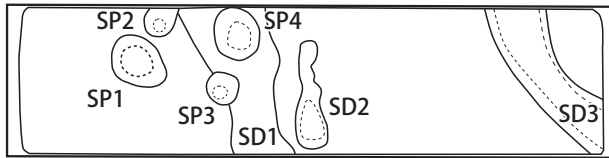
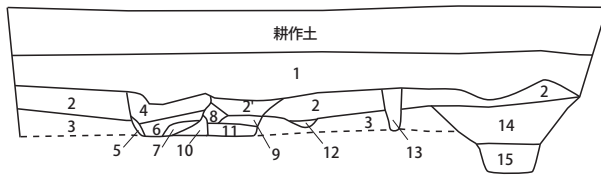
第60図 東畑A遺跡(1) 開発予定位置図 S=1/5000



第61図 東畑A遺跡(1) トレンチ配置図 S=1/1000 35

H=GL+21cm

西 — — — — — 東

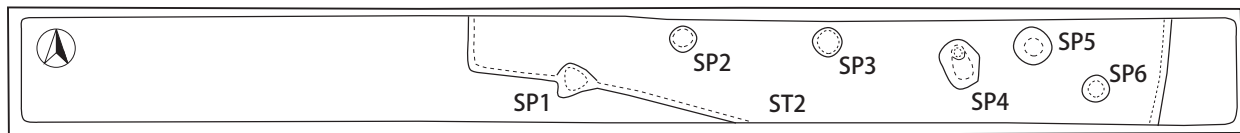
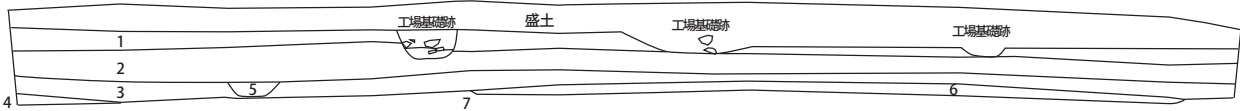


TT1

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (2' は 1 層の土が混じる)
- 3 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 4 10YR3.5/4 暗褐色砂質粘土
- 5 10YR4.5/4 褐色砂質粘土
- 6 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 7 10YR3.5/3 暗褐色砂質粘土
- 8 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 9 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 10 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 11 10YR4/4 やや明るい褐色砂質粘土
- 12 10YR3/3 やや明るい暗褐色砂質粘土
- 13 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
- 14 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 15 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (褐色粘土混じる)

第 62 図 東畑 A 遺跡 (1) TT 1 平面図・断面図 S= 1/50

西 — — — — — 東

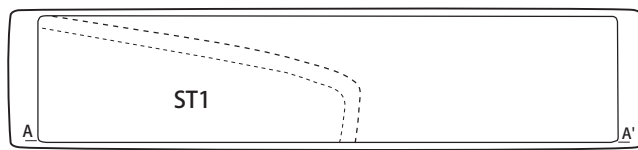
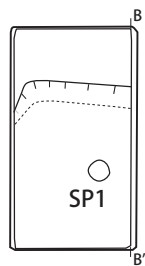


TT2

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (黄褐色班混じり)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 3 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (炭やや混じる)
- 4 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
- 5 10YR2/2 黒褐色砂質粘土
- 6 10YR3.5/2 黒褐色砂質粘土
- 7 10YR4/4 褐色砂質粘土 (地山)

0 1m

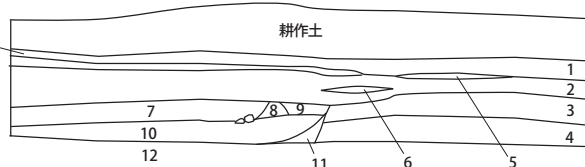
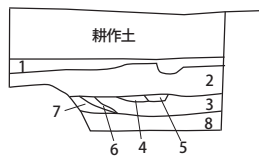
第 63 図 東畑 A 遺跡 (1) TT 2 平面図・断面図 S= 1/60



北 B H=GL+34cm

B' 南 西 A H=GL+26.7cm

A' 東



0 1m

TT3 追加トレンチ

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 3 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (土器含)
- 4 10YR2/3 やや明るい黒褐色砂質粘土
- 5 10YR3/3 やや明るい暗褐色砂質粘土 (褐色班有)
- 6 10YR3/3 やや明るい暗褐色砂質粘土 (褐色粘土・土器含)
- 7 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (褐色粘土を含まない、土器含む)
- 8 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (粗砂多い。土器片・炭を含む)

TT3

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 2 10YR3/4 やや明るい暗褐色砂質粘土
- 3 10YR4/4 やや黄色い褐色砂質粘土
- 4 10YR3/2 黒褐色砂質粘土
- 5 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (2層の土混じる)
- 6 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (2層の土混じる)
- 7 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (遺物少量含)
- 8 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 9 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 10 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (締め悪い)
- 11 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 12 10YR4/6 褐色砂質粘土 (地山)

第 64 図 東畑 A 遺跡 (1) TT 3 平面図・断面図 S= 1/60

13 東畑A遺跡(2)

- (1) 調査日 平成29年5月24日
- (2) 調査場所 南陽市俎柳字水下767、768、769-1、786-5、787、789-1
調査対象地(工事)面積1025.30㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

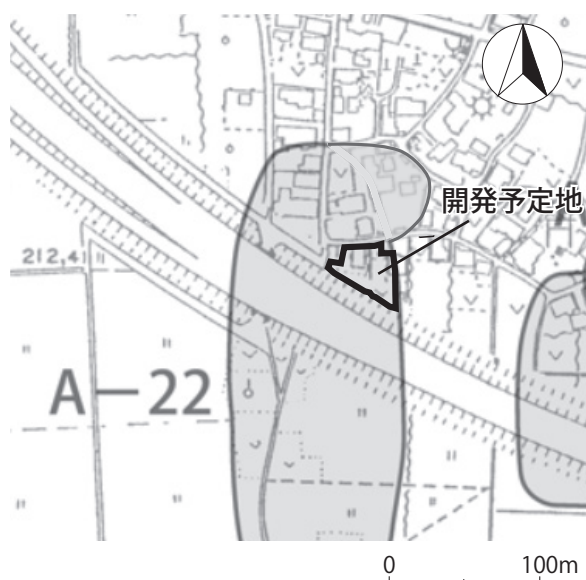
対象地は、東畑A遺跡の範囲内であることから、遺跡の内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲1025.30㎡について、幅1m×長5mの試掘溝3箇所を設定し、試掘を実施した。深掘りは重機で行った。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

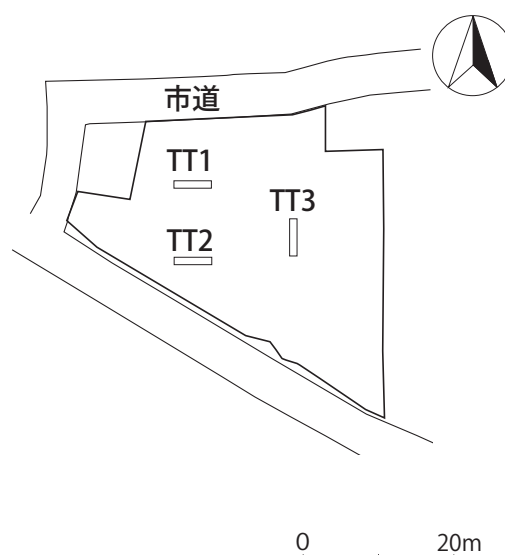
遺構・遺物は確認されなかった。河川跡のような低地であったとみられる。

(6) 考察

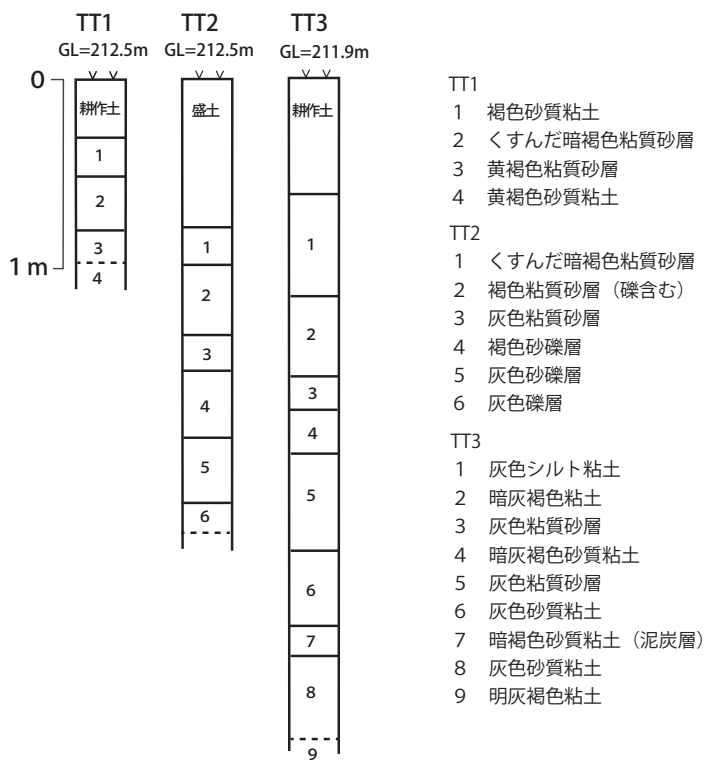
東畑A遺跡は平安時代の遺跡である。調査地は自然堤防南側の低地で、遺構・遺物は確認されなかった。土層状況からは河川跡であったと思われる。俎柳館跡に関連する濠跡のような機能を有していた可能性もある。TT2では第3層以下は砂礫層となるが、TT3では砂礫層が見られず砂質粘土層が主体であることや微地形分析から南北方向に流れる小河川東岸であった可能性がある。TT3では、地表面(標高211.9m)から2.93m下(標高208.8m~208.97m)で多くの未分解の植物遺体を含む泥炭層が検出され、泥炭層下に灰褐色粘土層の堆積がみられた。重機のアームが届く限界であることからその下層の状況は確認できなかった。



第 65 図 東畑 A 遺跡 (2) 開発予定位置図 S=1/5000



第 66 図 東畑 A 遺跡 (2) トレンチ配置図 S= 1/1000



第 67 図 東畑 A 遺跡 (2) 柱状図 S= 1/40



第 7 層の泥炭層

14 沢田遺跡(1)

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 26 日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字六角 600-4、600-5
調査対象地(工事)面積 400.78㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の沢田遺跡内である。周辺一帯は昭和 58 年から実施された土地区画整理事業に伴う分布調査実施済みの地域に含まれるが、対象地については当時民家が存在していたため試掘調査が未実施となった範囲にあたることから、遺跡の状況を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 400.78㎡について、幅 1.5m × 長 5m の試掘溝 3 箇所を設定し試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

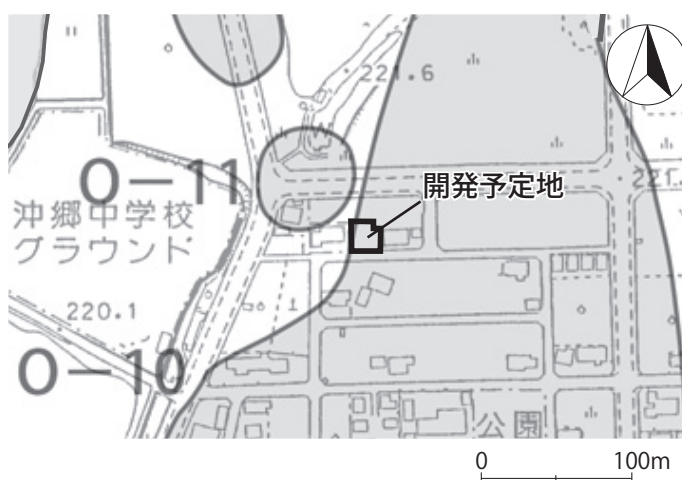
(5) 結果

遺構は、道路跡と思われる土層を確認した。遺物は、土師器、須恵器等を検出した。

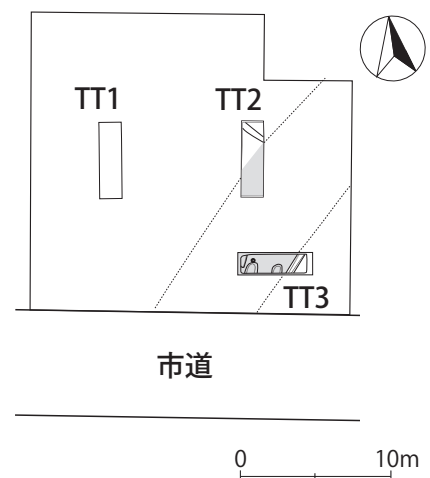
(6) 考察

沢田遺跡は弥生～中世の複合遺跡である。調査地は、旧吉野川左岸の自然堤防上にあたる。北へ約 60 m に位置する平成 27 年度発掘調査では平安時代の竪穴住居跡が 3 棟確認されている。

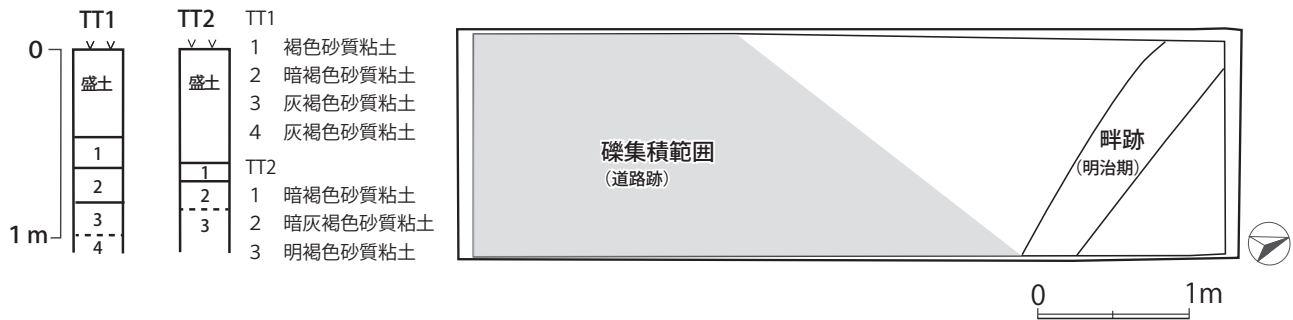
遺物は、TT1 第 3 層(TT2 第 2 層)から平安時代の土師器、須恵器が出土した。TT3 では、SD1 上層から近世陶器片が出土した。SP2 からは須恵器と陶器片が混在して出土した。遺構は、TT3 で溝跡(SD1)が検出された。掘り直された上層の溝跡は近世屋敷西端の区画になっていると思われる。TT2、TT3 で、道路跡と思われる粘土を混ぜ込んだ砂利層を検出した。SD1 はこの古道の側溝にもなっている。道路は明治 8 年字限図には描かれていないことから、それ以前に廃絶した古道と考えられる。TT3 では道路廃絶後の柱跡(SP1～4)を検出、SP2 の遺物から近世以降の遺構と考えられる。



第 68 図 沢田遺跡(1) 開発予定位置図 S=1/5000

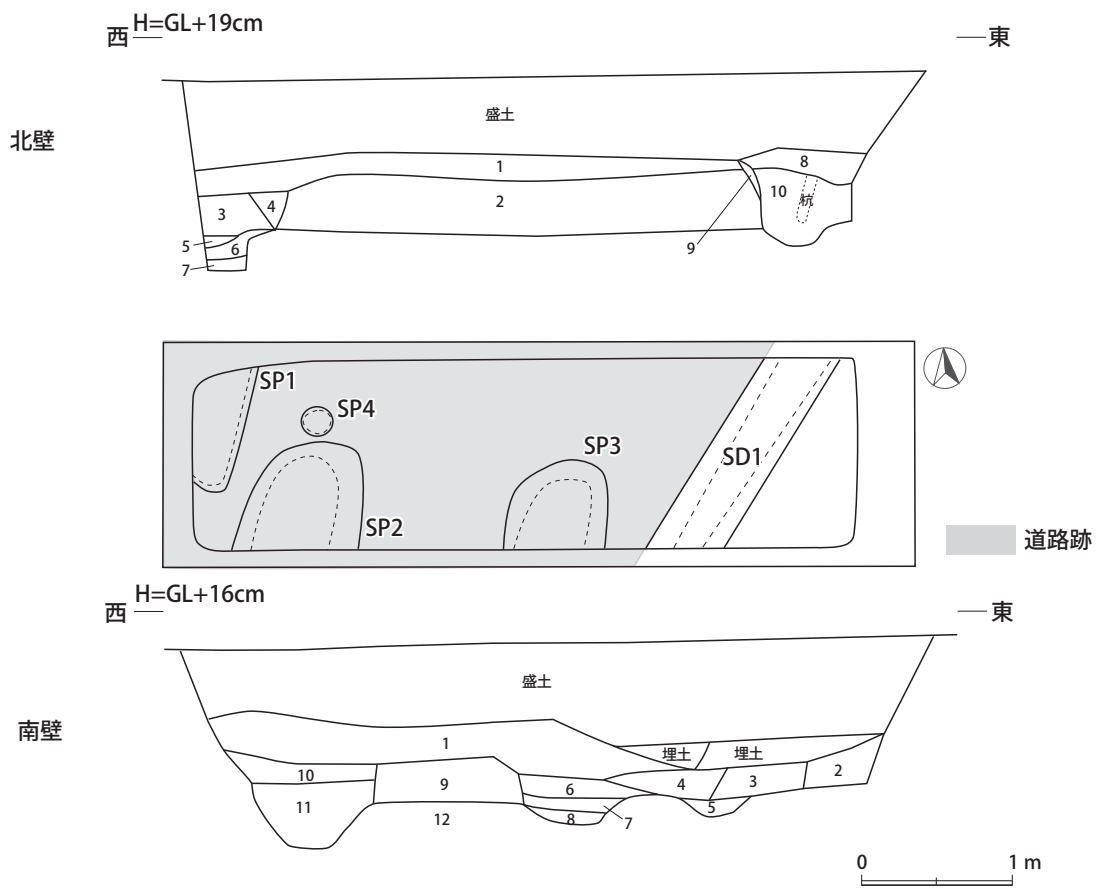


第 69 図 沢田遺跡(1) トレンチ配置図
S= 1/500



第 70 図 沢田遺跡 (1) 柱状図
S= 1/40

第 71 図 沢田遺跡 (1) T T 2 平面図 S= 1/50



- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| TT3 (北壁) | TT3 (南壁) |
| 1 盛土 (暗褐色砂質粘土) | 1 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 |
| 2 10YR3/3 黒褐色砂礫層 (道路跡) | 2 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 |
| 3 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 | 3 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (礫混じり) |
| 4 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (炭含) | 4 5Y3/1 オリーブ黒色砂質粘土 |
| 5 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 (炭含) | 5 10YR3/4 暗褐色砂礫層 |
| 6 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 | 6 10YR3/2 暗褐色砂質粘土 (炭含) |
| 7 10YR2/1 黒色砂質粘土 | 7 10YR3/2 暗褐色砂質粘土 (6層より黒い) |
| 8 5Y2/2 オリーブ黒色砂質粘土 | 8 10YR3/3 暗褐色粘質砂層 (礫多く含) |
| 9 5Y2/2 オリーブ黒色砂質粘土 | 9 10YR3/3 暗褐色砂礫層 |
| 10 10YR3/3 暗褐色粘質砂層 (礫多い) | (直径 5cm 程の礫が主体となる砂質粘土 : 道路跡) |
| | 10 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 |
| | 11 10YR2/2 黒褐色砂質粘土 |
| | 12 10YR3/4 暗褐色粘質砂層 |

第 72 図 沢田遺跡 (1) T T 3 平面図・断面図 S= 1/50

15 郡山字間々上一

- (1) 調査日 平成 29 年 6 月 29 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字間々上一 1218-16
調査対象地（工事）面積 677.54㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

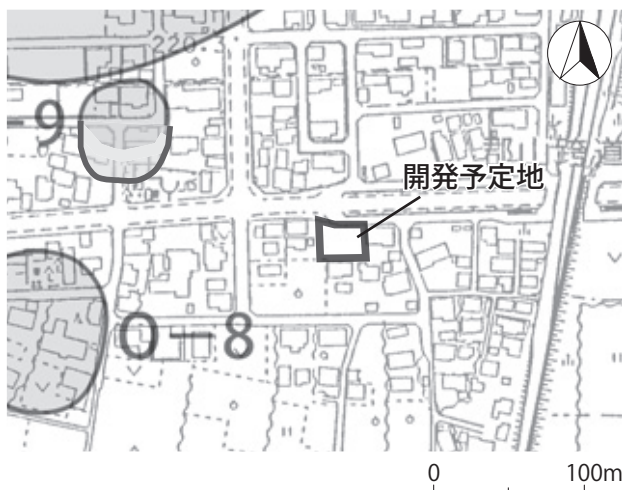
対象地は、遺跡分布調査未実施地にあたり、周知の沢口遺跡等に近いことから遺跡の有無を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 677.54㎡について、幅 2m × 長 20m の試掘溝 1 か所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

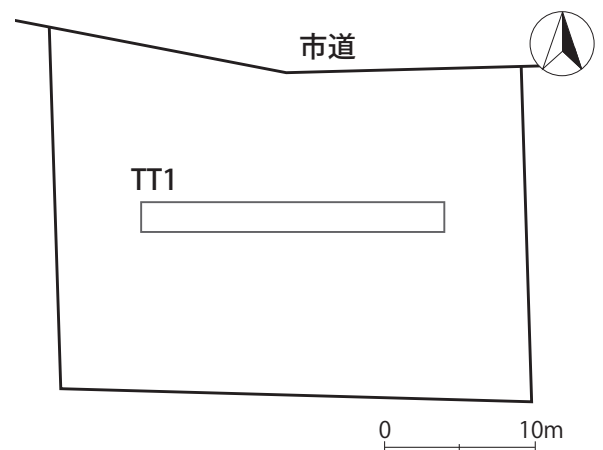
遺構は、確認されなかった。遺物は、土師器、須恵器、近世陶器等を検出した。

(6) 考察

調査地は、吉野川旧河道左岸にあたり、東南方向に流れる派流によって形成された自然堤防の西端にあたる。トレンチのほぼ中央付近に平成 3～4 年まで存在していた用水路跡が検出された。水路跡は明治期の字限図にも描かれている。遺物から、現代の用水路の前に存在していた素掘水路は近世の水路と思われる。最下層で検出されたオリーブ褐色粘土層は、周辺遺跡の状況から平安時代の遺構面と考えられ、その直上から土師器片が検出されている。遺物は、旧耕作層及び黒褐色層（第 4 層）から出土した。旧耕作層からは、少量の土師器片、須恵器片と近代以降と思われる陶器片等が出土した。第 4 層からは土師器片が 1 点出土した。遺構は確認されず、平安時代と思われる出土遺物も流れ込みと思われることから、対象地は遺跡の範囲外であると考えられる。なお、明治 8 年字限図では当該地東側隣地に屋敷や方形地割が見られ、地域伝承等から寺院跡等の可能性がある。



第 73 図 郡山字間々上一図開発予定位置図
S=1/5000



第 74 図 郡山字間々上一トレンチ配置図 S= 1/500



第 75 図 郡山字間々上一柱状図
S= 1/40

16 法師柳字漆房^{うるしばう}

- (1) 調査日 平成 29 年 7 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市法師柳字漆房 372-10
調査対象地（工事）面積 446.69㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の漆房遺跡の隣地であることから、遺跡の広がりを把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 446.69㎡について幅 2m × 長 5m の試掘溝 2 箇所を設定、試掘を実施した。TT1 は重機で 3.4m まで土層を確認した。試掘後埋め戻しを行った。

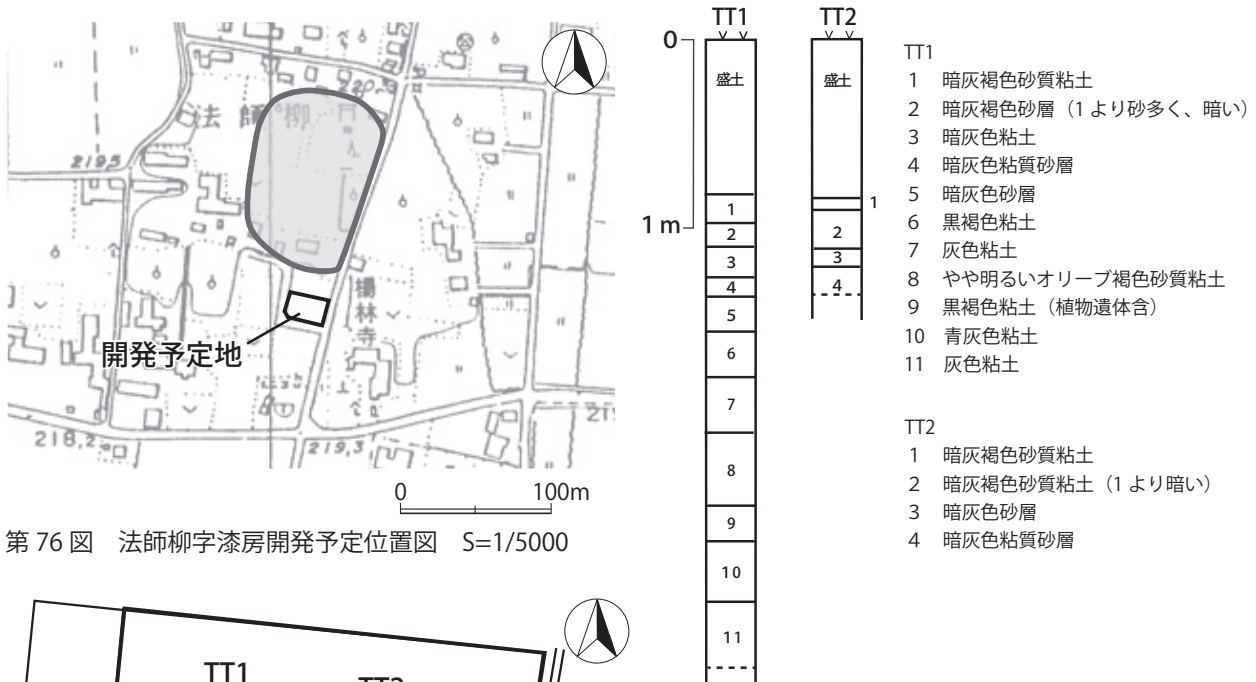
(5) 結果

遺構は、確認されなかった。遺物は、土師器、須恵器等を検出したが流れ込みと思われる。

(6) 考察

漆房遺跡は平安時代の遺跡である。遺跡は織機川の自然堤防上に立地し、調査地は漆房遺跡の南方約 30 m にあたる。現況は盛土されているが元々は水田であったと言う。

遺物は、旧水田盤土層（第 2 層）から平安時代の須恵器片、土師器片が出土した。出土層及び状況から遺物は流れ込みと思われる。遺構は確認されなかった。漆房遺跡の範囲は対象地までは広がらないと考えられる。



第 76 図 法師柳字漆房開発予定位置図 S=1/5000

第 78 図 法師柳字漆房柱状図 S= 1/40

第 77 図 法師柳字漆房トレンチ配置図 S= 1/500

17 からこし 唐越遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 5 月 12 日 (立会)、7 月 26 日 (試掘)
- (2) 調査場所 南陽市三間通字西唐越 445-2,450-6
調査対象地 (工事) 面積 3,021.02㎡
- (3) 調査原因 市役所駐車場整備 (94 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の唐越遺跡の範囲内であることから、遺跡の状況等を把握するため既存施設の解体工事立会及び試掘調査を行うものとした。試掘調査は、調査対象範囲 3,021.02㎡について、幅 2m × 長 20m の試掘溝 3 箇所を設定し、試掘を実施した。T T 1 は攪乱及び湧水が著しいことから T T 1 (幅 2m × 長 2m) と T T 4 (幅 2m × 長 3m) に分割した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

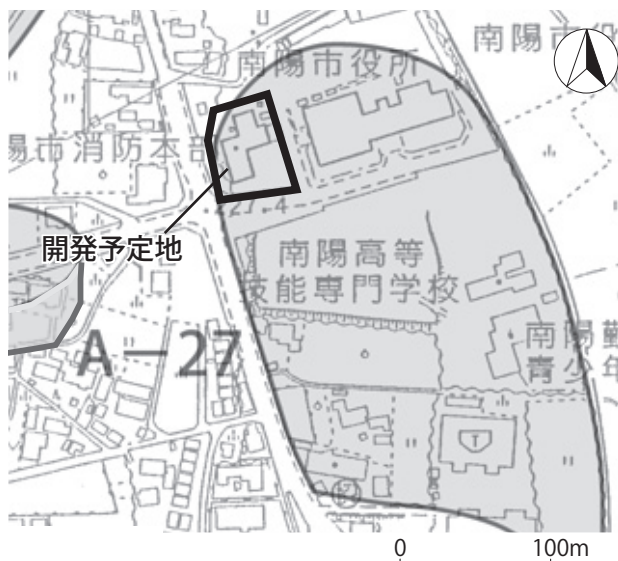
遺構は、平安時代とみられる竪穴住居跡 1 棟を確認した。遺物は、土師器片を検出した。T T 1、T T 4 は礫層で湧水が著しく崩れやすいため面整理はできなかった。

(6) 考察

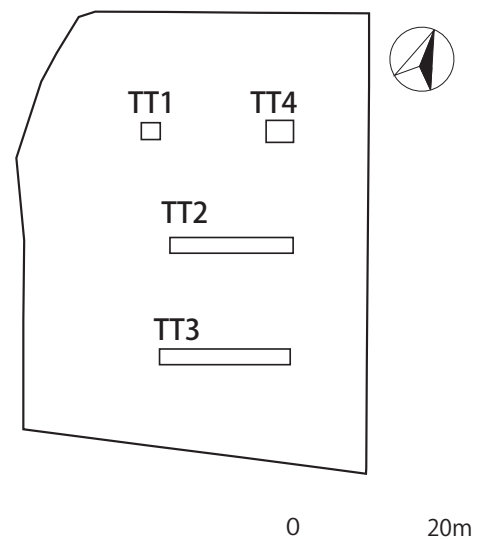
調査地は、宮内扇状地の扇央部で吉野川の右岸にあたり、沖郷条里制が施行されたと考えられている地域である。唐越遺跡は縄文時代、平安時代の遺跡で、平成 25、26 年に今次対象地南側 (文化会館用地) で本調査が実施され、官衙的な性格を有する平安時代の遺構が検出されている。

解体工事では、基礎撤去の掘削は概ね盛土の範囲内で収まっており、遺物は確認されなかった。試掘調査では、遺物は、T T 2 の第 3 層、T T 3 の第 3、4、6、7 層から土師器片が出土した。遺構は、T T 2 で性格不明の落ち込み 1 箇所、T T 3 で竪穴住居跡 1 箇所、ピット 3 個を確認した。平安時代の遺構と考えられる。

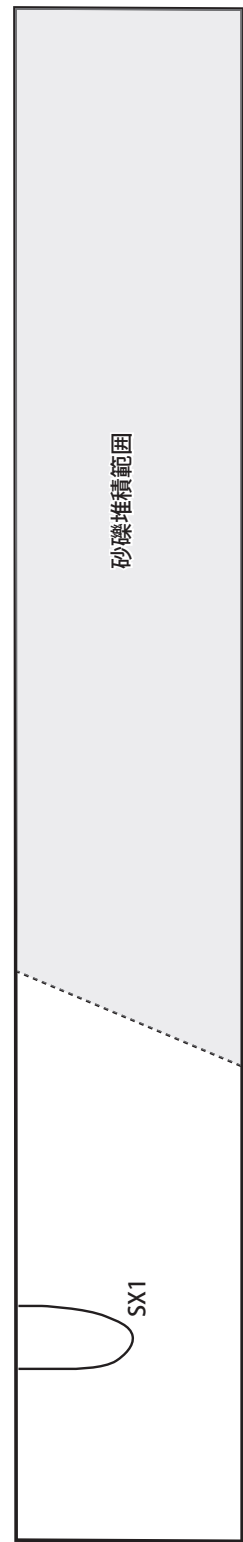
T T 1、T T 4 及び T T 2 西半では、盛土下は、砂礫層・礫層となる。北東から南西に流れる河川跡と思われる。



第 79 図 唐越遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第 80 図 唐越遺跡トレンチ配置図 S= 1/1000

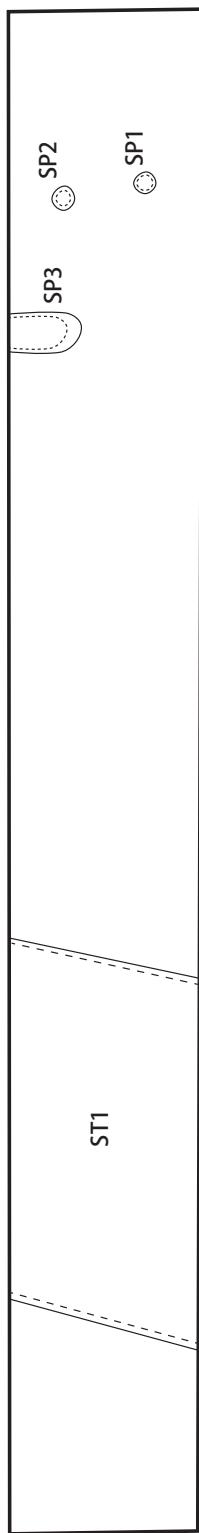
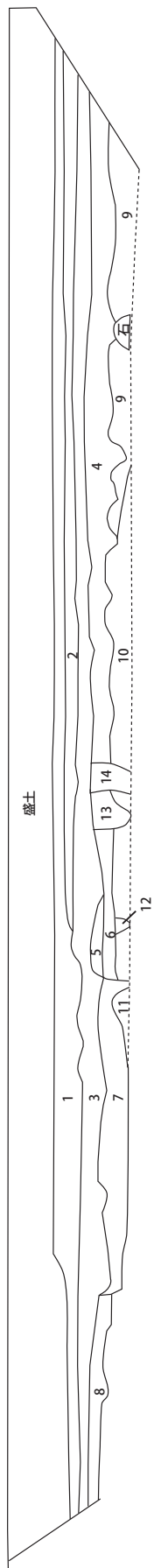


第81図 唐越遺跡TT2平面図 S=1/80

0 2m

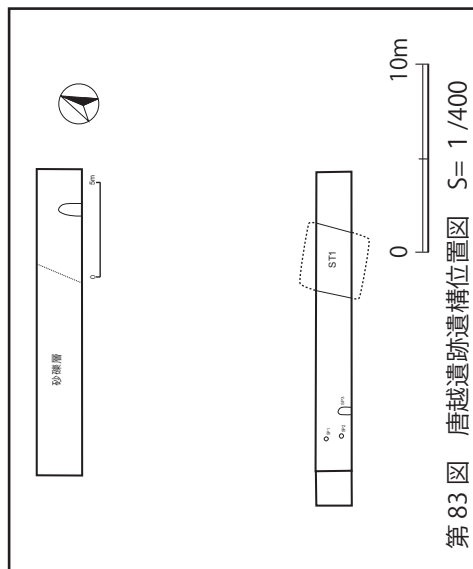
H=227.54m

東 ————— 西

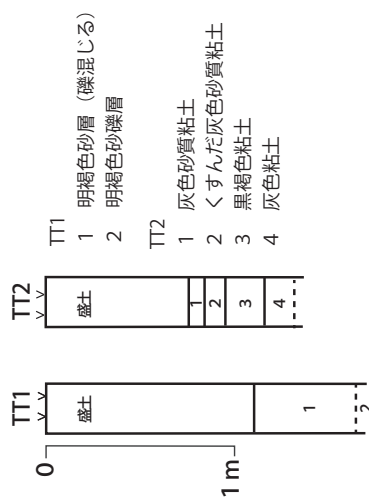


- TT3
- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (軟)
 - 2 10YR4/1 褐灰色砂質粘土
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 (軟)
 - 4 10YR3/1 黒褐色粘土
 - 5 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 (粗砂)
 - 6 10YR3/1 黒褐色粘土
 - 7 10YR3/1 黒褐色粘土 (締まる。2.5Y4/2 暗灰黄色粘土混)
 - 8 10YR4/1 褐灰色粘土
 - 9 10YR3/1 黒色粘土
 - 10 10YR2/2 黒褐色粘土
 - 11 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
 - 12 10YR2/1 黒色粘土
 - 13 10YR4/2 灰黄褐色粘土
 - 14 10YR2/1 黒色粘土

第82図 唐越遺跡TT3平面図・断面図 S=1/80



第83図 唐越遺跡遺構位置図 S=1/400



第84図 唐越遺跡柱状図 S=1/40

18 ^{ままのうえ} 間々上遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 8 月 30 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字間々上一 130-1
調査対象地（工事）面積 324.23㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の間々上遺跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 324.23㎡について、幅 1.5 m×長 5 m の試掘溝 2 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

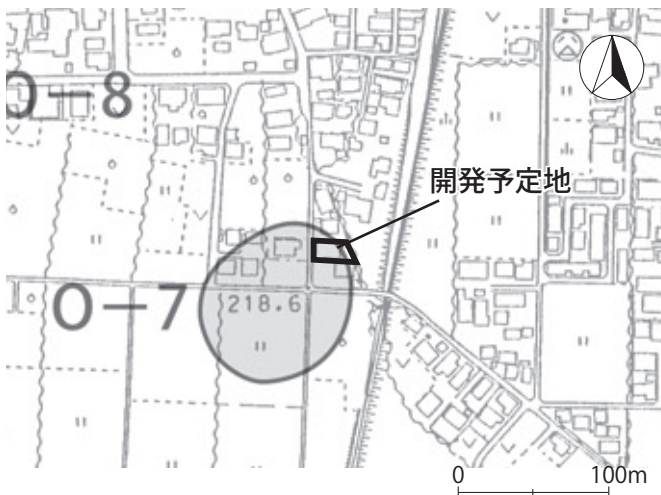
(5) 結果

遺構は、確認されなかった。遺物は、土師器片を検出した。

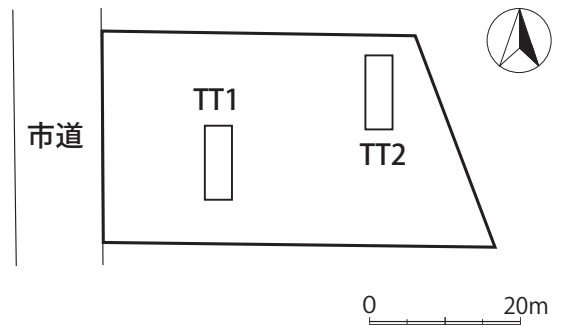
(6) 考察

対象地は、間々上遺跡の範囲にかかる。間々上遺跡は、奈良時代の遺跡である。遺跡は旧吉野川から北北東約 730 m 付近で枝分かれした派流右岸の微高地に立地する。対象地は、微高地の東端にあたり旧河道の範囲に相当するとみられる。

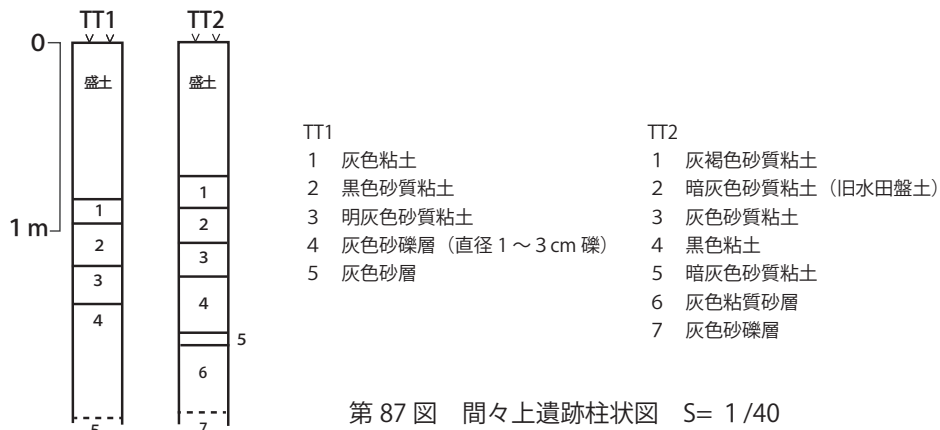
遺物は、TT 2 の表土層から、土師器片が数点出土した。また、遺物とは言えないが、粘板岩片が 1 点出土した。同じ沖郷地区の萩生田遺跡からは粘板岩製の石包丁が出土しているため、注意を要する石材である。同様の粘板岩片は赤湯地区の長岡山遺跡でも表採されている。遺構は確認されなかった。下層では砂礫層が見られ、黒色層下部からは湧水が多い状況であった。河川跡と考えられる。



第 85 図 間々上遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第 86 図 間々上遺跡トレンチ配置図 S= 1/1000



第 87 図 間々上遺跡柱状図 S= 1/40

19 沢田遺跡（2）

- (1) 調査日 平成 29 年 9 月 4 日～ 29 日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字六角、字阿弥陀前
調査対象地（工事）面積 4,000㎡
- (3) 調査原因 公共整備（94 条）
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の沢田遺跡の範囲内である。公共整備の計画が生じたことから遺跡状況を把握するための試掘調査を行うこととした。調査対象範囲 4,000㎡のうち補装範囲以外の地点に、幅 2m × 長 10m の試掘溝 6 箇所、幅 2m × 長 5m の試掘穴 4 箇所、幅 5m × 長 5m の試掘溝 1 箇所、幅 5m × 長 10m の試掘溝 2 箇所の計 13 箇所を設定し、このうち T T 9 を T T 10 に統合し、計 12 箇所の試掘を実施した。T T 8,10,11 は深堀を行った。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構は、奈良～平安時代とみられる竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 1 棟、水田遺構、道路跡、溝跡、柱穴等を検出した。

(6) 考察

沢田遺跡は、弥生時代～中世にわたる複合遺跡である。調査地は、旧吉野川左岸の川べりにあたる。洪水堆積が繰り返された土地と見られ、土層からは、奈良時代頃には微高地になっていたが、それ以前は後背湿地であったとみられる。

調査地は、平成 3 年頃はホップ畑として利用されており、平成 7 年頃に区画整理事業に伴う畑の移動で作土が 20～30cm 削平され、最上層の 9～10 世紀代の遺物包含層が地表面に露出した状態で数年放置された後に盛土された経緯がある。概ね現地地表下 1.4m 付近に当該遺構面があると推定されていたが、その後の工事の影響か、実際の盛土は地表下約 1.6 m～1.8m に達し、当該遺物包含層及び遺構面は殆ど残存していなかった。引き続き下層の文化層の検出を行い、遺構から奈良～平安時代の 4 時期の文化層を確認したが、攪乱が多く、遺物から各文化層の時期を明確にすることは難しい状況であった。

遺物は、攪乱層及びその直下、T T 1、T T 2、T T 3 第 4 層、T T 5、T T 8 第 2 層、3 層、T T 10 第 1 層、2 層、T T 10 の溝跡（SD1）、SP2、SP10、T T 11 第 3 層、竪穴住居跡（ST1）、T T 13 等から出土した（図版第 7 図～第 14 図）。奈良～平安時代の須恵器片、土師器片と中世陶器片である。攪乱層からは古墳時代の土師器片も出土している。また、T T 8 西北角の近代の攪乱穴からは馬の骨（脚部指骨）が検出された。

遺構は、第 1～第 4 文化層で検出された。第 1 文化層は、当初予定していた 9～10 世紀代の残存と見られる。標高は 221.65～221.9m、T T 10 において大溝跡（底面のみ残存、SD1）が検出された。SD2 も同層である。第 2 文化層は、標高 221.58～221.74 m で、T T 10 で並行する溝跡（SD3～6）とピット群が検出された。SD4 と SD6 の溝の芯々間には概ね 1.8m で道路跡の可能性がある。第 3 文化層は、標高 221.32～221.48m で T T 10 で掘立柱建物跡と見られる柱穴とピット群、T T 11 では柱穴 1 箇所を検出した。T T 8 では若干の遺物が出土したが遺構は確認されなかった。第 4 文化層は、標高 220.9m 付近で、T T 8 で柵列、性格不明遺構（SX1）を検出した。SX1 は構面検出のみにとどめたが、深堀を実施した TP2 の断面観察により竪穴住居跡の貼床面である可能性がある。

その場合、SP28～33はこの竪穴住居跡に伴うものである可能性がある。T T 11では竪穴住居跡(ST1)が検出された。さらにT T 11では畦畔跡(第7層)及び足跡とみられる痕跡が確認された。水田跡の可能性があり(第5文化層)、その盤土層とみられる第12層上面は波状を呈する。ST1はこの水田跡の可能性が考えられる層(第6、8、9層)の上に堆積した第4層から掘り込んでいる。また、T T 10では第3文化層下に厚い砂礫層の分布が見られた。T T 10の東西に配置したT T 5、T T 8では砂礫層は存在せず、T T 10南側のT T 4で砂礫層が見られることから、T T 10からT T 4方向に流れていた小河川が洪水等により埋没したと推測される。昭和59年度発掘調査において当該小河川跡と方位の一致する溝跡(SD37)が確認されていることから、この溝跡に洪水砂礫が流れ込んで溝跡が埋没した可能性も考えられる。T T 10ではこの砂礫層は幅2.5mで1m以上堆積している。

沢田遺跡でこれまで実施された本調査は3回である。古い順に、昭和59年度調査を第1次調査、平成元年度調査を第2次調査、平成27年度調査を第3次調査としておく。この第1～3次調査における遺構面の標高を、自然地形の勾配を考慮しながら、今次検出された各文化層と比較し、その年代について検討を試みる。

第1次調査における遺構面は、標高221.36mで8世紀前半、第2次調査の遺構面は、標高219.9mで7世紀末～8世紀初頭、第3次調査の遺構面は、標高221.48mで8世紀後半～9世紀前半となっている。

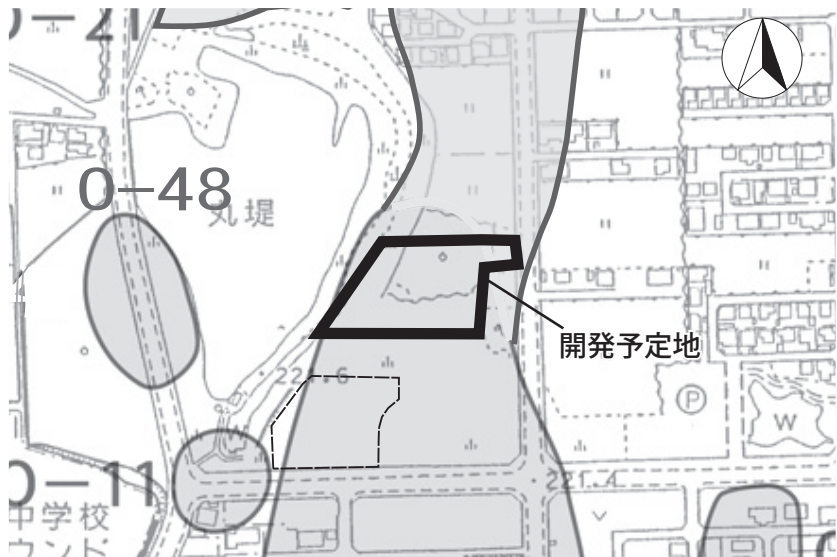
今次調査では、残存する第1文化層上面は標高221.65mである。この削平面が第3次調査の遺構面とほぼ一致することから、第1文化層は9世紀前半よりは新しいと考えられる。第1次調査の遺構面は、今次調査の第3文化層(標高221.48m)に近く、T T 10の河川跡が第1次調査におけるSD37と同一の溝跡の可能性あることからすれば、第3文化層は8世紀前半の可能性が考えられる。第4文化層は標高220.89mで、自然勾配、盛土を考慮すると、350m離れた第2次調査地点で第4文化層に相当する高さは計算上220mとなり、実際の第2次調査の遺構面の標高にほぼ一致する。このことから第4文化層は7世紀末～8世紀初頭の可能性が考えられ、第4文化層の遺構面を成している水田跡とみられる層(第5文化層)は、さらにそれよりも古いと考えられる。

第1文化層で確認された大溝跡(SD1)は、ほぼ東西方位に延びており、沖郷条里制に関連する区画溝のひとつとも考えられる。その場合において、第1文化層が9世紀前半以降とすれば、この溝が属する沖郷条里制がつくられた下限を示唆する可能性がある。

第2文化層で検出された古道跡とみられる溝跡は、平成29年5月の沢田遺跡試掘調査で検出された道路跡と同一である可能性がある。道路跡を直線的に北へ延長すると官衙関連遺跡である唐越遺跡に至る。

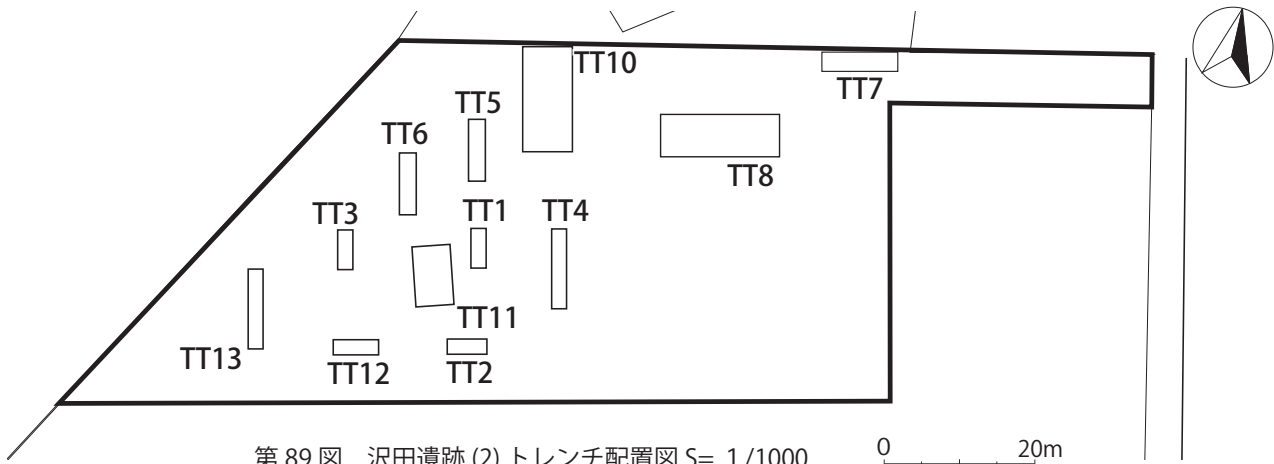
第3文化層では、T T 10から掘立柱建物跡、T T 11で柱穴が検出された。第1次調査でも掘立柱建物跡が検出されており、当該期ではこの付近は掘立柱建物跡が多い傾向がうかがえる。

第4文化層では、T T 11で竪穴住居跡、T T 8では竪穴住居跡と思われる性格不明遺構と柵列が検出された。T T 11の第5文化層で検出された水田跡とみられる層では、大人と子ども、小動物の足跡と思われる痕跡が第6層上面において検出された。第6層は洪水堆積土と思われる第4層に覆われ、足跡にもこの第4層の堆積土が入り込んでいる状況であった。



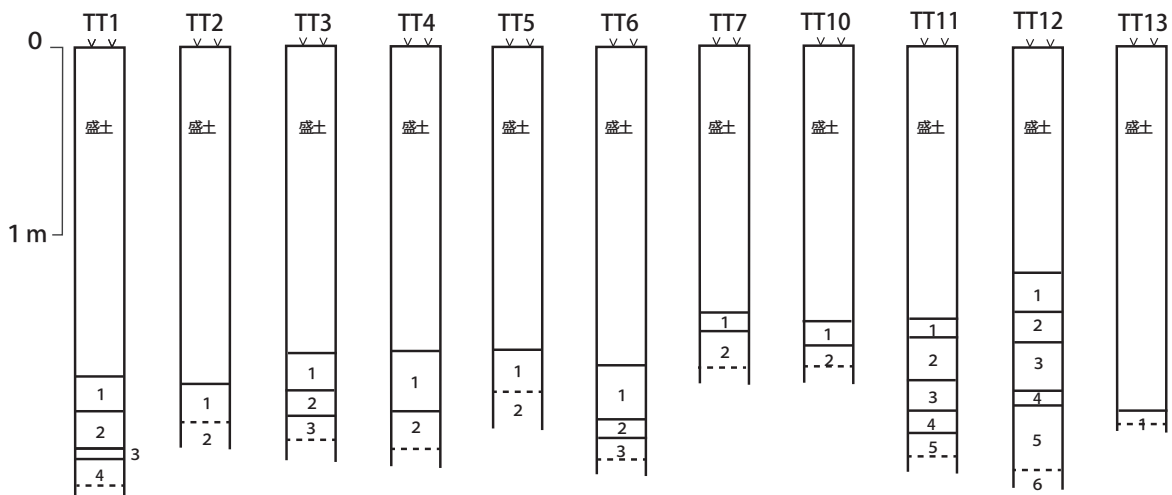
第 88 図 沢田遺跡 (2) 開発予定位置図 S=1/5000

0 100m

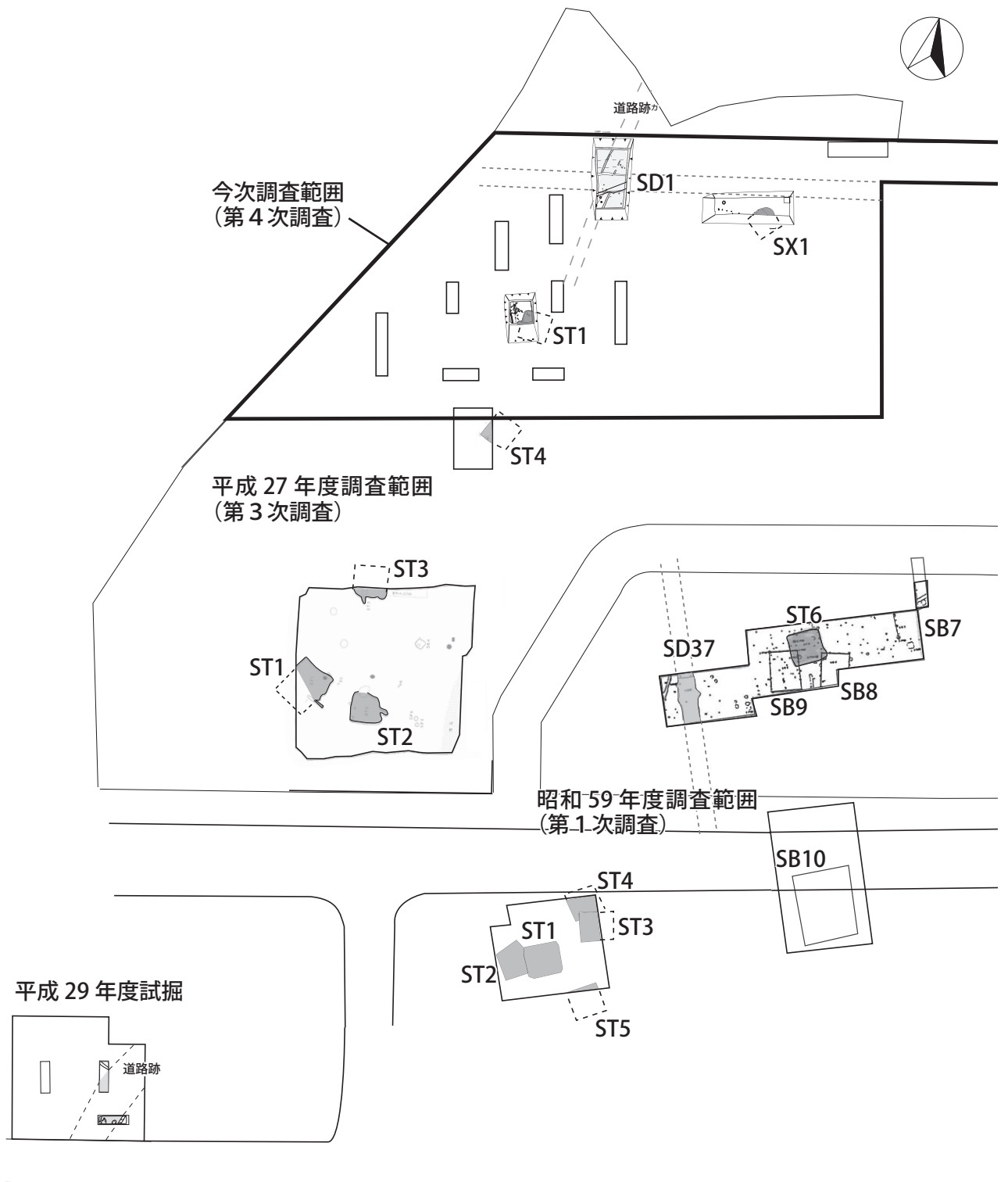


第 89 図 沢田遺跡 (2) トレンチ配置図 S= 1/1000

0 20m

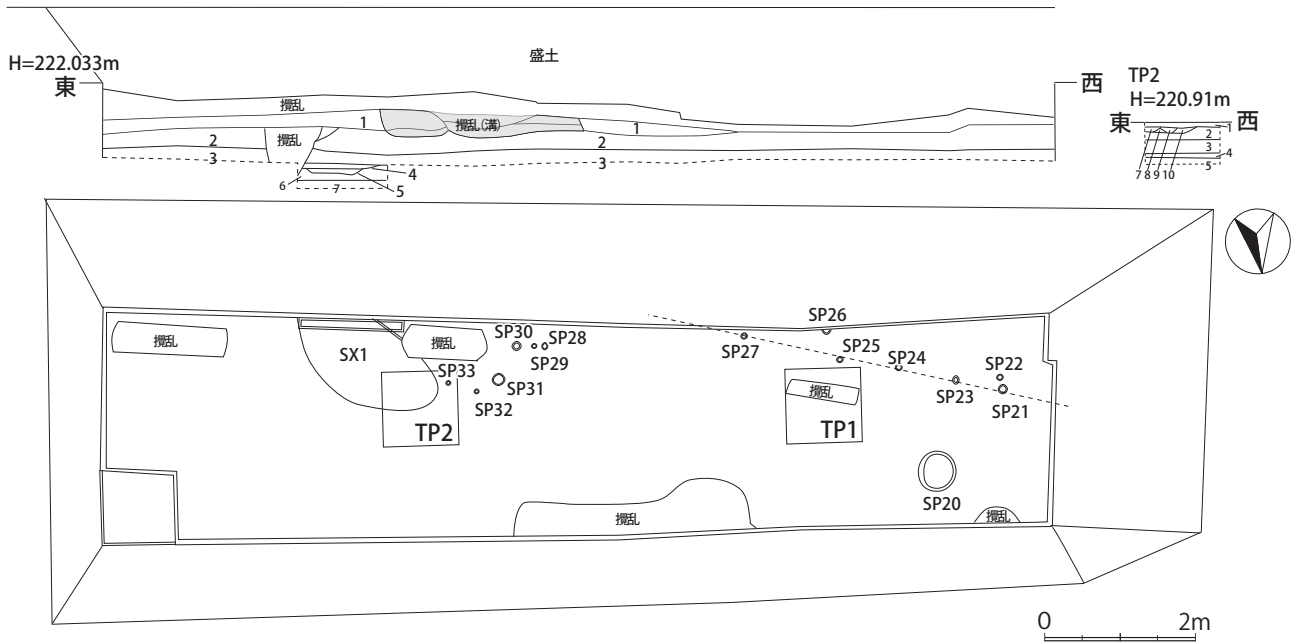


- | | | | | | | | | | | |
|--|--|--|---|---|--|---|---|--|--|---|
| <p>TT1</p> <p>1 灰色粘土</p> <p>2 灰褐色粘土</p> <p>3 暗褐色粘土</p> <p>4 褐色粘土</p> | <p>TT2</p> <p>1 明褐色粘土</p> <p>2 暗褐色粘土</p> | <p>TT3</p> <p>1 灰褐色粘土</p> <p>2 くすんだ灰色粘土</p> <p>3 明褐色粘土</p> | <p>TT4</p> <p>1 灰色砂質粘土</p> <p>2 灰色砂礫層</p> | <p>TT5</p> <p>1 灰褐色粘土</p> <p>2 くすんだ灰色粘土</p> | <p>TT6</p> <p>1 灰褐色粘土</p> <p>2 暗褐色粘土</p> <p>3 褐色砂質粘土</p> | <p>TT7</p> <p>1 暗褐色粘土</p> <p>2 くすんだ灰色粘土</p> | <p>TT10</p> <p>1 にぶい黄褐色砂質粘土</p> <p>2 灰オリーブ色砂質粘土</p> | <p>TT11</p> <p>1 黒褐色粘土</p> <p>2 暗褐色粘土</p> <p>3 オリーブ黒色粘土</p> <p>4 黒褐色粘土</p> <p>5 暗灰黄色粘土</p> | <p>TT12</p> <p>1 褐灰色砂質粘土</p> <p>2 褐色粘土</p> <p>3 灰褐色粘土</p> <p>4 褐色粘土</p> <p>5 褐灰色砂質粘土</p> <p>6 暗灰色砂礫層</p> | <p>TT13</p> <p>1 暗褐色粘土</p> <p>2 灰褐色粘土</p> <p>3 暗灰色砂礫層</p> |
|--|--|--|---|---|--|---|---|--|--|---|



第91図 沢田遺跡調査位置図 S= 1/1000

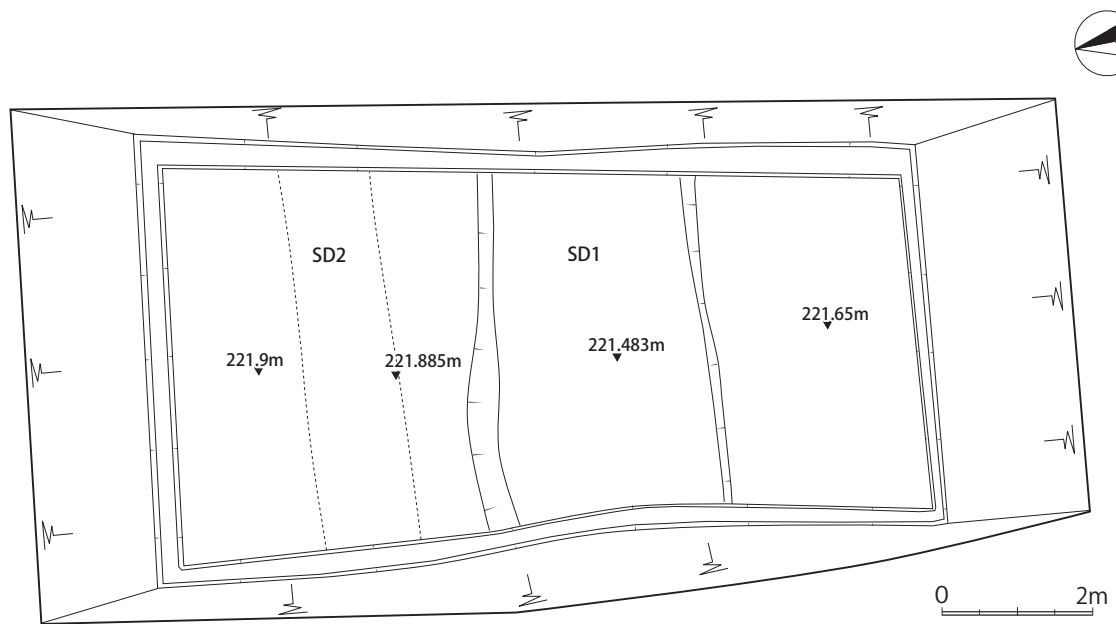
0 20m



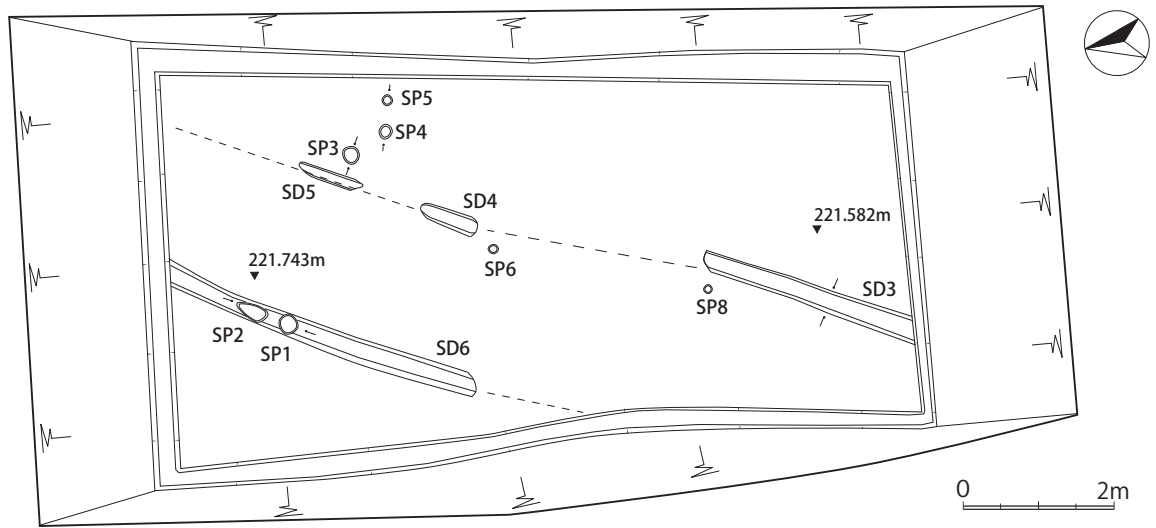
- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------|
| TT8 | TP2 | |
| 1 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (明褐色粘土含) | 1 10YR3/4 暗褐色粘土 | 8 10YR2/3 黒褐色粘土 |
| 2 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (明褐色粘土含) | 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質砂層 | 9 10YR3/2 黒褐色粘土 |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質粘土 (褐灰色粘土含) | 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質砂層 (砂多い) | 10 10YR4/1 褐灰色砂質粘土 |
| 4 2.5Y3/2 黒褐色粘土 | 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土 | |
| 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 | 5 2.5Y3/2 黒褐色粘土 | |
| 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質粘土 | 6 5Y4/1 灰色砂礫層 | |
| 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質砂層 | 7 10YR3/3 暗褐色粘土 | |

第 92 図 沢田遺跡 (2) T T 8 平面図・断面図 S= 1/100

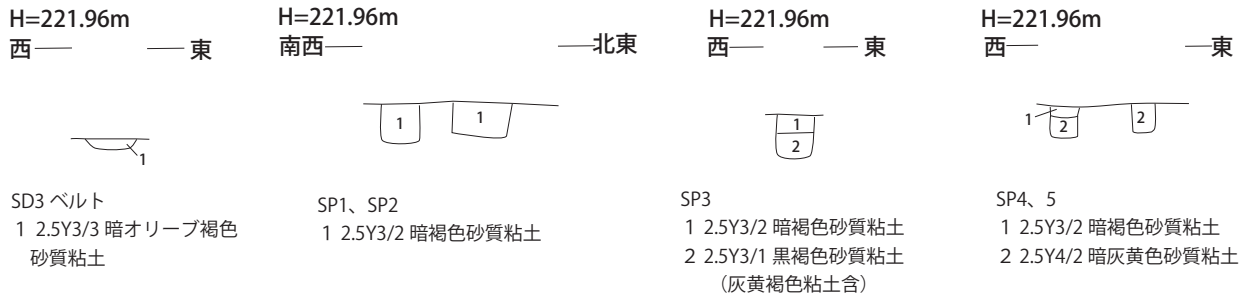
☒ M2
 X=216398.324
 Y=-60439.861



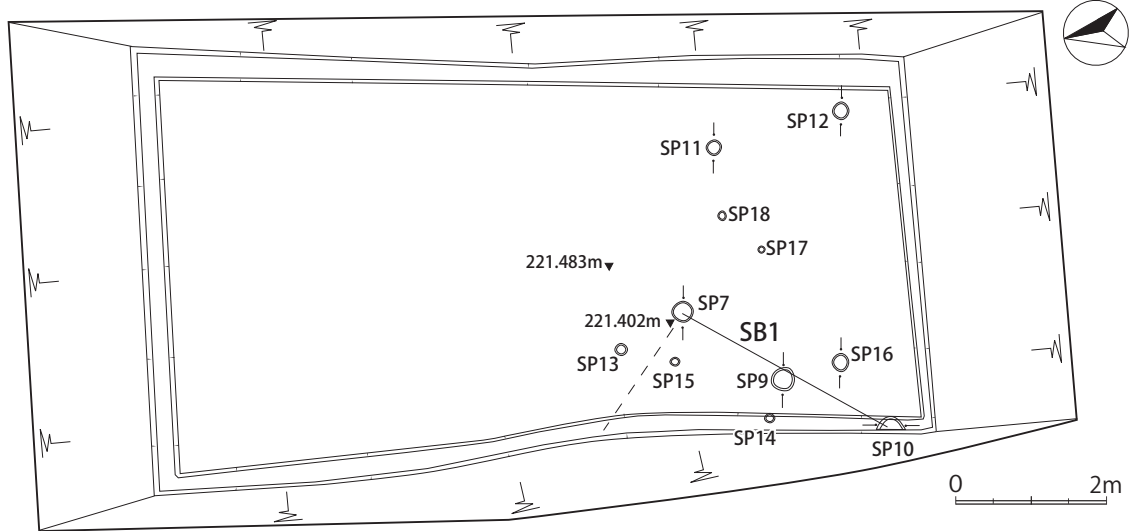
第 93 図 沢田遺跡 (2) T T 10 (第 1 文化層) 平面図 S= 1/100



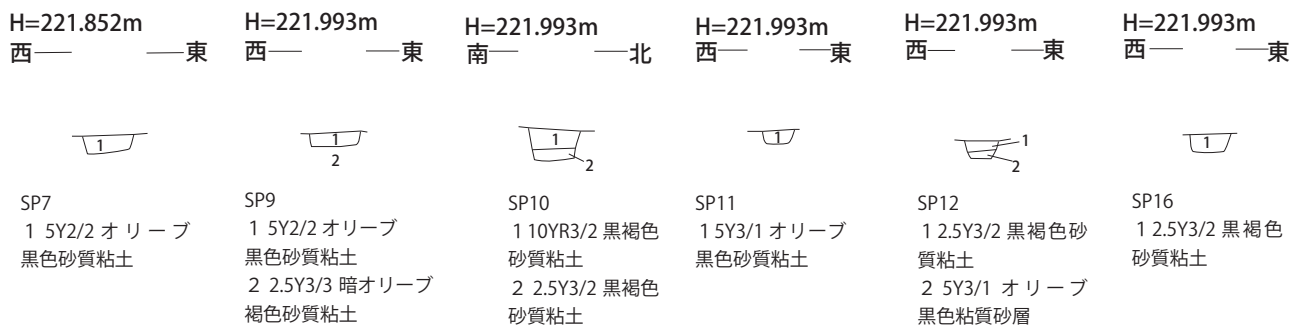
第94図 沢田遺跡(2) T T 1 0 (第2文化層) 平面図 S= 1/100



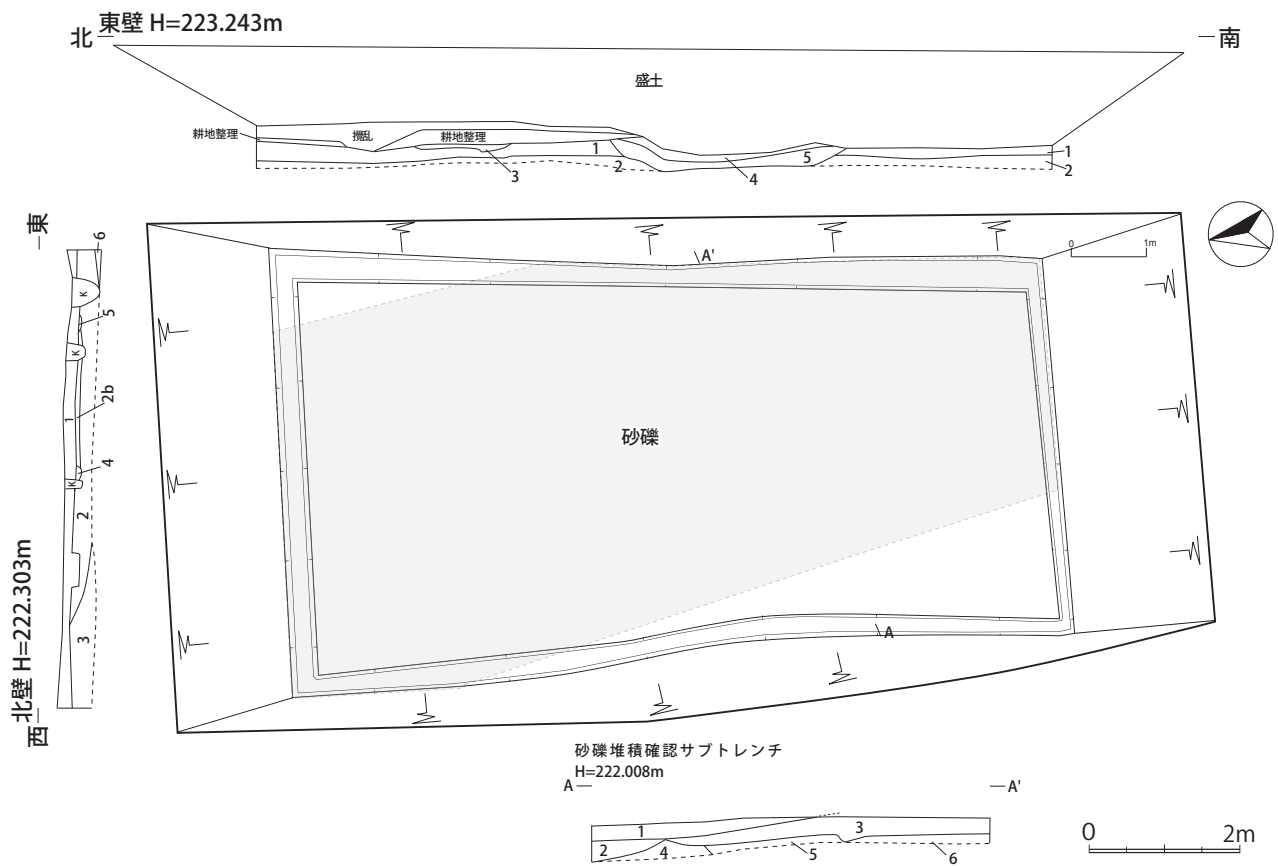
第95図 沢田遺跡(2) T T 1 0 (第2文化層) 遺構断面図 S= 1/40



第96図 沢田遺跡(2) T T 1 0 (第3文化層) 平面図 S= 1/100



第97図 沢田遺跡(2) T T 1 0 (第3文化層) 遺構断面図 S= 1/40



TT10 東壁

- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質粘土
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色砂質粘土
- 3 2.5Y3/2 黒褐色砂質粘土 (SD2)
- 4 5Y3/3 オリーブ黒色砂質粘土 (SD1)
- 5 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質粘土 (SD1)

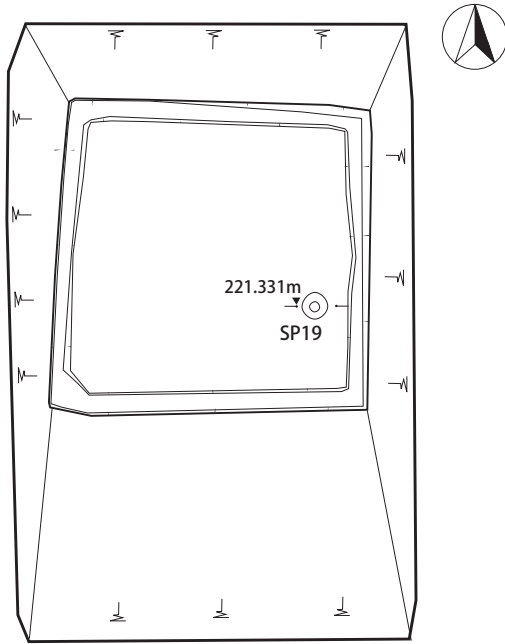
TT10 北壁

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質粘土
- 2 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質粘土
- 2b 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質粘土
(2.5Y3/3 粘土塊をブロック状に含む)
- 3 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質粘土
(直径 1.5cm の礫を含む)
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質粘土 (SD6)
- 5 2.5Y3/2 黒褐色砂質粘土 (SD5)
- 6 5Y4/2 灰オリーブ色砂質粘土

TT10 砂礫堆積確認サブトレンチ (北壁)

- 1 5Y2/2 オリーブ黒色砂質粘土 (黄褐色混じる)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色砂質粘土 (黄褐色混じる)
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫層
(粗砂、直径 1 ~ 2 cm 礫)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂層 (粗砂)
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色礫層 (直径 3cm 礫)
- 6 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂層 ~ 粘質砂層

第 98 図 沢田遺跡 (2) T T 1 0 砂礫範囲 平面図 S= 1 / 100



第99図 沢田遺跡(2) T T 1 1
(第3文化層) 平面図 S= 1/100

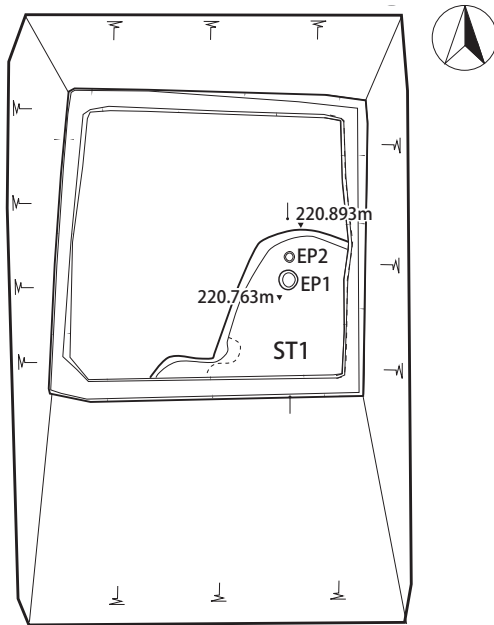
H=221.651m
西 — — 東



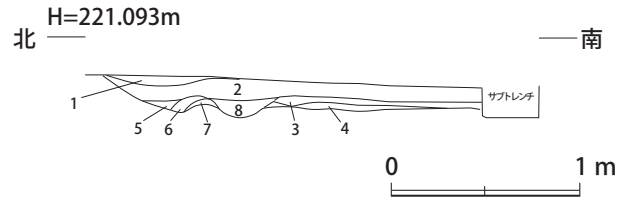
0 1 m

- SP19
1 5Y2/1 黒色粘土
2 5Y2/2 オリーブ黒色粘土

第100図 沢田遺跡(2) T T 1 1
SP19 断面図 S= 1/40

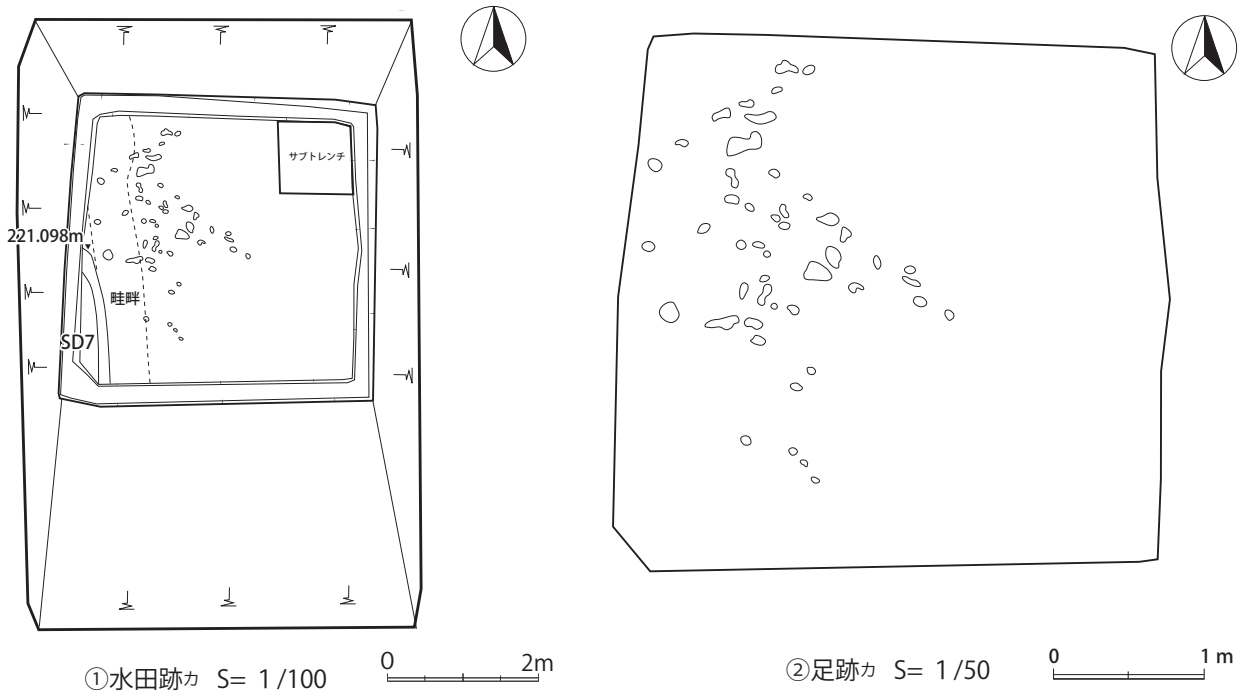


第101図 沢田遺跡(2) T T 1 1
(第4文化層) 平面図 S= 1/100



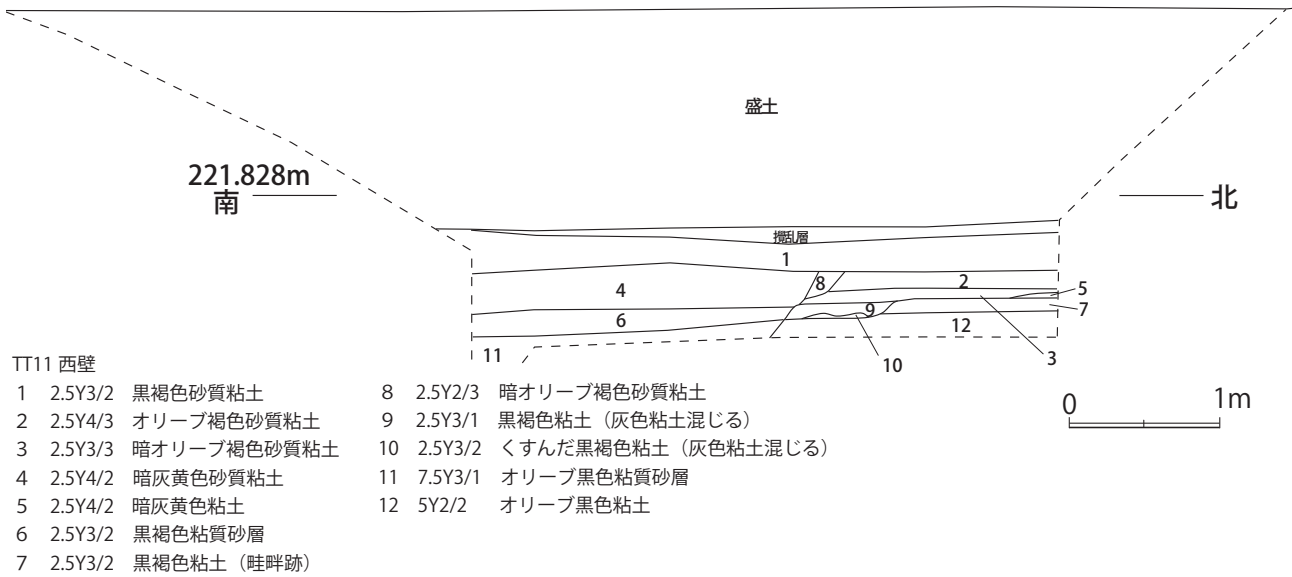
- ST1
1 2.5Y3/1 黒褐色粘土
2 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (炭多く混じる。焼土含む)
3 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 (橙色班混じる)
4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土
5 2.5Y4/1 黄灰色粘土
6 2.5Y3/2 黒褐色粘土
7 2.5Y4/1 黄灰色粘土
8 5Y2/2 オリーブ黒色粘土

第102図 沢田遺跡(2) T T 1 1
ST1 ベルト断面図 S= 1/40

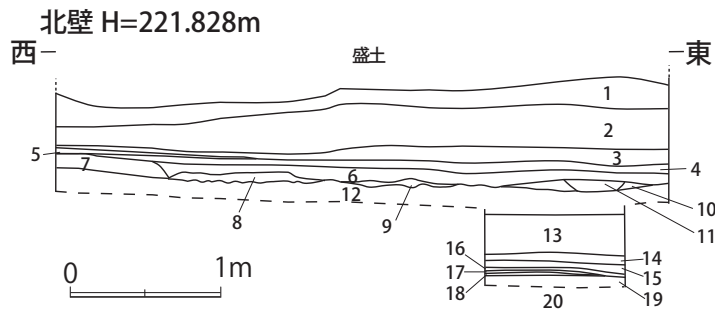


第103図 沢田遺跡(2) TT11 (水田跡カ) 平面図

西壁

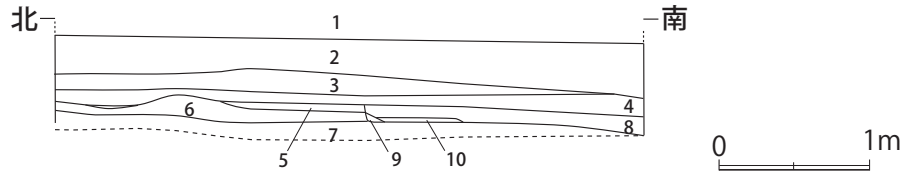


第104図 沢田遺跡(2) TT11 西壁断面図 S= 1/50



第105図 沢田遺跡(2) TT11 北壁断面図 S= 1/50

東壁 H=221.568m

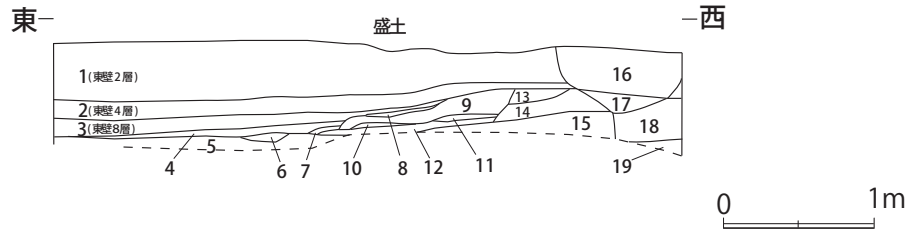


TT11 東壁

- | | | | | | |
|---|---------|-----------------|----|---------|------------------|
| 1 | 2.5Y3/2 | 黒褐色砂質粘土 | 8 | 2.5Y2/1 | 黒色粘土 |
| 2 | 2.5Y3/2 | やや明るい黒褐色砂質粘土 | 9 | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 (黒褐色粘土混じる) |
| 3 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ褐色砂質粘土 | 10 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 |
| 4 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ色粘土 | | | |
| 5 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 | | | |
| 6 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 (暗灰色粘土含む) | | | |
| 7 | 5Y3/2 | オリーブ黒色粘土 | | | |

第 106 図 沢田遺跡 (2) T T 1 1 東壁断面図 S= 1/50

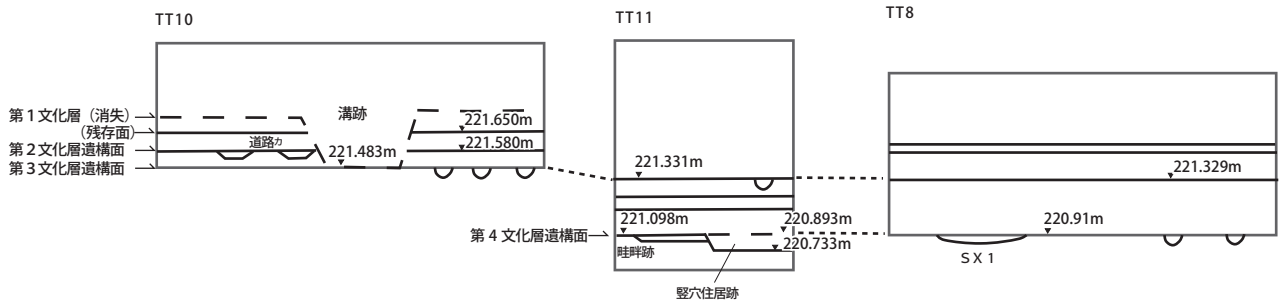
南壁 H=221.568m



TT11 南壁

- | | | | | | | | | |
|---|---------|-------------------------------|----|---------|-----------------|----|---------|--------------------|
| 1 | 2.5Y3/2 | やや明るい黒褐色粘土 | 8 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘土 | 15 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ色砂質粘土 |
| 2 | 2.5Y3/3 | 暗オリーブ色粘土 | 9 | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 | 16 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色砂質粘土 |
| 3 | 2.5Y2/1 | 黒色粘土 (炭混じり) | 10 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘土 | 17 | 5Y3/1 | オリーブ黒色砂質粘土 |
| 4 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘土 (2.5Y4/1 粘土混じる) | 11 | 2.5Y4/1 | 黒色粘土 (炭混じり) | 18 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質砂層 |
| 5 | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 | 12 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 (灰色粘土含む) | 19 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘質砂層 (18層より砂多い) |
| 6 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘土 (2.5Y4/1 粘土混じる) | 13 | 2.5Y3/2 | くすんだ黒褐色粘土 (畦畔跡) | | | |
| 7 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 Ucipisa et aspername et | 14 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 (畦畔跡) | | | |

第 107 図 沢田遺跡 (2) T T 1 1 南壁断面図 S= 1/50



第 108 図 沢田遺跡 (2) 各トレンチ標高比較図

20 東六角遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 9 月 6 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字一早
調査対象地（工事）面積 184㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の東六角遺跡の範囲内であることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 184㎡について、幅 1.5 × 長 3 m の試掘溝 1 箇所、幅 1.5 m × 長 4 m の試掘溝 1 箇所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

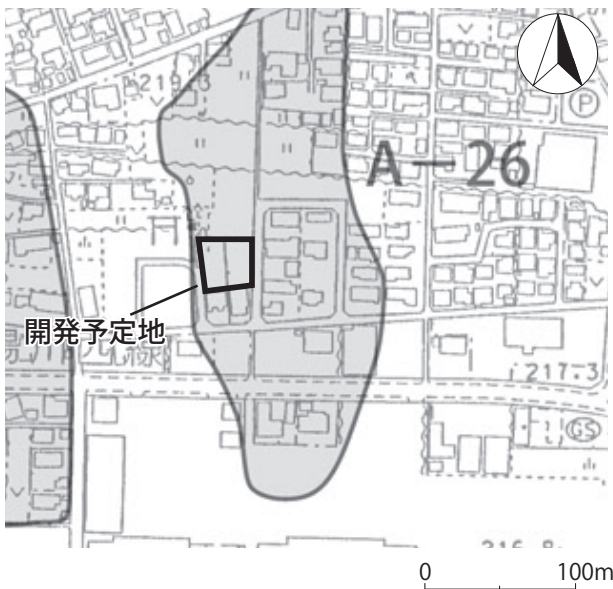
(5) 結果

遺構は、溝跡を 1 条検出した。遺物は、出土しなかった。

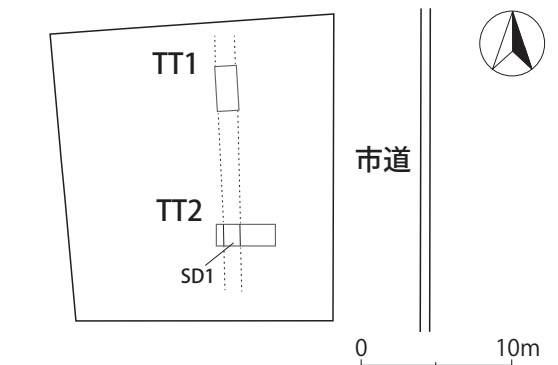
(6) 考察

東六角遺跡は、宮内扇状地の扇央付近の微高地に立地する。縄文中期、平安時代の遺跡である。付近一帯は沖郷条里制の範囲内と考えられており、西方約 300m では条里制に関連するとされる矢ノ目館跡の大溝跡（KY2、3）が確認されている。これまで実施された東六角遺跡の調査では、土壌や溝跡が検出されているが、遺物は少なく、不明な点が多い。

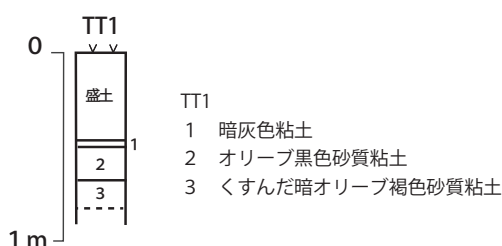
今次調査では、遺構は TT2 において溝跡（SD1）を 1 条検出した。遺物が検出されないことから溝跡の時代は不明である。TT1 の掘り下げは結果的に SD1 上面までとなった。



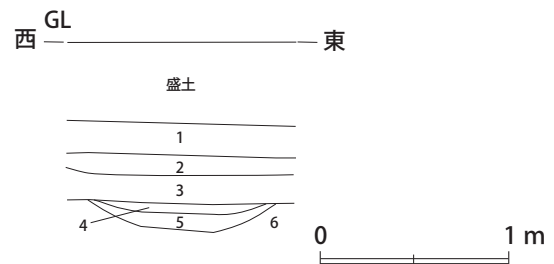
第 109 図 東六角遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第 110 図 東六角遺跡トレンチ配置図 S= 1/500



- TT1
- 1 暗灰色粘土
 - 2 オリーブ黒色砂質粘土
 - 3 くすんだ暗オリーブ褐色砂質粘土



- SD1
- 1 5Y2/1 黒色粘土（旧水田）
 - 2 5Y2/2 オリーブ黒色砂質粘土（旧水田盤土）
 - 3 2.5Y2/2 暗オリーブ褐色砂質粘土
 - 4 7.5YR4/3 褐色砂層
 - 5 5YR4/6 赤褐色砂層（粗砂）
 - 6 10YR5/6 黄褐色砂質粘土

21 芹ヶ窪遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 10 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市梨郷字芹ヶ窪 3682-2
調査対象地（工事）面積 1,981m²
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の芹ヶ窪遺跡の東辺にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 1,981m²について、幅 1 m×長 3 mの試掘溝 2 箇所を設定し試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

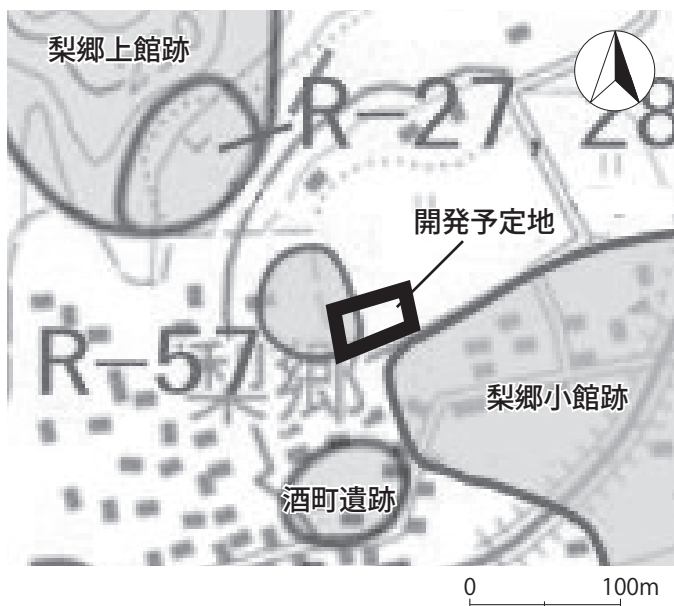
(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

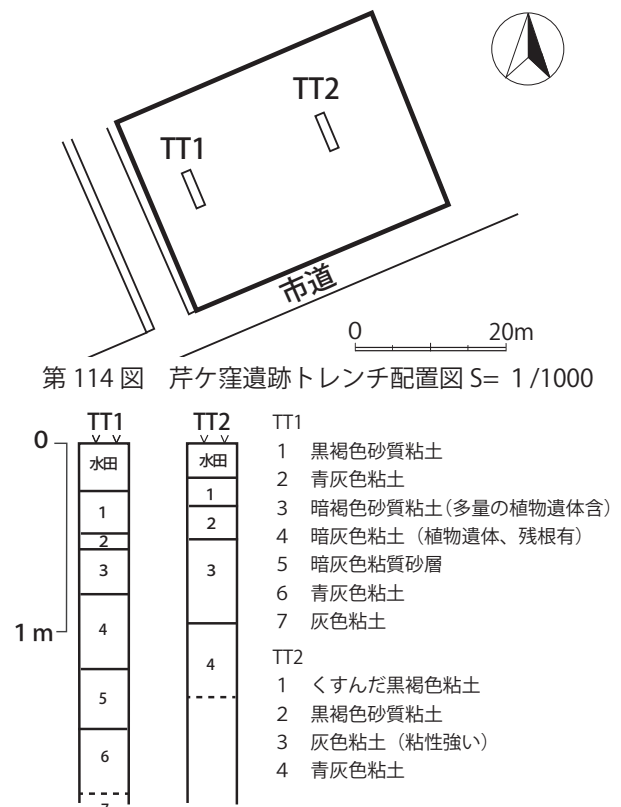
(6) 考察

芹ヶ窪遺跡は、縄文時代、平安時代の遺跡である。周辺には宮城遺跡、酒町遺跡、宮城墳墓、梨郷上館跡、梨郷小館跡が分布する。芹ヶ窪遺跡は、梨郷上館跡の南側、山麓に広がる低段丘状の微高地上に立地するが、今次調査地は微高地の東に広がる低地にあたる。

遺構・遺物は検出されなかった。土層観察によれば T T 2 から T T 1 方向（東から西）に向かって傾斜する自然堆積状況が見られた。T T 1 では地表面下 56cm～1 m（第 3 層、第 4 層）で植物遺体が面的に広がる敷葉工法を想起させる泥炭層状の土層があることが確認された。調査範囲が狭く悪天候の影響もあり、当該層が人為的なものかどうかは判断できなかった。明治の字限図からは今次対象地西端に埋没河川があると思われる。この埋没河川は梨郷上館跡の麓に位置することから、館堀の機能を有していた可能性もあり、その堤体工事に伴う可能性は残る。なお、今次調査地南側に接する市道の南側が梨郷小館の北堀跡となっており、堀跡の一段低い水田が東西方向に連なっている状況が見られた。



第 113 図 芹ヶ窪遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第 114 図 芹ヶ窪遺跡トレンチ配置図 S= 1/1000

第 115 図 芹ヶ窪遺跡柱状図 S= 1/40

22 郡山字長巻

- (1) 調査日 平成 29 年 10 月 24 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字長巻 1203-9
調査対象地（工事）面積 401㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

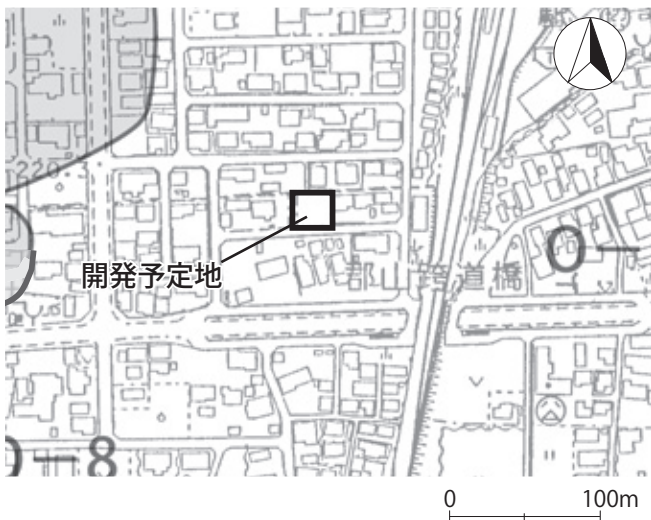
対象地は、分布調査未実施地にあたる。遺跡の有無を確認するため立合調査、試掘調査を行うこととした。盛土が厚く手掘りできないため、試掘は工事着工時に重機の協力を得て行い、立会は調査区東辺の擁壁工事時に実施した。調査対象範囲 401㎡について、幅 1.5m × 長 3m の試掘溝 1 箇所を試掘し、試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

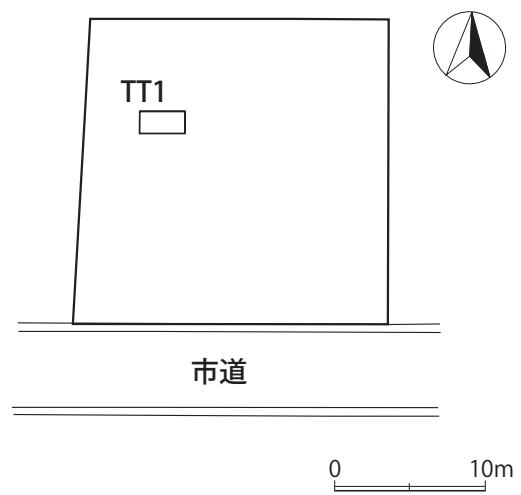
遺構は確認されず、遺物も検出されなかった。

(6) 考察

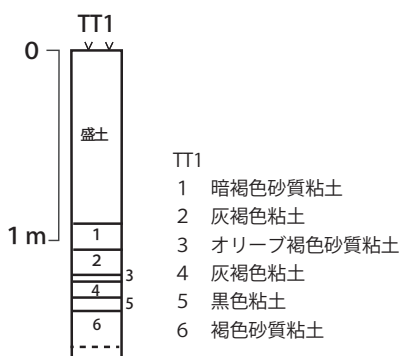
調査地は、沢田遺跡の南東に位置する。字限図からは、近世屋敷、堀跡とみられる低地や屋敷跡等の存在が推測される。また、堀跡や地名から、馬を飼育した牧が存在した可能性もあろう。試掘地点は屋敷内を流れる水路跡付近にあたる。遺物は確認されなかった。土層第 5 層の黒色層は字限図に描かれた旧水路に関連すると思われる。第 6 層は良く締り遺構面になる可能性があり、屋敷跡に伴う遺構等が近隣に存在する可能性は残る。立合調査では掘削は盛土内に収まり、遺構・遺物は検出されなかった。



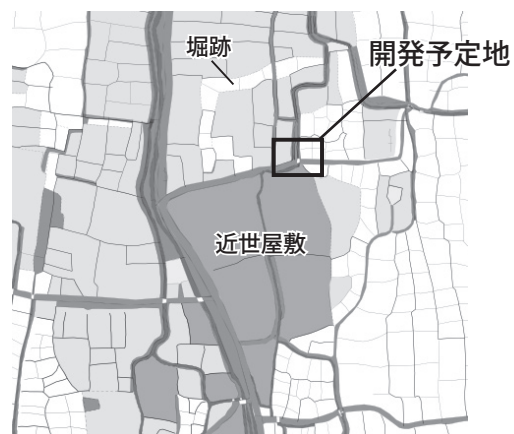
第 116 図 郡山字長巻開発予定位置図 S=1/5000



第 117 図 郡山字長巻トレンチ配置図 S= 1/500



第 118 図 郡山字長巻柱状図 S= 1/40



第 119 図 明治 8 年字限図 (字長巻付近)

23 北町遺跡

(1) 調査日 平成 29 年 11 月 8 日～ 15 日、12 月 11、14～15 日

(2) 調査場所 南陽市赤湯字新田前二 3340-4
調査対象地（工事）面積 115.7㎡

(3) 調査原因 公共事業（94 条）

(4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の北町遺跡の範囲内である。防火水槽工事の計画が生じたことから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。事前協議を重ねたが着工日の連絡が遅れるなど、工事調整では業者の旧慣や文化財保護に対する認識等の面で課題を残した。

調査対象範囲 115.7㎡について、幅 4m × 長 7m の試掘溝 1 箇所を設定し、8 日に表土剥離、9 日～10 日に試掘調査、13 日～15 日に工事立会いを実施した。試掘調査は、掘削予定深度が 3 m 以上に達することから、安全のため法面をつけて盛土及び無遺物層を剥ぎ、地表下 1 m 程で平坦にした後、南側にサブトレンチ 1 を設定し、東側に工事予定掘削深度までの土層と遺物の確認のためサブトレンチ 2 を設定した。先にサブトレンチ 2 を重機により掘り下げたが、重機の掘削限界により試掘調査の掘削深は約 3 m で工事予定の掘底 3.7m には達しなかった。

深さ約 1 m で遺物を検出、サブトレンチ 2 において第 6 層以下に遺物が確認されなかったことや土が極めて固く手掘りによる深掘りが困難と判断されたことから、遺物が確認された第 3 層、第 6 層を調査することとし、第 6 層以下は工事立会いで対応することとした。試掘調査にあたっては東北芸術工科大学の長井先生のご指導とご協力を得た。

工事立会いでは、地表下約 3.2 m で腐食が分解された泥炭層である黒色粘土の第 15 層（黒泥層）を検出、同層に遺物が含まれることを新たに確認した。第 15 層上面レベルでの工事面積は約 40㎡である。工事進捗上、現場での調査は限定的とならざるを得ず、掘削を開始した北側から 1 / 4 の範囲で立会いを行った。この範囲では第 15～17 層で遺構は確認されず、第 15 層は遺物包含層と考えられた。当該層の時代及び遺跡の性格を把握するために、現場で確認できなかった残りの範囲については、第 15～16 層の土を粘土ブロックとして重機のバケット単位で一括で掬い上げたものを、排土場に他の土と分けて置き、粘土ブロックから遺物確認を試みることにした。第 15 層は粘性が強く掬い上げても崩れにくい粘土であり、土質の異なる 14 層や 17 層と分離し易い状況であったため、粘土ブロックは、概ね掘り起こした状態そのままの形状で松沢地区（宮原）の排土場に移動された。バケット 1 回で約 1 ㎡の土をはぎ取り 20～25 個を排土場に置いたが、現場から排土場への指示が行き届かず積み置かれたため、実際に排土場で調査可能な粘土ブロックは十数個となった。12 月に東北芸術工科大学が中心となり粘土ブロックを用いた追加調査が試みられた。

(5) 結果

第 3 層から縄文前期の集石遺構と遺物、第 6 層から縄文早期末～前期の遺物を検出した。工事立会いでは、第 15 層で有溝砥石等の縄文草創期の遺物を確認した。排土場に分け置いた粘土ブロックからも遺物が回収された。遺構は現場では確認できなかったが、排土場に置いた粘土ブロックから第 16 層に掘り込まれたピットを検出した。移動された土塊であるため調査区内でのピットの位置や高さは不明となってしまったが、少なくとも対象地内に遺構が存在したことが確認された。

(6) 考察

北町遺跡は縄文時代の遺跡として古くから知られており、縄文草創期に遡る集落遺跡である。大谷地と呼ばれる広大な泥炭湿地帯の西辺に位置する。調査地の東約 490 m に位置する白竜湖付近では泥炭層を含む軟弱な堆積層は地表下約 93 m に達し、地表下約 19.5 m で約 22,000 年前とされる始良火山灰 (AT) が報告 (1986 年山形大学) されている。

今次調査地から南西に約 160 m 離れた平成 28 年度調査地点では、地表下約 3.4 m で同様に 28,000 年前の火山灰層 (始良丹沢火山 AT) が確認されている。火山灰層の直上層からも石器剥片が検出されており、旧石器時代の遺跡が存在する可能性もある。

今次調査地は、大沢山から南東に延びる枝尾根 (夷平山) 先端の山裾に広がる微高地で、一帯の地形は崖錐地形に分類されている。

遺物は、第 3 層、第 6 層、第 15 層、第 16 層から出土した。時期は縄文草創期～縄文前期である。第 3 層 (標高 212.71 ～ 212.95m) は、縄文前期とみられ、縄文土器 (竹管文等)、石器 (凹石、すり石、石匙片、磨製石斧片、剥片等) が出土した。第 6 層 (標高 212.41 ～ 212.47m) は、縄文早期末～前期とみられ、縄文土器 (繊維土器、貝殻条痕文等)、石器剥片等が出土した。

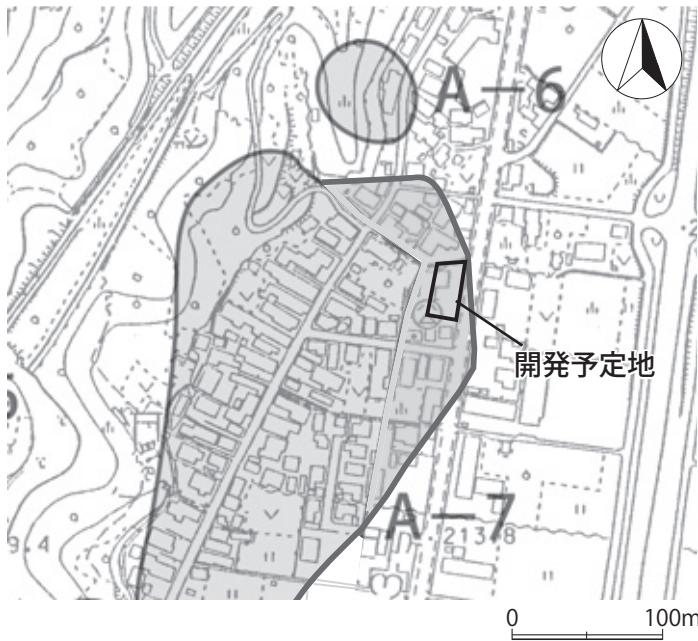
黒泥層の第 15 層 (標高 210.17 ～ 210.71m) は、縄文草創期とみられる。黒色粘土層の第 15a 層と、やや締まりが強く、凝灰岩粒を含んで灰色味を帯びる第 15b 層に分けることができる。共に植物遺体を含む。遺物は当初一括して第 15 層として取り上げている。第 15 層からは、縄文土器 (押圧文土器片、爪型文土器片等)、石器 (石鏃、削器、籠状石器、有溝砥石等) が出土している。第 15a 層からは、有溝砥石が出土している。15a 層から 15b 層の境界は遷移的である。また、第 15 層には非常に脆く、取り上げ出来ない土器片も含まれていた。

第 16 層 (標高 210.05 ～ 210.17m) は、青白色の凝灰岩礫 (0.5 ～ 1cm) を多量に含む層である。第 16 層 (第 15b 層との境界から 3 ～ 4 cm 下) から石器が 4 点出土した。

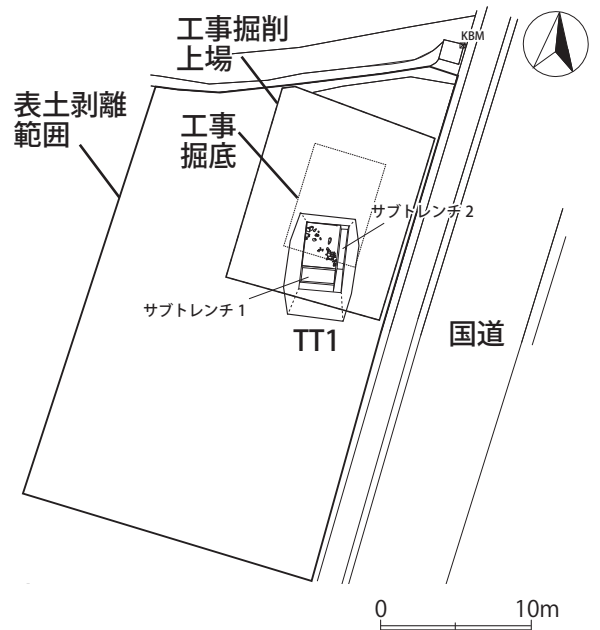
また、サブトレンチ 1 の東半側に第 3 層まで掘り込まれた近年の攪乱が認められ、攪乱土に縄文中期とみられる土器片が混じることから、従前の開発で失われた上位層に縄文中期の層があったか、上流から流れ込んだ可能性もある。

遺構は、地表下約 1 ～ 1.2 m の第 3 層において集石遺構 2 か所を確認した。縄文前期の遺構と考えられる。集石周辺に落ち込み等は確認できなかった。集石遺構の周囲では敲石、丸礫 (直径 8 ～ 10cm)、凹石が検出された。排土場に移動した粘土ブロックから第 16 層に掘り込まれたピットを確認した。粘土ブロックが置かれた順序から当該ピットは工事区 40㎡のうち南半側に位置していたと推測される。

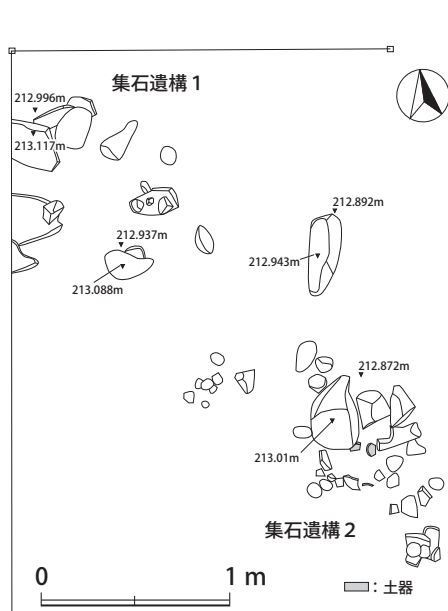
調査地から南に約 200 m の地点で 8 月に行われた下水道工事では、植物遺体が未分解の泥炭層が確認されている。今次調査で確認された第 15 層の黒泥層は、泥炭層が陸上で長く乾燥状態にあった時に形成されるとされる。縄文草創期頃の白竜湖畔の環境を知るうえで貴重なデータと言えよう。北町遺跡は平成 7 年から各種開発に対応し調査が進められているがいずれも断片的な報告となっている。今次出土遺物の整理・分析結果を含め、今後、正式な報告が必要と考える。



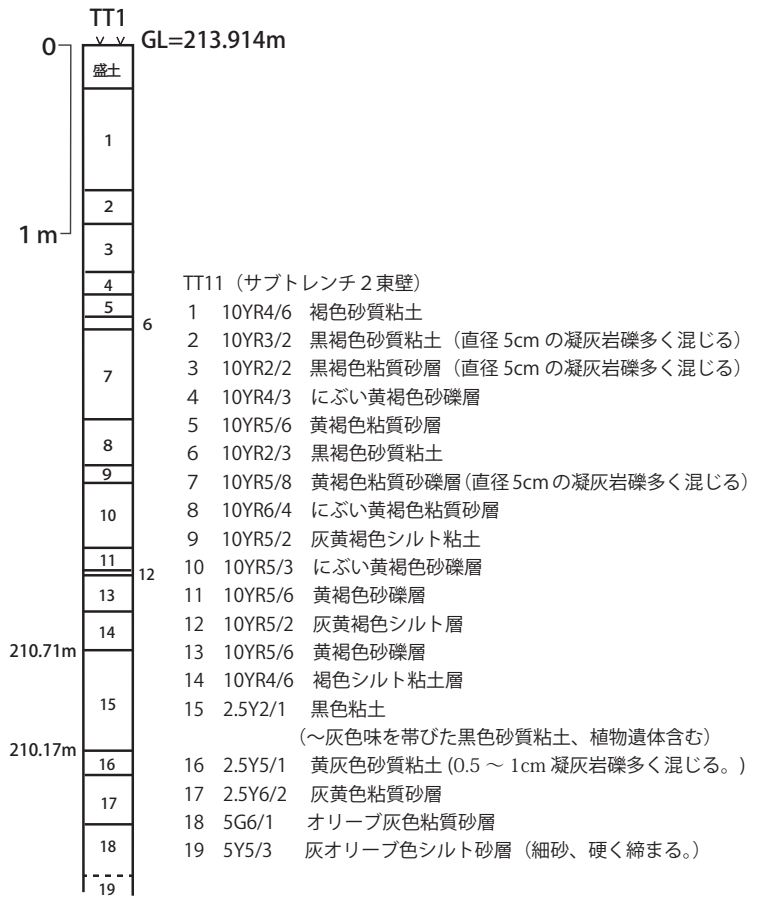
第 120 図 北町遺跡開発予定位置図 S=1/5000



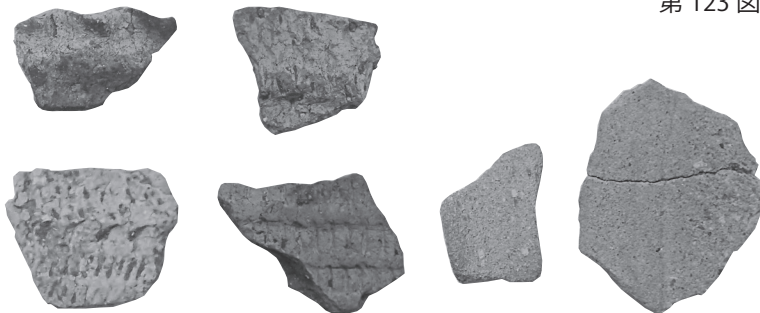
第 121 図 北町遺跡トレンチ配置図 S= 1/500



第 122 図 北町遺跡第 3 層遺構平面図
S= 1/40

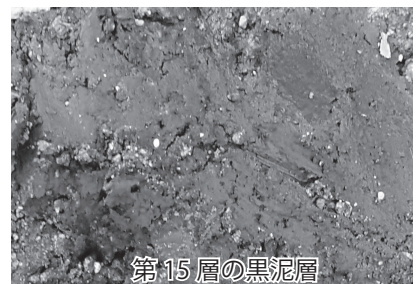


第 123 図 北町遺跡 T T 1 柱状図 S= 1/40



北町遺跡第 15 層出土土器

北町遺跡第 15 層出土土器石



第 15 層の黒泥層

IV 立会調査

1 川樋字五十どじゅうもんめ匆

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 10 日
- (2) 調査場所 南陽市川樋字五十匆 3400-1
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の館平館跡の隣地にあたる。工事は、工場の増築工事である。調査対象地の土工事に際し、対象地中央に幅 1.4 m×長 2m を先行して掘削し、遺構・遺物の有無の確認と土層の確認を行った後、引き続き掘削工事の立ち会いを行う。

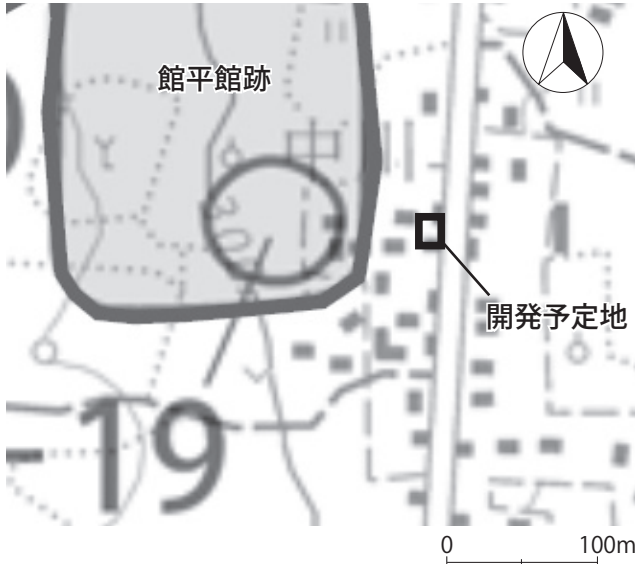
(5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

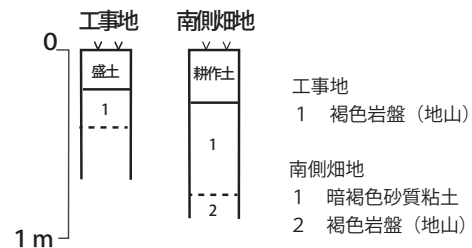
(6) 考察

対象地は、東向きの緩傾斜地である。表土層を重機で剥いだところ、盛土直下に地山の岩盤が露出したことから、かつて傾斜地を削って平坦地を造成した場所と考えられる。地山上面には亀甲状クラックが面的に確認される。

遺構・遺物は検出されなかった。前面道路東側の畑地では、地山が地表面下約 70cm で検出される。道路を挟んで東側は自然地形が残存していると思われる。



第 124 図 川樋字五十匆開発予定位置図 S=1/5000



第 125 図 川樋字五十匆柱状図 S= 1/40

2 ^{かもうだやま}蒲生田山古墳群

- (1) 調査日 平成 29 年 4 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市上野字山居沢山 1855-108 ~ 110、1855-22、23
- (3) 調査原因 民間開発 (93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の蒲生田山古墳群の南端に位置する。平成 28 年度に遺跡範囲の確認等のため一部試掘調査を実施済みである。宅地造成が行われることから工事立会を行う。

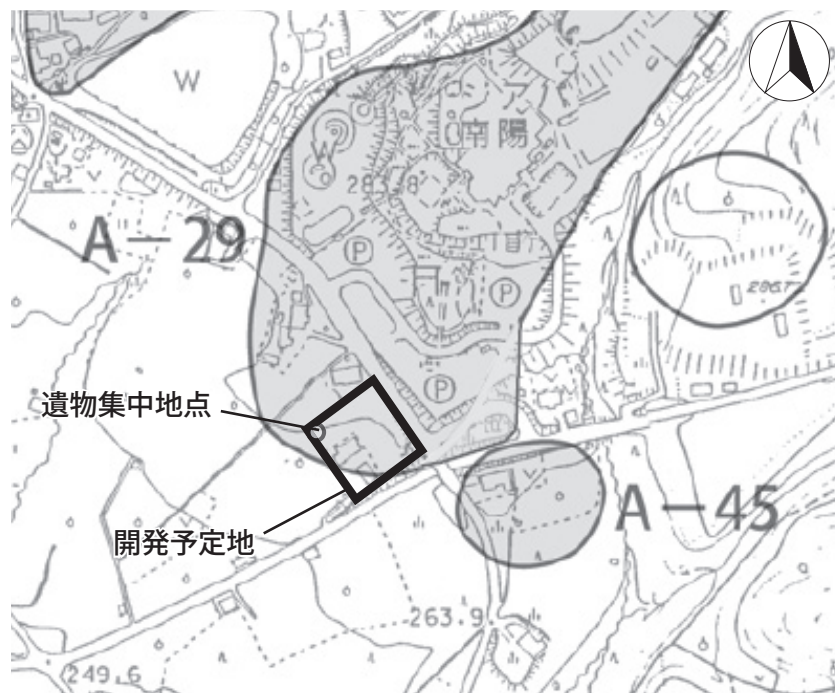
(5) 結果

工事は概ね盛土工事であるが、一部で表土剥離が行われた。遺構は確認できなかった。表土剥離範囲で須恵器片の散布が確認された。

(6) 考察

対象地は、通称「蒲生田山」の尾根の東側斜面にあたり、終末期古墳群があったとされる範囲の南端である。一部表土剥離が実施されたが、耕作土下はすぐに地山である。表土剥離範囲は対象地西側、尾根の山裾周辺に限られる。表土剥離範囲を調査したが遺構は確認されなかった。

工事範囲西端にあたる丘陵尾根（下の山ノ神社跡推定地）の東斜面裾部において遺物が集中的に散布している地点を確認した。散布範囲は概ね直径 6 ~ 8 m で、遺物は須恵器片と性格不明の鉄塊である。鉄塊は鉄刀の可能性もある。付近には比較的大きな葡萄園のアンカーとして使用された石材が 2 つ残存している。現存する蒲生田山 1 号墳と立地状況が類似することや遺物の散布状況からこの地点に終末期古墳が存在していた可能性があるが、その場合、墳丘は完全に削平されたと考えられ遺構は確認されなかった。葡萄園アンカーの石材は石室の石材であった可能性もあるが、原位置ではないと思われる。この他の地点では遺構・遺物は確認されなかった。



第 126 図 蒲生田山古墳群開発予定位置図 S=1/5000 0 100m

3 宮内字大壇

(1) 調査日 平成 29 年 4 月 28 日、8 月 25 日

(2) 調査場所 南陽市宮内字大壇五 3105-2 他

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。宅地造成の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

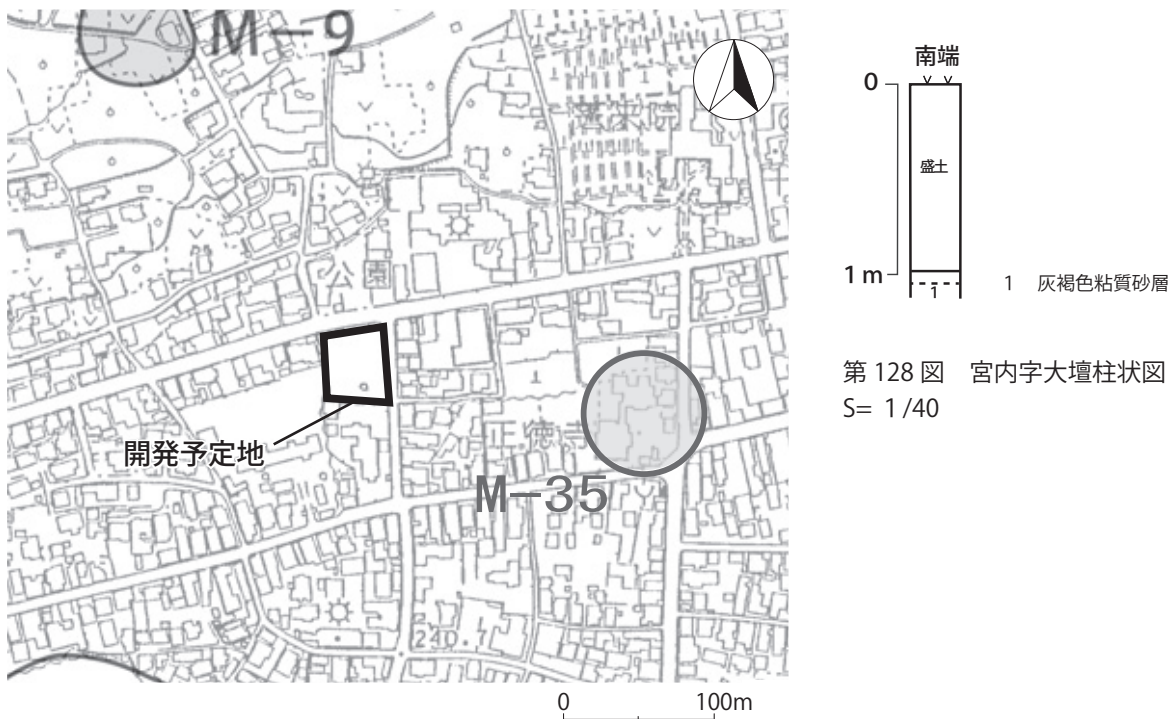
(5) 結果

工事は、主に盛土工事である。盛土前に踏査したが遺物は確認できなかった。対象地南端の擁壁工事に伴う掘削において落込み等を確認したが、遺物は検出されなかった。

(6) 考察

対象地は、織機川の東、宮沢川の西に位置する南向きの緩傾斜地である。字名から付近には近世墓地があった可能性がある。元々は安藤組製糸工場の敷地で昭和 8 年に工場の一部を宮内診療所とした場所にあたり、工事地内は従前の開発による盛土がなされている。踏査では近代以降の陶器片等の散在を確認した。

擁壁工事の掘削深は 1.2m である。既存の盛土は 1 m と厚く、盛土内には赤レンガや新しい磁器片、廃材等が多く混じる。盛土下に灰褐色砂質粘土層があり、旧水田面又はその盤土層と思われ、対象地西側に接する耕作放棄地の現況地表面とレベルがほぼ一致する。掘底面にも赤レンガや陶器片が散見される。一部に直径約 1.3 m の土壇状の落ち込みが見られたが遺物が伴わず性格不明である。おそらく製糸工場に關係する近代の遺構と思われる。



第 127 図 宮内字大壇開発予定位置図 S=1/5000

第 128 図 宮内字大壇柱状図
S= 1/40

4 二色根字^{おこしだ}起田

(1) 調査日 平成 29 年 6 月 15 日

(2) 調査場所 南陽市二色根字起田

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。宅地造成の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

工事は主に盛土工事である。遺構・遺物は検出されなかった。

(6) 考察

対象地は、吉野川右岸に広がる低地で、吉野川との間には自然堤防の発達が見られないことから元々は河川敷に相当する場所と思われる。自然堤防上に立地する諏訪前遺跡の北東 280m に位置する。盛土工事の際に踏査を行ったが遺物は確認されなかった。地形状況から遺跡は存在しない可能性が高い。



第 129 図 二色根字起田開発予定位置図 S=1/5000 0 100m

5 岩屋堂 2 遺跡

- (1) 調査日 平成 29 年 6 月 15 日
- (2) 調査場所 南陽市川樋字岩屋堂（市道平岩線）
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の岩屋堂 2 遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから、土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構は、溝跡を 3 条確認した。このうち 2 条は並行することから道路跡の可能性がある。遺物は第 1 層から土師器片、S D 1 覆土から縄文土器片を検出したが、流れ込みとみられる。岩屋堂 2 遺跡の範囲変更が必要である。

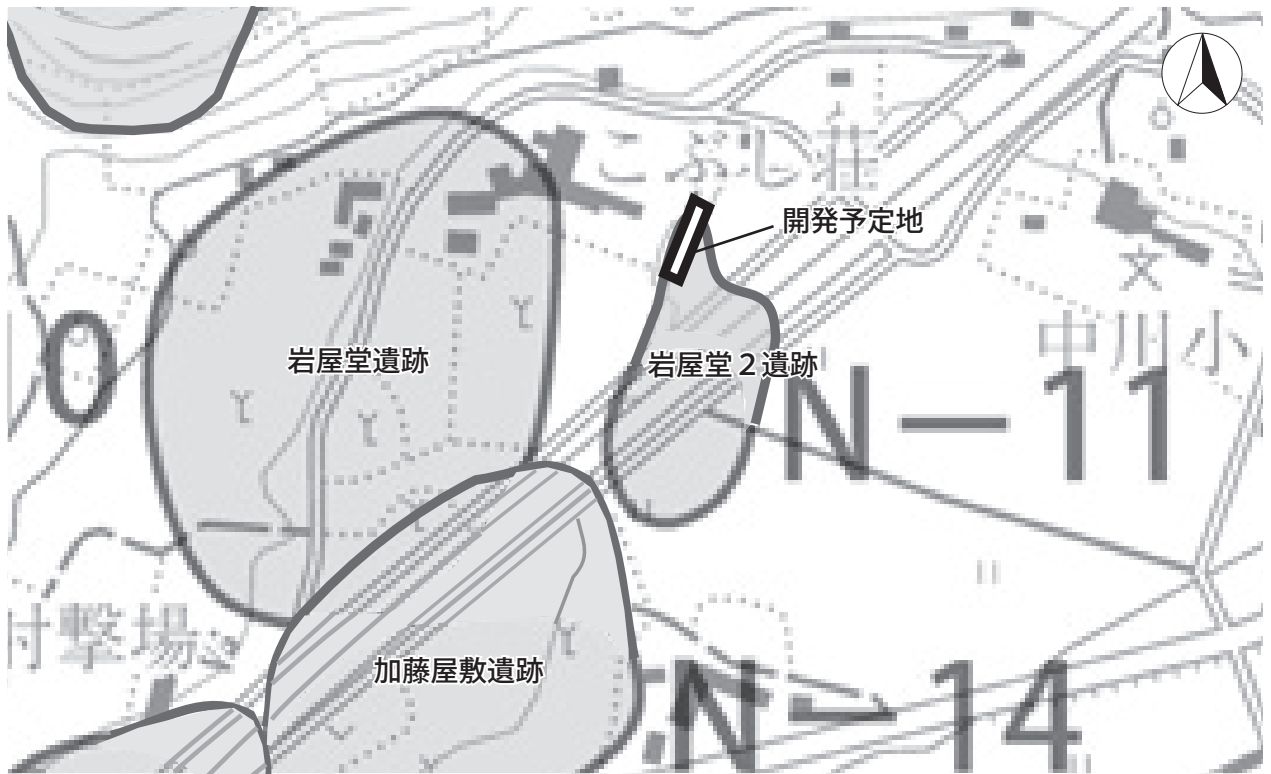
(6) 考察

対象地は、東向きの緩斜面にあたり、岩屋堂 2 遺跡から北へ約 60m に位置する。遺構は、掘底面で並行する溝跡が 2 条確認された（S D 1、S D 2）。溝跡は共に幅が約 60cm、溝間の内寸幅は約 3.6m で、溝と溝の間のみ黒褐色粘土層（第 9 層）が見られることから、道路跡の可能性が高い。また、西壁断面で第 3 層に掘り込まれた溝跡（S D 3）を確認した。遺物は、第 1 層から土師器片、S D 1 の覆土層から縄文土器片を検出した。S D 1 の覆土は粗砂層で、短期間に埋没したような状況であることから縄文土器は流れ込みと思われる。溝跡の年代は不明であるが、平成 28 年度調査で検出した S D 1 には古墳時代の土師器が流れ込んでいることから、古墳時代以降とも考えられ、近隣で実施された従前の試掘調査や加藤屋敷遺跡等の調査内容からすれば、平安時代の溝跡である可能性が考えられる。

工事立会の制約上、断面図作成は S D 1、S D 2 付近に限定され、その前後の土層状況は図化できなかったことから、以下に西壁土層観察時の野帳記録と所見を転記しておく。

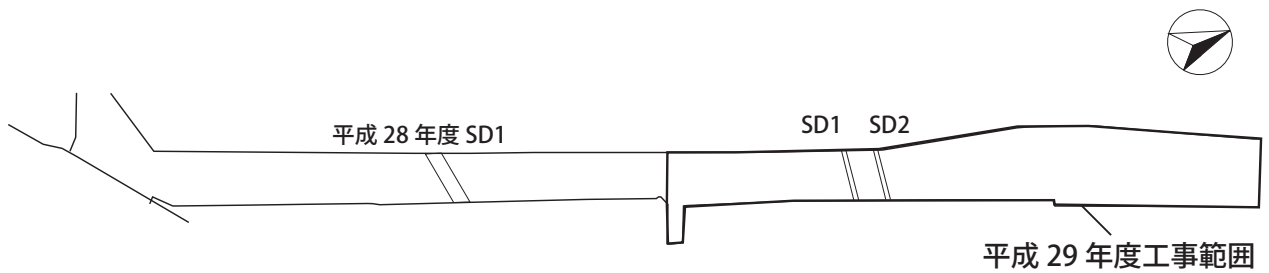
「対象地北側では粘土質の地山が北に向かうにつれて次第に高まる傾向がみられる。第 2 層は、概ね S D 1 から S D 2 が存在する範囲で一旦消失し、S D 2 の北で再び堆積が見られるようになる。地山は S D 2 の北側で 1 段高台となり 8 層、12 層が途切れる。S D 2 の北側では、第 2 層下に、地山に掘り込む厚さ 10cm 程の灰色砂質粘土層が数メートルの範囲で広がる。時代は不明であるが棚田状の水田跡の可能性も考えられる。」

「S D 1、S D 2 の古道跡は粗砂層（第 8 層）や砂層（第 3 層）が堆積するような環境で短期間に埋まったと見られる。その後、安定した表土層（第 2 層）が広範囲に形成されたが、溝の掘りなおし（第 7 層、S D 3）が行われ、8 層上面が再び道路として利用されたため、S D 3 から北で第 2 層が消失している範囲（幅約 4 m）が見られる状況が生じたとも考えられる。」



第 130 図 岩屋堂 2 遺跡開発予定位置図 S=1/5000

0 100m

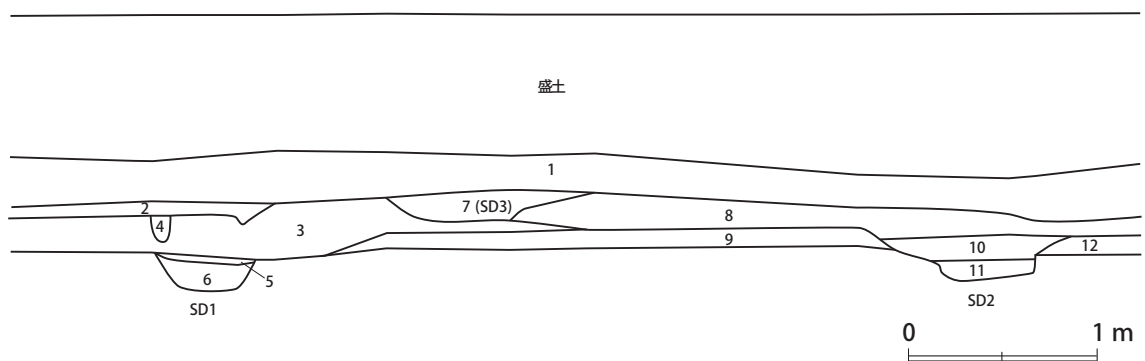


第 131 図 岩屋堂 2 遺跡平面図 S= 1/1000

0 20m

西壁 H= 道路高 +50cm
南

北



西壁

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色砂質粘土 | 7 暗褐色粘質砂層 (灰オリーブ砂が斑に入る) |
| 2 黒色粘質砂層 | 8 褐色砂層 (荒砂) |
| 3 灰オリーブ色砂 (砂粘) 層 | 9 黒褐色粘土 |
| 4 黒色粘質砂層 | 10 暗黄褐色砂層 |
| 5 褐灰色砂 | 11 暗灰色砂層 |
| 6 黒色粘土 (粘性強い) | 12 暗灰色粘土 |

第 132 図 岩屋堂 2 遺跡西壁断面図 S= 1/40

6 長岡字清水尻

- (1) 調査日 平成 29 年 6 月 27 日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字清水尻 6 7 2 - 2 他
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の長岡南森遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。建替工事であったためか遺跡隣地にも関わらず事前協議がなされておらず、職員が長岡南森遺跡踏査を行った際に工事に気づき、急遽立会いと指導を行った。

(5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。土層状況から低湿地と思われる。南森が古墳の場合、その周濠又は土取跡の可能性もある。

(6) 考察

対象地は、南森丘陵の東に位置する低湿地にあたる。工事が行われていることを確認した時には床掘が完了しており鉄筋を組んでいる状況であったため、調査は限定的となったが、基礎工事で掘削した土層断面の観察と土層の広がり等を確認した。

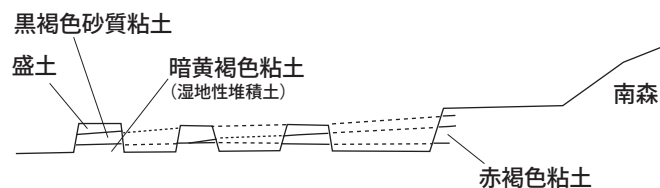
遺構・遺物は確認されなかった。積み置かれた排出前の残土を調べたが掘削土に遺物の混入は確認されなかった。

土層状況から丘陵から東南に広がる低湿地であったと思われる。今次掘削の最下層の粘土層は、暗黄褐色～暗青色系で湿地性の土壌と考えられる。その上層に丘陵側からの土砂の流れ込みが見られたが、鮮やかな赤褐色粘土層が広範囲で湿地性粘土層の上に流れ込んでいるのが特徴的である。この赤褐色の土は長岡山丘陵では地山上層に見られるもので、南森丘陵も同様と考えられる。本来表土下にある地山上層の赤土が多量に流れ込んでいることは、南森丘陵の地山が露出している状態が一定期間あったことをうかがわせる。

丘陵の地山がむき出しになった状況及び地山の土が低地に流れ込み続ける状況は自然とは考えられず、人為的要因があると思われる。その原因としては、古墳築造後の自然崩落、中世館造成等の土工事、沼地の埋め立て等が考えられる。



第 133 図 長岡字清水尻開発予定位置図
S=1/5000



第 134 図 長岡字清水尻工事断面模式図

7 北町遺跡隣地

- (1) 調査日 平成 29 年 8 月 22 日～ 10 月末日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字新田前 (国道歩道内)
- (3) 調査原因 下水道工事
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の北町遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから土工事の際に立会いを行い、北町遺跡の範囲を確認する。

(5) 結果

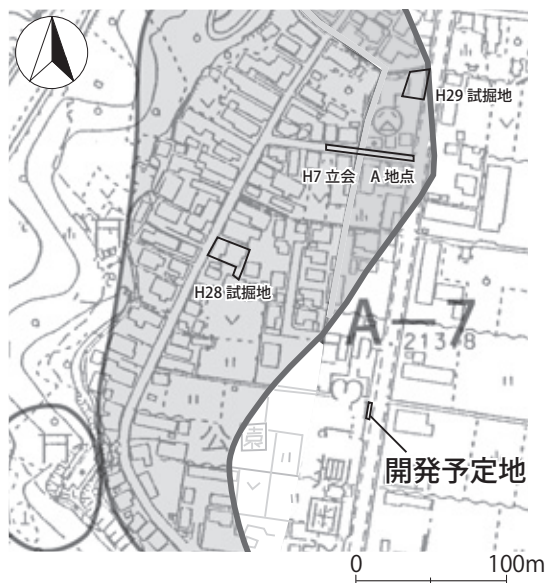
遺構は確認されなかった。遺物は泥炭層上面から敲石が 1 点出土した。地表下約 2.1m で泥炭層が確認された。

(6) 考察

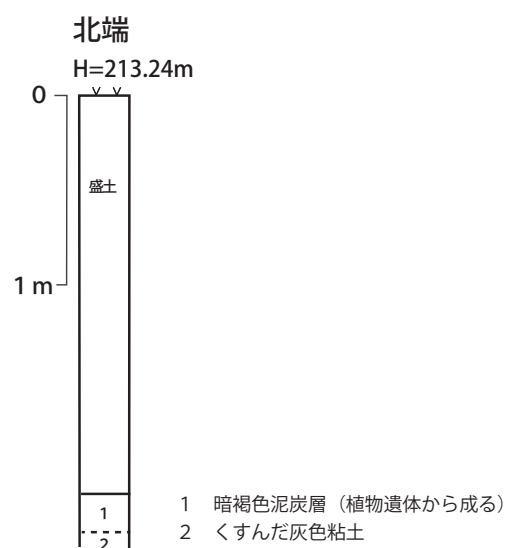
対象地は、米沢盆地東北部に広がる低湿地帯として知られる大谷地内に位置する。北町遺跡は白竜湖の湖岸、この大谷地の西縁に沿って立地しているとみられる。

深掘りの際に、土層観察と遺物・遺構の有無を確認した。遺構は確認されなかった。遺物は地表下約 2.1m の泥炭層上面から敲石が 1 点検出されたが、流れ込みの可能性もある。

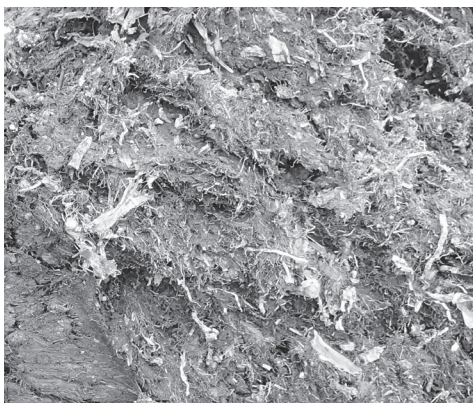
国道歩道部分のため盛土層が厚く、最大掘削深度は地表面から 2.3m である。地表下 2.1 m (標高 210.94 ~ 211.14m) で未分解の植物遺体からなる泥炭層 (第 1 層) を確認した。その下層にはくすんだ灰色粘土層 (第 2 層) が堆積する。掘削現場での確認不足を補うため排土場においても遺物の確認を定期的に実施したが、特に遺物は確認されなかった。



第 135 図 北町遺跡隣地開発予定位置図 S=1/5000



第 136 図 北町遺跡隣地柱状図 S= 1/40



第 1 層の泥炭層

8 ^{ないじょう}内城館跡

- (1) 調査日 平成29年9月6日～10月末日
- (2) 調査場所 南陽市鍋田字内城、俎柳字中丸
- (3) 調査原因 下水道工事(94条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の内城館跡の範囲である。市道内において下水道工事の計画が生じたことから土工事の際に立会いを行い、遺跡の状況を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。対象地中央付近で河川跡が確認された。

(6) 考察

対象地は、吉野川の派流跡とみられる低地の南側に発達した自然堤防にあたると思われる。下水道工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。掘削現場での確認不足を補うため松沢地区(宮原)の排土場に排出された土も随時確認したが遺物の混入は確認されなかった。

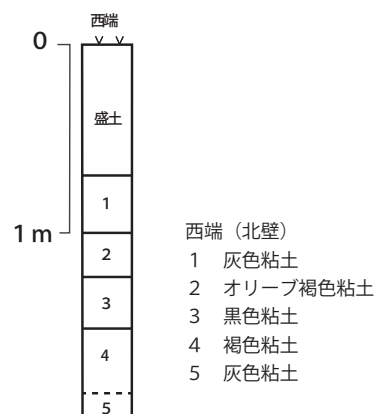
工事地西端では掘底まで粘土層の堆積がみられたが、工事地中央付近では幅広い範囲で地表下約2m以下に礫層の堆積が見られた。河川跡と思われ、礫層が存在する範囲から、河川は北から南方向へ流れていたと思われる。

工事地中央付近は自然堤防の微高地となっているが、川の流路であった時期もあることが判明した。調査地北側で自然堤防と低地の境となっている道路を見ると、平面上、南側に凹形に屈曲している。この形状は、今次確認された河川跡に関係すると考えられる。

遺跡名の元となった字名「内城」は、県中世城館遺跡調査では「ないじょう」と読んでいるが、隣接字名が「鵜之木」や「卯ノ木浦」であることから「うのき」と読む可能性もある。また、天明元年の古文書では「まないじょう」という地名があったことが報告されている(鍋田郷土史)。「まない」は真名井の可能性もあり、隣接地区名の俎柳なまいたやなぎとの関連も考えられる。稲荷森古墳や南森が近いことから何らかの水に関連した祭祀遺跡がある可能性も視野に入れておく必要がある。



第137図 内城館跡開発予定位置図 S=1/5000



第138図 内城館跡柱状図 S= 1/40

9 高梨字畑田

- (1) 調査日 平成 29 年 9 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市高梨字畑田 587-9
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

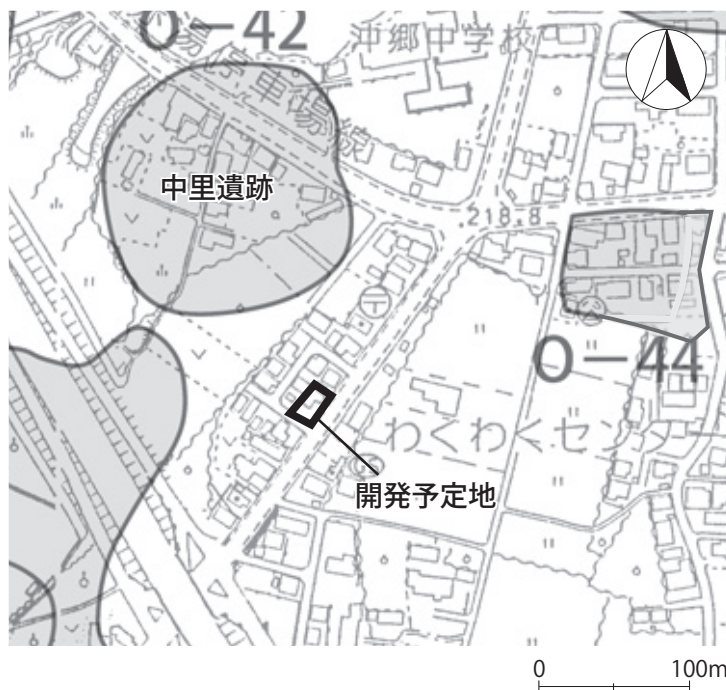
対象地は、中里遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから、住宅新築に係る土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

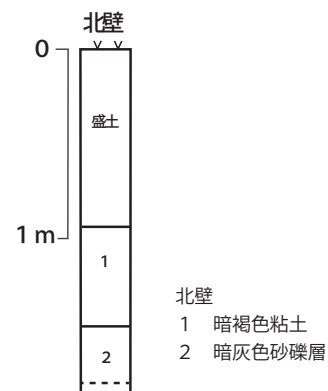
基礎工事の掘削は盛土内で収まることから、深掘りを行う浄化槽工事の際に土層と遺跡の有無を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。中里遺跡は対象地までは広がらないと考えられる。

(6) 考察

対象地は、旧吉野川左岸の後背湿地にあたり、中里遺跡の南東約 60m に位置する。浄化槽工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。土層から、旧水田盤土層下は砂礫層であり、河川跡であったと思われる。



第 139 図 高梨字畑田開発予定位置図 S=1/5000



第 140 図 高梨字畑田柱状図 S= 1/40

10 ^{はぎゅうだ} 萩生田遺跡

(1) 調査日 平成 29 年 12 月 21 日

(2) 調査場所 南陽市萩生田字白山

(3) 調査原因 民間開発 (93 条)

(4) 調査方法及び内容

対象地は、萩生田遺跡の範囲内である。倉庫施設の増築計画が生じたことから、工事立会を行い、遺跡の状況を確認する。土層確認のため掘削範囲内にサブトレンチを設定し、第 4 層上面まで掘り下げた。下層はボーリングステッキを用いて確認した。

(5) 結果

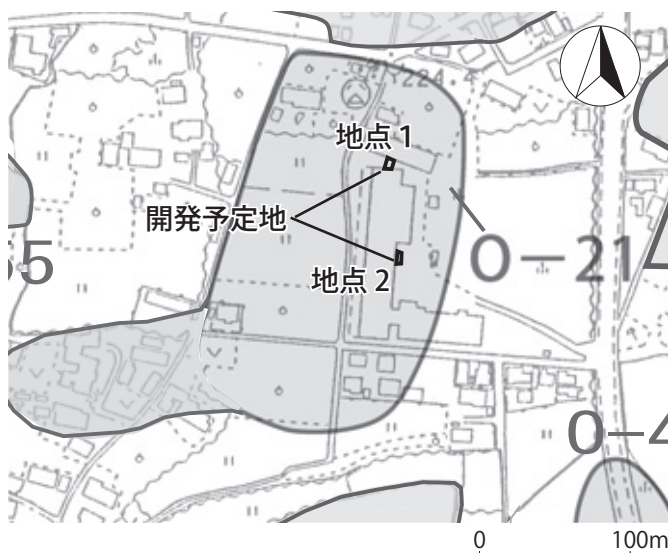
掘削は、ほぼ盛土内で収まっており、自然堆積層 (第 1 層) 上面を掘底とする。遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考察

対象地は、吉野川旧河道右岸の自然堤防にあたる。萩生田遺跡は、弥生～奈良時代の遺跡である。対象地から西へ約 50m の地点から石包丁 1 点が出土し、周辺では弥生土器、金環、奈良時代の須恵器等が出土している。対象地の現地表面は西側の水田より約 70cm 高くなっており、自然堤防上にさらに盛土している状況と考えられた。

今次掘削深度では、遺構・遺物は確認されなかった。

土層状況は現地表面下約 90cm まで盛土・攪乱層が見られ、その下層に褐色粘質砂層が現れる。平成 27 年度に対象地の北約 50m で実施した試掘調査では地表面下 40cm で同層に対比できる層 (T T 1 第 2 層) が確認されていることから、対象地は旧表土及び第 1 層が削平されていると推定される。従前の調査から、遺構面があるとすれば、第 3 層より約 20cm 下と考えられる。



第 141 図 萩生田遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第 142 図 萩生田遺跡柱状図 S= 1/40

11 宮内字大清水

- (1) 調査日 昭和62年9月19日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字大清水 4671-51
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、大清水遺跡の隣地である。個人住宅新築工事の際に遺物が出土したとの連絡を受け、昭和62年に立会調査を行ったものである。遺跡台帳整理の際に当該記録が発見された。従来未報告であり、遺跡範囲に関わる調査であることから報告を行う。

(5) 結果

深掘りの際に須恵器片等が出土した。大清水遺跡の範囲を修正する必要がある。

(6) 考察

対象地は、宮内扇状地の扇央部にあたる。沖郷条里制が施行されたと推定されている範囲に位置する。調査地の北西に所在する大清水神社は、南部の水田に水を供給する用水路の要ともいべき地点に所在する。宮内扇状地の湧水地点でもあり、その清水は古くから熊野大社の神事に用いられている。

個人住宅工事で深掘りした（地表下1.3～1.5m）際に遺物が出土した。出土層位は不明である。遺物は、平安時代の土師器及び須恵器で、狭い範囲から比較的多くの遺物が見つかることから住居跡等の遺構があった可能性も考えられる。周知の大清水遺跡は警察アパート建設工事の際に偶然発見され、周辺は住宅地であることから遺跡範囲が明確になっていないが、少なくとも今回確認された地点までは遺跡が広がっていると考えられ、遺跡範囲の修正が必要である。



第143図 大清水遺跡開発予定位置図 S=1/5000 0 100m

V わのやま 上野山古墳群測量調査

1 調査概要と目的

- (1) 調査期間 平成 29 年 9 月 28 日～平成 30 年 3 月 28 日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字狸沢山～字大沢山
- (3) 調査目的

対象地は、通称「上野山」と呼ばれる山地である。上野山古墳群は、奈良時代の墳墓である終末期古墳群として昭和初期から知られていたが、葡萄園の開墾で多くの古墳が破壊されている。近年、周辺農地の廃園とともに山林荒廃が進んでおり、遺跡保護を図るために古墳の位置と周辺環境の把握、未確認古墳の調査が課題となった。遺跡台帳を整備し、今後遺跡保護を行うため地図等の作成を行うこととした。

2 調査方法

調査地の現況は、山林、果樹園、耕作放棄地で民有地であることから、落葉後に航空レーザー測量及び現地での補助測量を実施した。

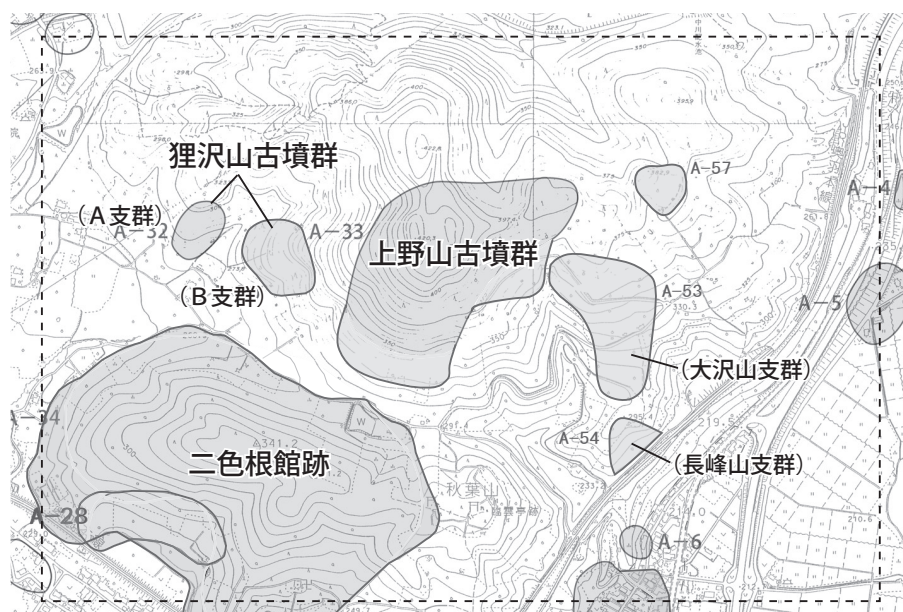
3 測量方法と経過

測量計画は、GNSS 衛星配置等を考慮し、計測諸元、飛行コース、GNSS 基準局の設置場所及びGNSS 観測について作成し、1 m×1 mに4点の計測データを取得するものとした。測量機材は、必要に応じ「公共測量作業規定の準則」に定める検定を第三者機関より受けたものを使用した。

3次元航空レーザー測量は航空レーザー計測システム及びGNSS/IMU装置を搭載した回転翼機を用いて実施した。調査範囲内を4コースで対地高度500m、飛行速度72km/hで飛行し計測した。

航空レーザー測量データ（GNSS 基準局のGNSS 観測データ、航空機上のGNSS 及びIMU 観測データ、レーザー測距データ）を統合解析し、地表のレーザー照射位置の三次元座標を求めた。調整用基準点を設定し、三次元計測データを補正した。

補正後のオリジナルデータから、建物や植生等の地物を除去したグランドデータを作成、これを基に等高線データ、赤色立体地図となる地形表現図を作成した。



第 144 図 調査範囲図 S=1/15000 0 20m

4 成果

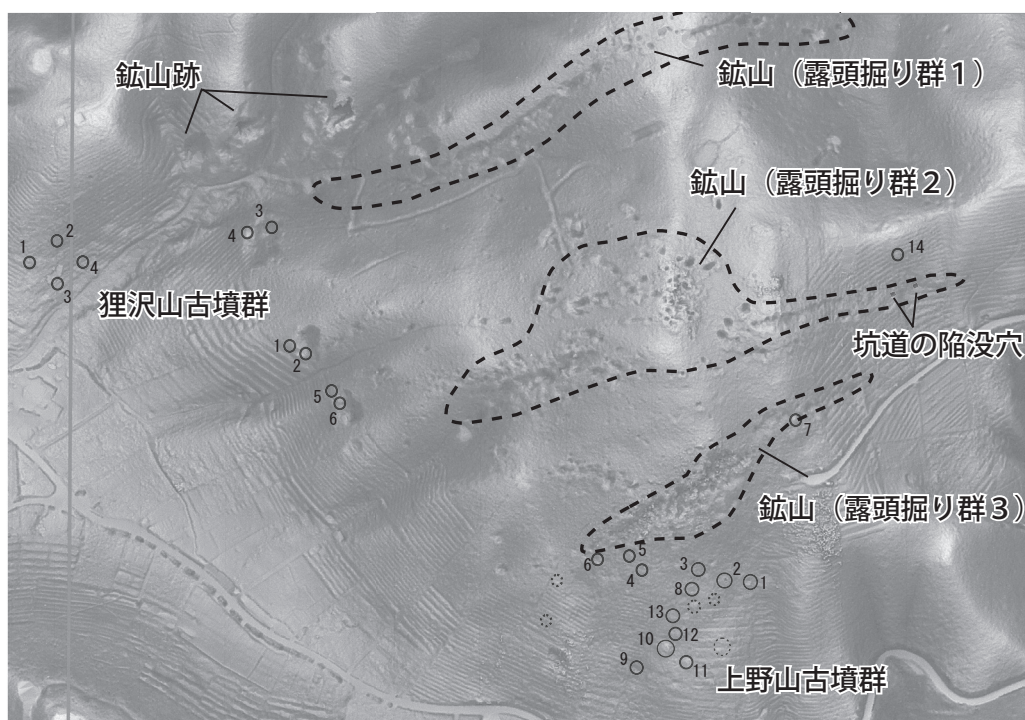
上野山古墳群は、昭和初期からその存在が知られており、昭和 37 年山形県遺跡台帳には「もともと 20 基以上あったと言うが、現在 1ヶ所を残すのみ」と記載されている。昭和 5・6 年頃に郷土史家の新山三郎氏、昭和 28 年に柏倉亮吉氏が調査を行っており、昭和 43 年には市指定文化財に指定されている。平成 26 年から市教育委員会は古墳の所在確認のための踏査を実施し、平成 28 年度時点で従来の古墳群の範囲内で計 15 基の古墳を確認している。円墳とみられるが、墳丘が破壊されているものが多い。

今次測量調査と従前の調査で得られた古墳の位置を照合し、従前の踏査による位置情報の修正が図られた。最も残りの良い 10 号墳付近の斜面にいくつかの隆起が見られ、周知の古墳のマウンドと考えられる。また、天井石が失われ石室が露出している古墳が小さな窪地として表現されている地点もある。また、8 号墳と 13 号墳の間等、未確認の隆起地点（第 146 図 破線）があることから、今後、踏査で古墳かどうか確認する必要がある。

古墳群の周辺環境としては、鉾山関係の掘削跡（試し掘りの他、露頭掘りやひ押し掘りか）が明らかとなり、その分布状況にも一定のまとまりがあることが初めて明らかになった。この上野山鉾山群は近年の分布調査で新たに確認されたもので、時期等は不明である。古墳群と鉾山跡が混在しているため、現地では古墳のマウンドなのか鉾山のズリ山なのか判断が難しい隆起地形が多く、石室のように岩々が重なり合う地点もある。今回、鉾山跡は主に山頂に近い範囲にまとまって分布していると明らかとなった。東西に連続するグループが 3 群確認できる。露頭掘り群 3 の範囲内には、坑道の陥没穴が 2 箇所見られるが、坑道の方位と露頭掘りの分布状況は関連していると思われる。

これに対し、古墳群の分布が見られるのは主に南斜面の中腹付近となっている。今回作成された赤色立体地図は、今後、鉾山由来地形との判別を行ううえで有効と思われる。

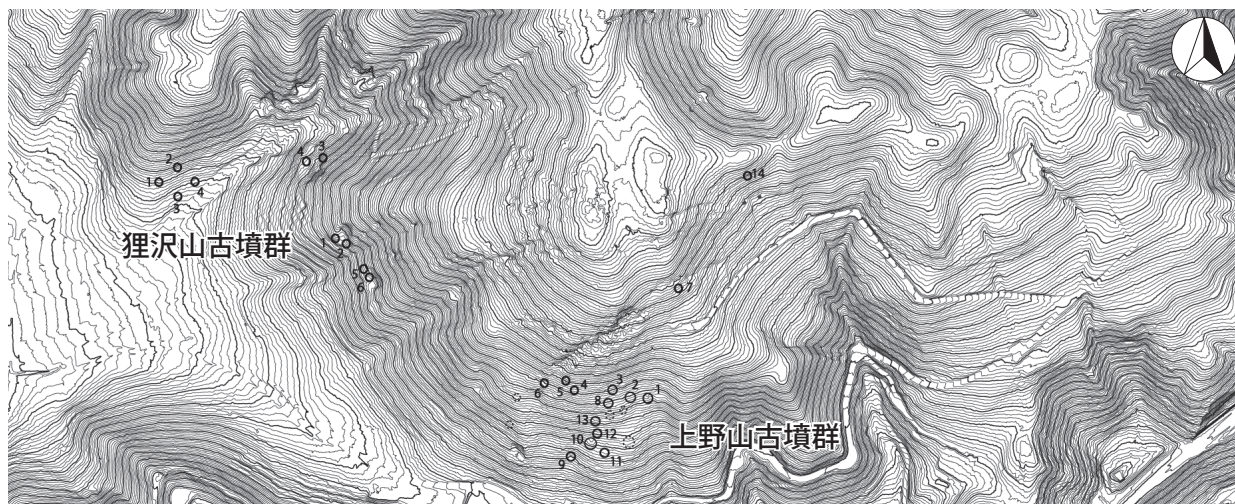
また、古墳群は照葉樹林からなる山地内に位置しており、藪のため上野山全体での全容把握が困難であったが、赤色立体地図から読み取れる限りでは、現在把握している古墳群の範囲外には未確認の古墳は無い、或は現存しないと言えそうである。



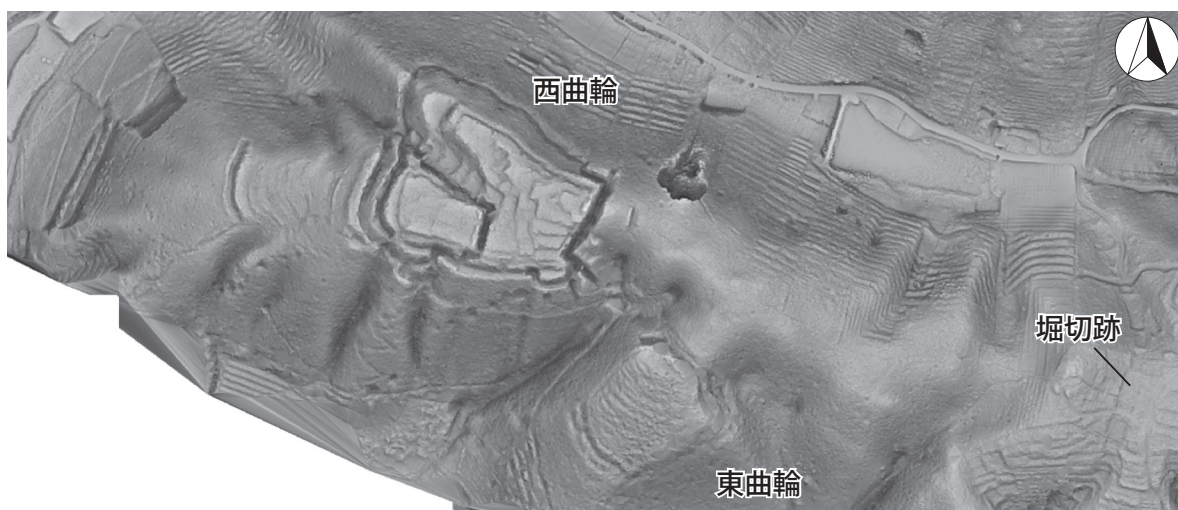
第 145 図 古墳群と鉾山掘削跡

また、二色根館跡の遺構が明確に確認された。館跡は大きく西曲輪と東曲輪から構成されるが、今回、東曲輪の東方、秋葉山にも大きな堀切があることが明らかになった。

二色根館跡への登城口は、尾根沿いに西から登る西口と、南側から二色根館跡の中央部にむかってつづれ織りに登る大手口のほか、西曲輪群と東曲輪群の間にある南沢沿いの南口、北から上る北口の4ヶ所が考えられている。地図からは、南から登る大手口を明瞭に確認することができる。また現況での北口の道は、途中に大きな鉾山跡があり、鉾山関係の作業道としても使用されたとみられる。



第 146 図 古墳分布図



第 147 図 二色根館跡

引用・参考文献

- 小林貢 (1892) 「明治 25 年赤湯温泉誌」
- 山形県教育委員会 (1985) 「沢田遺跡発掘調査報告書」
- 南陽市史編さん委員会 (1985) 「南陽市史編さん資料 第 14 号」
- 南陽市史編さん委員会 (1987) 「南陽市史 考古資料編」、(1990) 「南陽市史 上巻」、(1991) 「南陽市史 中巻」、(1992) 「南陽市史 下巻」
- 山形県教育委員会 (1995) 「山形県中世城館遺跡調査報告書第 1 集」
- 南陽市・南陽市教育委員会 (1997) 「白竜湖 一山形県指定天然記念物の動植物生息調査報告書一」
- 山形県教育委員会 (1990) 「押出遺跡発掘調査報告書」
- 山形県埋蔵文化財センター (1998) 「植木場一遺跡発掘調査報告書」
- 加藤和徳 (2006) 「南陽市の板碑」
- 山形県埋蔵文化財センター (2008) 「中落合遺跡発掘調査報告書」
- 山形県埋蔵文化財センター (2009) 「加藤屋敷発掘調査報告書」
- 南陽市教育委員会 (2013) 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第 6 集 郡山遺跡群 富貴田遺跡 発掘調査報告書」
- 阿子島功 (2015) 押出遺跡の古環境と生活面。縄文時代前期遺跡シンポジウム資料 p.90-97
- 南陽市教育委員会 (2016) 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第 12 集 唐越遺跡」
- 南陽市教育委員会 (2016) 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第 13 集 南陽市遺跡分布調査報告書 (4)」
- 南陽市教育委員会 (2017) 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 南陽市遺跡分布調査報告書 (5)」
- 76 南陽市教育委員会 (2017) 「南陽市埋蔵文化財調査報告書第 14 集 沢田遺跡発掘調査報告書」

沢田遺跡 (TT11) 土壌 自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

沢田遺跡は山形県南陽市の郡山地区および島貫地区に所在し、南北に走る吉野川旧河道両岸の後背湿地内に形成された集落址である。発掘調査では、奈良～平安時代の竪穴住居跡などが確認されている。本分析調査では、奈良・平安時代の水田とされる層位の花粉分析と植物珪酸体分析を行い、当時の稲作や古環境に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、トレンチ 11 北壁の 3 層、4 層、6 層の 3 点である。添付資料によれば、3 層が暗オリーブ色砂質粘土、4 層が暗オリーブ色粘土、6 層が暗灰色粘土を含む黒褐色粘土で、6 層が水田の可能性があるとされている。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液 (臭化亜鉛, 比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算) を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める (100 単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表 1 に示す。分析を行った 3 試料ともに分析残渣が少ないため、すべての残渣を検鏡している。いずれの試料も花粉化石は少なく、保存状態も悪い。マツ属、スギ属、サワグルミ属—クルミ属、エノキ属—ムクノキ属、ヨモギ属、キク亜科がわずかに認めら

表 1. 花粉分析結果

種 類	北壁		
	3層	4層	6層
木本花粉			
マツ属	3	-	-
スギ属	-	1	-
サワグルミ属—クルミ属	-	1	-
エノキ属—ムクノキ属	1	-	-
草本花粉			
ヨモギ属	-	-	1
キク亜科	-	1	-
シダ類孢子			
他のシダ類孢子	91	194	3

れる程度である。シダ類胞子は、3層と4層で比較的多くみられるが、保存状態は悪い。花粉化石、シダ類胞子以外の残渣は、微粒炭と分析で排除できなかつた鉱物粒がみられる。

(2) 植物珪酸体

結果を表2、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。分析を行った3試料は植物珪酸体含量が概して少ない。乾土1gあたりの換算値は、6層は9,200個/g、上位の4層は4,400個/g、3層は8,400個/gである。

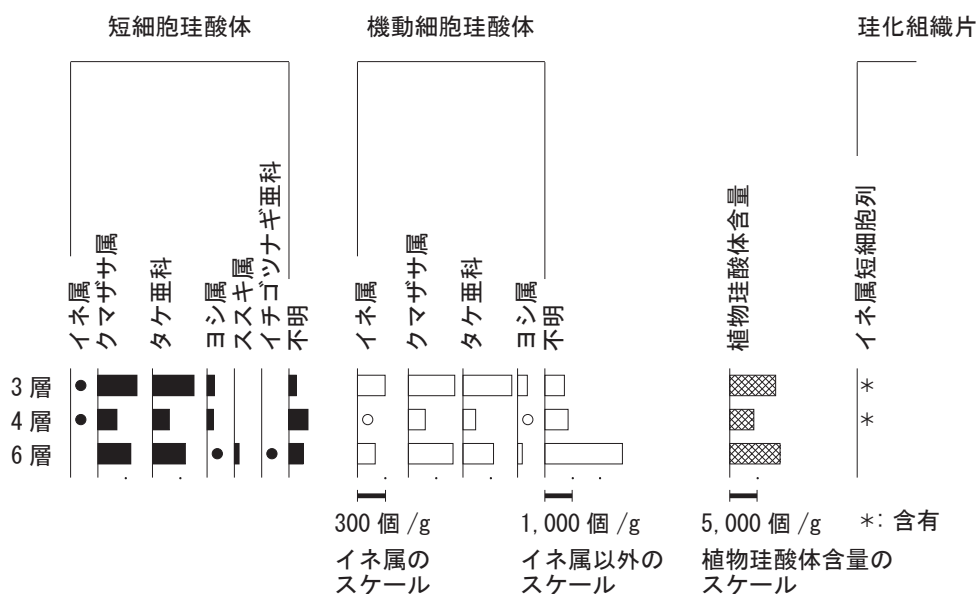
栽培植物のイネ属は各層位で見られるものの、その含量は少ない。6層では機動細胞珪酸体のみが見られ、その含量は200個/gである。上位の4層は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が見られ、ともに100個/g未満である。3層も短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が見られ短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が300個/gである。4層と3層では、葉部の短細胞列も検出される。

この他に、各層位でクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属が認められる。6層では、これらに加えてススキ属やイチゴツナギ亜科も見られる。

表2. 植物珪酸体含量 (個/g)

分類群	北壁		
	3層	4層	6層
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ属	<100	<100	-
クマザサ属	1,400	700	1,200
タケ亜科	1,500	600	1,200
ヨシ属	300	200	<100
ススキ属	-	-	200
イチゴツナギ亜科	-	-	<100
不明	300	700	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ属	300	<100	200
クマザサ属	1,700	600	1,600
タケ亜科	1,800	500	1,100
ヨシ属	400	<100	200
不明	700	900	2,800
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,600	2,300	3,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,800	2,100	5,900
植物珪酸体含量	8,400	4,400	9,200
珪化組織片			
イネ属短細胞列	*	*	-

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
 <100: 100個/g未満
 -: 未検出, *: 含有



乾土1gあたりの個数で示す。この図ではイネ属の産出を強調している。

●○は100個未満を定性的に示す。

4. 考察

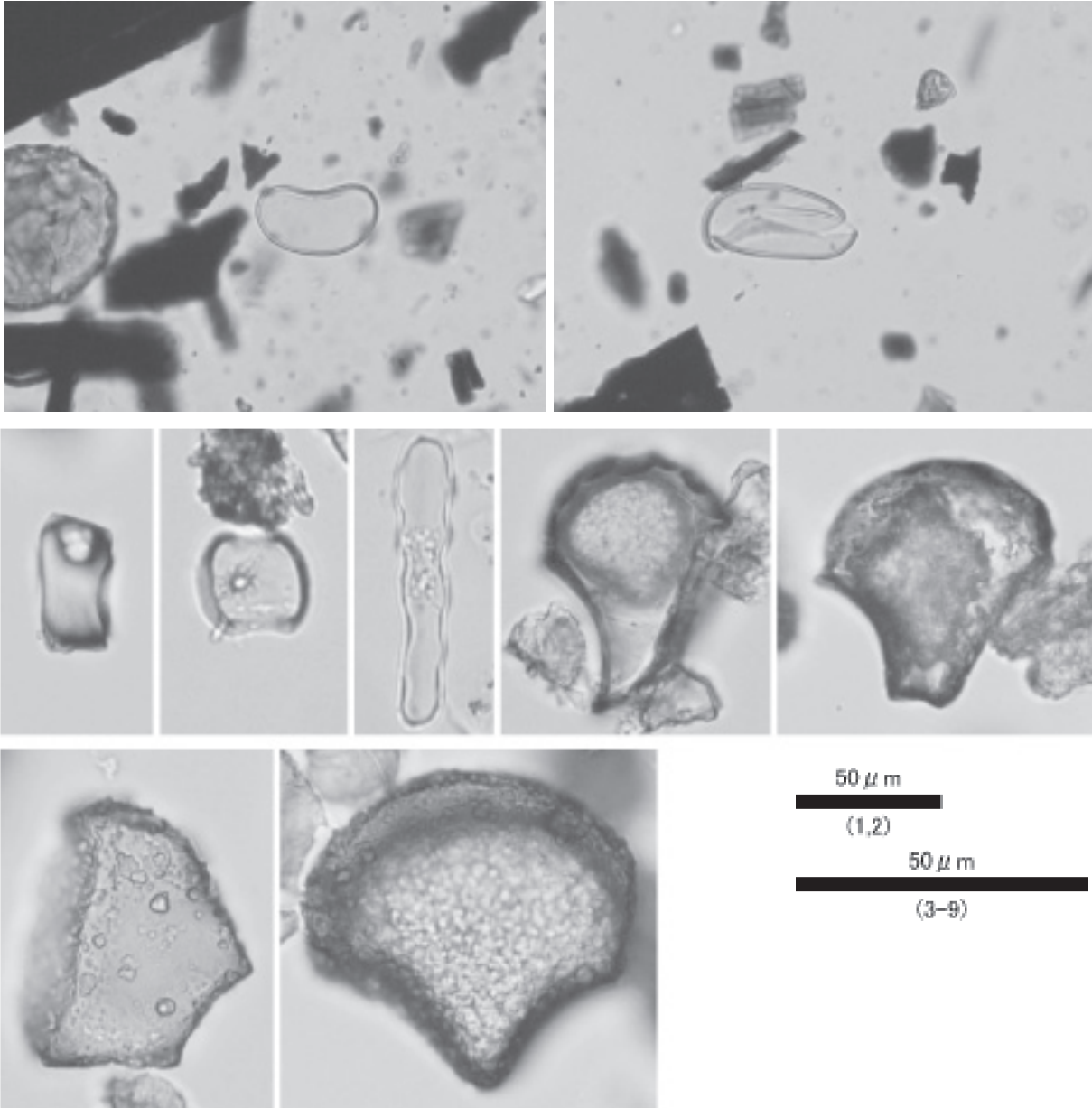
花粉化石群集の保存状態をみると、全体的に悪い。また、花粉化石を含む分析残渣が少ないことから、土壌 1g あたりの花粉数は 1 個未満である。花粉は、埃の一部として空中に多数存在する(いわゆる空中花粉)ことから、試料採集時にこれらの混入は避けられない。花粉化石が十分に多い土壌では、土壌 1g あたり数百～数万個含まれるため、誤差の範囲内に埋没するが、花粉化石をほとんど含まない土壌では、汚染の影響を受けることになる。今回検出された花粉化石は、当時のものか、後代の汚染の影響によるかの区別がつかないことから、検出された花粉化石から当時の環境を推定することは差し控えたい。なお、今回の試料ではシダ類胞子が多い。シダ類胞子は、花粉に比べ、スポロポレニンの量が多く(Stanley&Linskens,1974)、風化に対する耐性がある(徳永・山内,1971)。このことから、花粉化石の大部分は風化により失われていると考えられ、周辺植生との関連性は薄い。

一方植物珪酸体をみると、水田層の可能性が指摘される 6 層では、栽培植物のイネ属が産出したものの、機動細胞珪酸体がわずかにみられる程度である。また上位層でもイネ属が産出しているが少ない。植物珪酸体の風化に関しては、不明な部分も多いが、古い堆積物ほど風化が進み、量が少なくなると考えられている(近藤,2010)。花粉化石の状態からみて、植物珪酸体も風化によって失われた可能性がある。ただし、少量ではあるが、イネ属珪酸体が検出されること、発掘調査において畦畔の可能性のある断面が観察されていることから、6 層以降稲作が行われていたことが推測される。その他、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科が生育していたと考えられることから、周辺は開けた環境であったことが想定され、開発により切り開かれた可能性がある。なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量も多い(近藤,1982; 杉山・藤原,1986)。さらに、植物珪酸体の保存状態が悪い点を考慮すれば、タケ亜科の周辺植生における割合は植物珪酸体が示すほど高くなかったと思われる。

引用文献

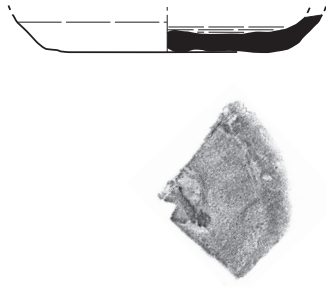
- 近藤 鍊三,1982,Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和 56 年度科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書,32p.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- 杉山 真二・藤原 宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学,19,69-84.
- Stanley R.&Linskens H.,1974,Pollen: biology, biochemistry, management, Springer-Verlag,307p.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社,50-73.

図版1 花粉化石・植物珪酸体

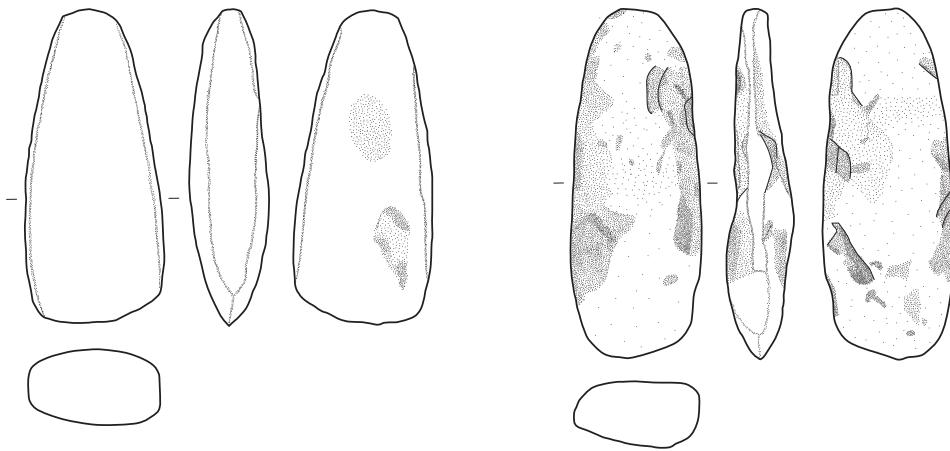
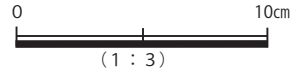


- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. 花粉分析プレパラート内の状況（北壁；第3層） | 2. 花粉分析プレパラート内の状況（北壁；第4層） |
| 3. クマザサ属短細胞珪酸体（北壁；第4層） | 4. ヨシ属短細胞珪酸体（北壁；第3層） |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（北壁；第6層） | 6. イネ属機動細胞珪酸体（北壁；第3層） |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体（北壁；第6層） | 8. クマザサ属機動細胞珪酸体（北壁；第3層） |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体（北壁；第3層） | |

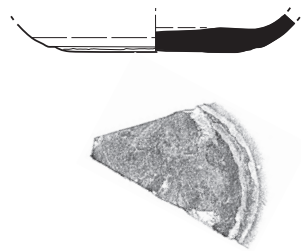
図 版



第1図 大塚遺跡隣地 出土遺物 S=1/3

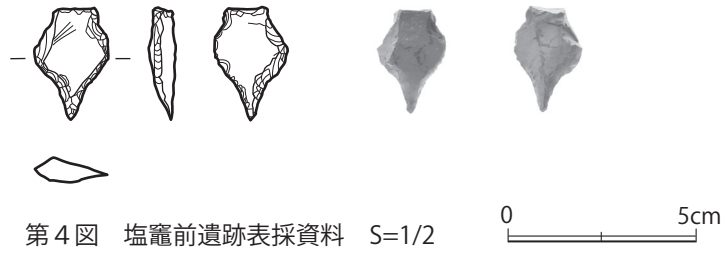


第2図 大塚遺跡隣地 TT2 出土遺物 S=1/3



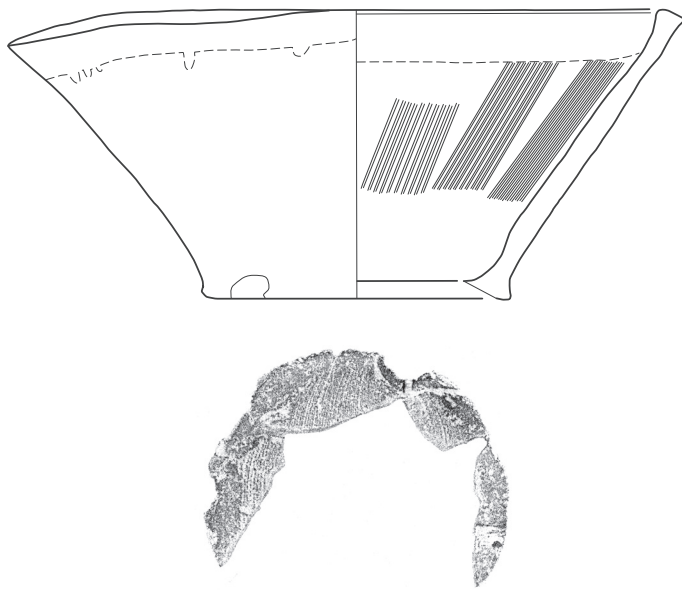
第3図 植木場一遺跡 TT1 ST1 覆土出土遺物 S=1/3





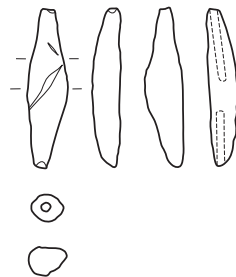
第4図 塩竈前遺跡表採資料 S=1/2

0 5cm



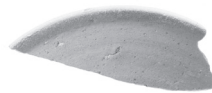
第5図 東畑A遺跡TT2 SP1 出土遺物 S=1/3

0 10cm
(1:3)

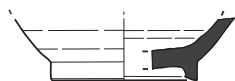


第6図 東畑A遺跡TT3 ST1 覆土 出土遺物 S=1/3

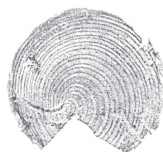
0 10cm
(1:3)



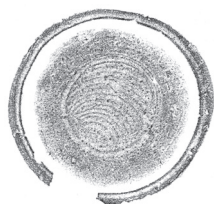
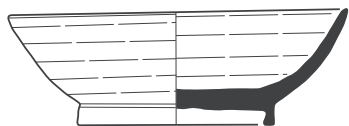
第7図 沢田遺跡 TT2 出土遺物 S=1/3



第8図 沢田遺跡 TT8 第3層上面攪乱層 出土遺物 S=1/3

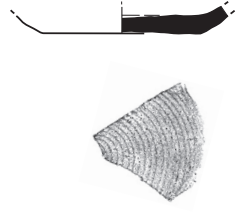


第9図 沢田遺跡 TT8 第3層（第3文化層下） 出土遺物 S=1/3

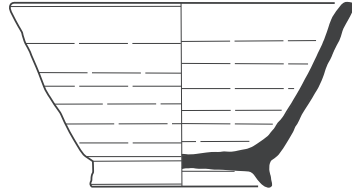
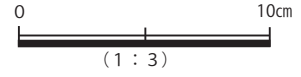


第10図 沢田遺跡 TT8 第4文化層上面 出土遺物 S=1/3

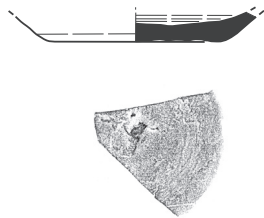




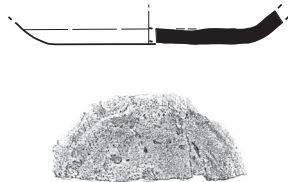
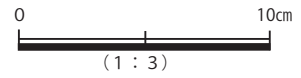
第 11 図 沢田遺跡 TT10 出土遺物 S=1/3



第 12 図 沢田遺跡 TT10 SD1 覆土最下層 出土遺物 S=1/3



第 13 図 沢田遺跡 TT10 第 3 文化層上面 出土遺物 S=1/3



第 14 図 沢田遺跡 TT10 第 3 文化層上面覆土 出土遺物 S=1/3





西中上遺跡（南西から）



天ヶ澤館跡 横堀（南から）



秋葉山（神社西側、南から）



玉坂山東部尾根頂（西から）



玉坂山 方形の尾根（南から）



宮内字武道作山 尾根（南から）



宮内字武道作山 板碑（南東から）



梨郷字山泉寺尾根頂（北から）



宮内字内原（東北から）



小岩沢炭焼窯跡（東から）



小岩沢炭焼窯跡（北から）



岩部山館跡北西曲輪群 南側（南から、祠有）



岩部山館跡北西曲輪群最高所から南方向



岩部山館跡北西曲輪群 堀切部（北から）



日影館跡東側（南から）



日影館跡主郭頂（西から）

図版6 宮内字内原、小岩沢炭焼窯跡、岩部山館跡、日影館跡



上野山館跡 西曲輪北斜面テラス (西から)



上野山館跡主郭北斜面 (西から)



上野山館跡 「中山」 (東から)



「東山」南斜面 (古墳推定地、東から)



上野山館跡 土塁状地形 (北から)



上野山館跡 物見 (北から)



土平地区岩石採集場 (西から)



三間通字桑旗前 マウンド (東から)

図版7 上野山館跡、土平地区岩石採集場、三間通字桑旗前



太子堂遺跡調査地（東から）



太子堂遺跡T T 1（東から）



太子堂遺跡T T 2（西から）



太子堂遺跡T T 3（西から）



大橋城跡調査地近景（東から）



大橋城跡T T 1（東から）



東唐越館跡調査地南半近景（西から）



東唐越館跡調査地北半近景（西南から）

図版8 太子堂遺跡、大橋城跡、東唐越館跡



東唐越館跡 T T 1 (東から)



東唐越館跡 T T 2 (南から)



東唐越館跡堀跡 (西から)



大塚遺跡隣地 地点1 (南から)



大塚遺跡隣地 地点2 (東から)



大塚遺跡隣地 TP1 (北から)



大塚遺跡隣地 T T 2 (東から)



大塚遺跡隣地 T T 2 石斧出土状況 (西から)



高梨字北之前調査地（西から）



高梨字北之前 T T 1 (南から)



高梨字北之前 T T 2 (南から)



高梨字北之前 T T 3 (南から)



観音堂遺跡隣地調査地(南から)



観音堂遺跡隣地 T P 1 (北から)



観音堂遺跡隣地 T P 2 (北から)



観音堂遺跡隣地 T P 3 (北から)



観音堂遺跡隣地 T P 3 (北から)



宮内字八幡田二調査地 (南から)



宮内字八幡田二 T T 1 (北から)



宮内字黒木二調査地 (東から)



馬場跡東堀跡 (北から)



馬場跡西堀跡 (北から)



宮内字黒木二 T T 1 (西から)



宮内字黒木二 T T 2 (西から)



宮内字黒木二 T T 3 (東から)



宮内字黒木二 T T 4 (東から)



宮内字黒木二 T T 5 (東から)



宮内字黒木二 T T 6 (東から)



宮内字黒木二 T T 7 (東から)



宮内字黒木二 T T 8 (西から)



植木場一遺跡調査地 (東から)



植木場一遺跡 T T 1 (東から)



植木場一遺跡 T T 2 (東から)



砂塚字西塩釜調査地 (北から)



砂塚字西塩釜 T T 1 (東から)



中落合遺跡調査地 (北から)



中落合遺跡 T T 1 (南から)



中落合遺跡 TP 2 (南から)



中落合遺跡 T T 3 (南から)



中落合遺跡 T T 4 (北から)



中落合遺跡 T T 4 東壁 (西から)



中落合運河跡 (西から)



東畑 A 遺跡 (1) 調査地 (西南から)



東畑 A 遺跡 (1) T T 1 (西から)



東畑 A 遺跡 (1) T T 2、ST2 (東から)



東畑 A 遺跡 (1) T T 3 (東から)



東畑 A 遺跡 (1) T T 3 追加トレンチ (北から)



東畑 A 遺跡 (2) 調査地 (東から)



東畑 A 遺跡 (2) T T 1 (東から)



東畑 A 遺跡 (2) T T 2 (東から)



東畑 A 遺跡 (2) T T 3 (北から)



沢田遺跡 (1) 調査地 (南東から)



沢田遺跡 (1) T T 1 (南から)



沢田遺跡(1) T T 2 (南から)



沢田遺跡(1) T T 3 (東から)



沢田遺跡(1) T T 3 道路跡断面 (南から)



郡山字間々上一調査地 (北東から)



郡山字間々上一 T T 1 (東から)



法師柳字漆房調査地 (南から)



法師柳字漆房 T T 1 (北から、深堀前)



法師柳字漆房 T T 2 (南から)



唐越遺跡工事立会（東から）



唐越遺跡調査地（南から）



唐越遺跡T T 1（北から）



唐越遺跡T T 2（西から）



唐越遺跡T T 3（東から）



唐越遺跡T T 4（北から）



間々上遺跡調査地（西から）



間々上遺跡T T 1（南から）



間々上遺跡 T T 2 (南から)



沢田遺跡 (2) 調査地 (東から)



沢田遺跡 (2) T T 1 (北から)



沢田遺跡 (2) T T 2 (東から)



沢田遺跡 (2) T T 3 (北から)



沢田遺跡 (2) T T 4 (北から)



沢田遺跡 (2) T T 5 (北から)



沢田遺跡 (2) T T 6 (北から)



沢田遺跡(2) T T 8 (西から)



沢田遺跡(2) T T 10 第1文化層遺構検出(南から)



沢田遺跡(2) S D 1 (東から)



沢田遺跡 T T 10 第2文化層 (南から)



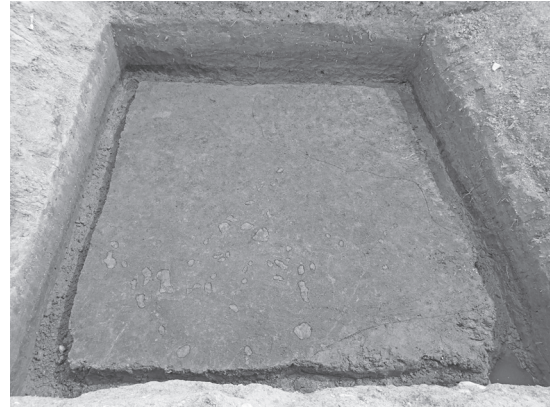
沢田遺跡(2) T T 10 第3文化層(北から)



沢田遺跡(2) T T 10 S B 1 (東から)



沢田遺跡(2) T T 11 第3文化層遺構検出 (南から)



沢田遺跡(2) T T 11 第4文化層遺構検出 (西から)



沢田遺跡(2) TT11 ST1ベルト(西から)



沢田遺跡(2) TT11 ST1完堀(東から)



沢田遺跡(2) TT11 足跡(東から)



沢田遺跡(2) TT11 畦畔、溝、足跡(東から)



沢田遺跡(2) TT11 サブトレンチ壁(南から)



沢田遺跡(2) TT12(西から)



沢田遺跡(2) TT13(南東から)



沢田遺跡(2) TT10 砂礫確認トレンチ(南から)



東六角遺跡調査地（東北から）



東六角遺跡TT1（南から）



東六角遺跡TT2（西から）



東六角遺跡TT2 SD1（南から）



芹ヶ窪遺跡調査地（東から）



芹ヶ窪遺跡TT1（南から）



芹ヶ窪遺跡TT2（南から）



芹ヶ窪遺跡TT1 残根（南から）



郡山字長巻調査地（東から）



郡山字長巻T T 1（東から）



北町遺跡調査地（北東から）



北町遺跡調査地（東から）



北町遺跡サブトレンチ 1（南から）



北町遺跡サブトレンチ 2 東壁（西から）



北町遺跡T T 1（南から）



北町遺跡T T 1 集石遺構（西から）



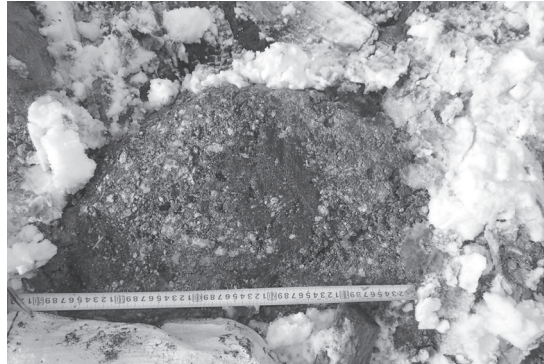
北町遺跡立会い（南から）



北町遺跡立会い 第15層検出（東から）



北町遺跡立会い 掘底（西北から）



北町遺跡 排土場粘土塊（天地逆）のピット



川樋字五十匁調査地（東から）



川樋字五十匁掘削状況（東から）



蒲生田山古墳群調査地（北から）



蒲生田山古墳群調査地 盛土状況（北から）



蒲生田山古墳群 遺物散布地点 (南から)



蒲生田山古墳群 遺物散布地点 (北から)



宮内字大壇調査地 (南東から)



宮内字大壇 掘削状況 (東から)



二色根字起田 工事状況 (西から)



岩屋堂2遺跡 (南から)



長岡字清水尻 工事状況 (西から)



北町遺跡隣地 工事状況 (北から)



内城館跡 工事状況（西から）



高梨字畑田 工事状況（東から）



萩生田遺跡 工事状況（西から）



大清水遺跡工事地



大清水遺跡 遺物出土地点

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 18 集
南陽市遺跡分布調査報告書（6）
2018 年 3 月 3 1 日

発行 南陽市教育委員会
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地の 1
電話 0238-40-3211（代）

印刷 南陽印刷株式会社
〒 999-2221 山形県南陽市二色根 5 - 11
電話 0238-43-3028

